

Oracle® Hyperion Disclosure Management

User's Guide

リリース 11.1.2.4.000

著作権情報

Oracle® Hyperion Disclosure Management User's Guide, 11.1.2.4.000

Copyright © 2007, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

| | |
|---|-----------|
| ドキュメントのアクセシビリティについて | 7 |
| ドキュメントのフィードバック | 8 |
| 第1章. Oracle Hyperion Disclosure Managementについて | 9 |
| Disclosure Managementの概要 | 9 |
| XBRLの理解 | 9 |
| タクソノミの使用 | 10 |
| 第2章. XBRLプランニングの考慮事項 | 11 |
| Disclosure Managementの統合 | 11 |
| XBRLおよび規制リソース | 11 |
| 第3章. 財務サービスからのデータの取得 | 13 |
| レポート・レベルまたはデータ・ソースのマッピング | 13 |
| Smart Viewでのデータ・ソースのマッピング | 14 |
| Smart ViewとDisclosure Management間の移動 | 15 |
| データ・ソースの選択 | 15 |
| スマート・スライス関数グリッドの挿入 | 16 |
| Financial Reporting関数グリッドの挿入 | 16 |
| 第4章. 構成オプション | 19 |
| サーバー情報の設定 | 19 |
| プレビュー・オプション | 20 |
| 公開オプション | 21 |
| 検証 | 21 |
| マッピング | 21 |
| 第5章. エクスプローラの使用 | 23 |
| ドキュメントのオープンおよびチェックアウト | 23 |
| エクスプローラでの新規フォルダの追加 | 24 |
| エクスプローラからのファイルのダウンロード | 24 |
| エクスプローラへのファイルのアップロード | 25 |
| エクスプローラでのドキュメントの削除 | 25 |
| エクスプローラでのドキュメントの名前変更 | 25 |
| 権限の設定 | 25 |
| ドキュメントの以前のバージョンの表示 | 26 |
| エクスプローラでのアーティファクトの検索 | 26 |
| ドキュメントの変更内容の比較 | 26 |
| 第6章. XBRLインスタンス・ドキュメントの生成 | 29 |
| XBRLインスタンス・ドキュメントの生成 | 29 |
| Disclosure Managementサーバーへの接続 | 30 |
| ドキュメントの移行 | 30 |
| ドキュメントの登録 | 31 |

| | |
|---|----|
| 財務諸表データの表示 | 31 |
| タクソノミへの財務レポートのマッピング | 31 |
| Disclosure Managementのインタフェース | 31 |
| リボンおよびメニュー | 35 |
| Disclosure Managementマッピング・ツールの各タブへの移動 | 35 |
| Disclosure Managementマッピング・ツールのメニューへの移動 | 36 |
| XBRLタクソノミ概念について | 36 |
| タクソノミの選択 | 36 |
| タクソノミ言語の変更 | 37 |
| タクソノミ・ビュー | 37 |
| タクソノミ・ビューの変更 | 38 |
| 表示ビュー | 38 |
| 計算ビュー | 39 |
| 定義ビュー | 39 |
| ディメンション・ビュー | 39 |
| タプル・ビュー | 39 |
| マッピングの概念 | 39 |
| マップされた概念の除去 | 40 |
| クイック・マッピング | 41 |
| NIL値のマッピング | 41 |
| タクソノミのリフレッシュ | 41 |
| 概念詳細の表示 | 41 |
| タクソノミの変更 | 42 |
| タクソノミ概念の検索 | 43 |
| XBRLコンテキストについて | 44 |
| XBRLコンテキストの追加 | 44 |
| コンテキストのマッピング | 45 |
| マップされたコンテキストの除去 | 45 |
| コンテキストの更新 | 46 |
| コンテキストの削除 | 46 |
| コンテキストの検索 | 46 |
| コンテキスト詳細の表示 | 47 |
| XBRL単位について | 47 |
| XBRL単位の追加 | 48 |
| 単位のマッピング | 49 |
| マップされた単位の除去 | 49 |
| 単位詳細の更新 | 49 |
| 単位の削除 | 50 |
| 単位の検索 | 50 |
| 脚注について | 50 |
| 脚注の追加 | 50 |
| 脚注のマッピング | 51 |
| マップされた脚注の除去 | 51 |
| 脚注の更新 | 52 |
| 脚注の削除 | 52 |
| 脚注のフォーマット | 52 |
| 脚注の検索 | 53 |
| 脚注詳細の表示 | 53 |

| | |
|---|----|
| 変数について | 54 |
| 静的変数の作成 | 54 |
| 参照変数の作成 | 54 |
| 参照変数の検索 | 55 |
| 静的変数のマッピング | 55 |
| 参照変数のマッピング | 55 |
| 参照変数を相互参照としてマップ | 55 |
| 参照変数をページ参照としてマップ | 56 |
| 参照変数をハイパーリンクとしてマップ | 56 |
| 変数リストの表示 | 56 |
| 変数の編集 | 57 |
| 変数の削除および変数マッピングの除去 | 57 |
| ドキュメントでの変数マッピングの表示 | 58 |
| 変数の評価 | 58 |
| ディメンションについて | 58 |
| プライマリ・アイテムのマッピング | 59 |
| ドメインおよびドメイン・メンバーのマッピング | 59 |
| レポート・レベルのマッピング | 60 |
| データ・ソース・レベル・マッピング | 60 |
| ディメンション・マッピングの検証 | 61 |
| ディメンション・マップの格納 | 61 |
| 仮想コンテキスト | 61 |
| コンテキストの管理 | 62 |
| 「コンテキスト」ペイン | 62 |
| インスタンスの生成 | 62 |
| 型付きディメンションの適用 | 63 |
| 型付きディメンション・インスタンスの作成 | 63 |
| Disclosure Managementを使用したEDGAR HTMLの生成 | 64 |
| Disclosure ManagementでのEDGARドキュメントの作成 | 64 |
| フォーマットに関するガイドライン | 65 |
| EDGARのサンプル | 65 |
| タプルについて | 65 |
| タプルの操作 | 66 |
| タプル・ビューの使用 | 66 |
| Disclosure Managementドキュメントのロールオーバー | 67 |
| ブロック・テキストのマッピング | 68 |
| ネストされたタグ | 68 |
| マップされたデータの除去とDisclosure Managementオブジェクトの削除 | 69 |
| XBRLマップの除去 | 69 |
| Disclosure Managementオブジェクト削除の削除 | 71 |
| データ・ソース・アイテムの削除と抑制 | 71 |
| マッピングの確認 | 72 |
| ツリー・ビューまたはリスト・ビューの変更 | 72 |
| レポートのディメンション・マッピングの確認 | 73 |
| マップされたアイテムのプレビュー | 73 |
| ドックレットのページング | 73 |
| ディメンションの編集 | 74 |
| コンテキストおよび単位の変更 | 74 |

| | |
|--|------------|
| 符号の反転の設定 | 74 |
| 値のオーバーライド | 75 |
| 「現在のマッピング」タブでの変更の保存 | 76 |
| マッピングの確認のエクスポート | 77 |
| 数値フォーマットのプレビューおよび変更 | 77 |
| ドキュメントの検証 | 78 |
| 検証エラー・メッセージの表示 | 78 |
| エラー・メッセージの解決 | 79 |
| 確認モードのナビゲーション・オプション | 79 |
| インスタンス・ドキュメントの生成 | 80 |
| マップされたデータの検証 | 81 |
| 検証メッセージのエクスポート | 81 |
| ルール・サポートを使用した検証 | 82 |
| 計算トレースの表示 | 82 |
| 式トレースの表示 | 82 |
| インスタンス・ドキュメントのレンダリング | 83 |
| 自動タクソミ | 83 |
| 複数のタクソミ | 83 |
| IFRSベース・レポート | 83 |
| インスタンス・ドキュメントへのエクスポート | 84 |
| XBRL出力のプレビュー | 85 |
| IXBRLフォーマットのインスタンス・ドキュメントの生成 | 85 |
| インスタンス・ビューアでのインスタンス・ドキュメントの表示(SECまたはその他) | 86 |
| SECビューアのオフラインでの使用 | 87 |
| ルール・サポートを使用した検証 | 87 |
| レポートの複製 | 88 |
| レポートの複製の作成 | 88 |
| 複製したレポートのフォーマットの変更 | 89 |
| レポートのエクスポート | 94 |
| レポートのインポート | 95 |
| ドキュメントのフォーマット | 96 |
| 第7章. マスター・ドキュメントおよびドックレットの操作 | 103 |
| マスター・ドキュメントの使用 | 103 |
| ドックレットの追加 | 104 |
| ドックレットの再配置 | 105 |
| ドックレットのスタンドアロン・レポートの作成 | 105 |
| マスター・ドキュメント内でのドックレットの非表示 | 106 |
| ドックレットの除去 | 106 |
| Microsoft Wordを使用した変更およびドックレットの追跡 | 107 |
| 付録A. XBRLおよびDisclosure Managementの用語集 | 109 |
| 付録B. EDGAR検証メッセージ | 115 |

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracleのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracleサポート・サービスでは、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントへのフィードバックをお送りください: epmdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトでEPM情報開発をフォローできます:

LinkedIn - http://www.linkedin.com/groups?gid=3127051&goback=.gmp_3127051

Twitter - <http://twitter.com/hyperionepminfo>

Facebook - <http://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642>

Google+ - <https://plus.google.com/106915048672979407731/#106915048672979407731/posts>

YouTube - <http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts>

1

Oracle Hyperion Disclosure Managementについて

この項の内容:

| | |
|--------------------------------|----|
| Disclosure Managementの概要 | 9 |
| XBRLの理解 | 9 |
| タクソノミの使用 | 10 |

Disclosure Managementの概要

Oracle Hyperion Disclosure Managementは、規制当局に提出するExtensible Business Reporting Language (XBRL(c))タグが付けられた提出物(SECに提出する10Kや10Qなど)をグラフィカルに作成および編集できるように設計されたツールセットです。Microsoft Excel、Wordまたはデータ・ソース・メタデータにある、財務諸表およびそのサポート情報としてのスケジュールとコメントをまとめ、XBRL、EDGAR、PDFまたはHTML形式でコンテンツにマップして、そのコンテンツを配布できます。さらに、Disclosure Managementでは、マッピング・プロセスの前にタクソノミを変更または拡張できます。複数のタクソノミを使用することもできます。この製品の主な目的は、短いサイクルで必要な重要ドキュメントを一元管理し、開示における不正確さのリスクを大幅に削減することです。

Oracle Hyperion Disclosure Managementでは、次の機能を備えた完全なXBRLの作成および管理のソリューションを提供します:

- 次のもので構成される、企業レベルのXBRLマッピング: Microsoft Office内のレポート・レベル・マッピング; Oracle Smart View for Office; Oracle Hyperion Financial ManagementおよびOracle Hyperion Planning内の再使用可能なデータ・ソース・メタデータ・マッピング; Oracle Essbase。
- XBRLタクソノミの管理、編集および表示。タクソノミ管理には、進化するXBRL規格に企業が容易に対応できるようにするためのタクソノミの拡張が含まれます。更新されたタクソノミを既存のマップに対して使用できます。
- インスタンス・ドキュメントの検証、生成および表示
- XBRLまたはIXBRLでのインスタンス・ドキュメントの生成。

XBRLの理解

XBRLはExtensible Markup Language (XML)に基づいた、無償で使用可能な財務レポート用コンピュータ言語であり、XBRL対応ソフトウェアで生成され、使用されます。データをマップすると、情報の選択、分析、保存および交換が人手ではなくソフトウェアを使用して行われ、このためエラーが減少します。また、XBRLは標準化された言語のため、複数の企業および業種の財務データを、同じ条件で効率的に比較できます。このため、XBRLでは、識別マッピングをデータのアイテムに適用し、アイテムの処理と分析を対話的に行うことができます。XBRLマッピングを使用

することで、金融界では、株式上場企業の財務諸表をデジタル規格ベースで準備、公開、正確に抜粋および自動的に交換することができます。XBRLは、新しい会計基準を設定しません。既存の基準のユーザビリティを拡張するものです。

XBRLタクソノミでは、概念の値がコンテキスト内に定義されるようデータの配置を指定します。たとえば、企業 ACME, Inc.が第1四半期に\$152,623の総利益をレポートしたとします。この情報は、XBRLでは、企業のアイデンティティ(ACME, Inc.)、レポート概念(総利益)、レポート通貨(ドル)、期間および小数点以下の桁数/精度の丸め処理設定として表示されます。

タクソノミの使用

XBRLタクソノミは、XBRLドキュメント作成の中核です。XBRLドキュメントにはビジネスおよび財務ファクトのスナップショットが含まれるのに対して、XBRLタクソノミではこれらのファクトの定義とファクト間の関係が提供されます。タクソノミはXBRLにとっていわば辞書となります。これは、個々のレポート概念(「正味利益」など)、およびそれらの間の関係を定義します。財務レポートの目的が異なる場合は、異なるタクソノミが必要です。各地域の政府では、現地の会計基準を反映する、独自の財務レポート用タクソノミが必要です。NPOや法人などの組織では、独自のビジネス・レポート要件を処理するためのタクソノミが必要です。

XBRLタクソノミでは、多数の個別ビジネス・レポート概念(要素)を表すことができます。それぞれの要素には、ラベル、データ型、有効な残高の種類、およびその他のデータ属性など、要素を定義するための特定の属性があります。

公開されているタクソノミは、一般的な企業または規制当局がレポートする必要のあるタクソノミの大部分を表す標準的タクソノミです。また、XBRLでは、その企業または規制当局に固有のレポート仕様のために、拡張、または公開されているタクソノミへの変更が可能です。

企業は、その国、管轄区域、業種などの対応するタクソノミを使用する必要があります。たとえば、XBRLインターナショナルで正式に認められているUS GAAPタクソノミなどは、次のサイトにリストされています: <http://www.xbrl.org/FRTaxonomies/>

2

XBRLプランニングの考慮事項

この項の内容:

| | |
|--------------------------------|----|
| Disclosure Managementの統合 | 11 |
| XBRLおよび規制リソース | 11 |

Disclosure Managementの統合

XBRLインスタンス・ドキュメントを作成するためにDisclosure Managementをご使用の財務レポート・システムと統合するには、プランニングと組織が必要です。Disclosure Managementをインストールした後、次の各事項を検討し、実行が必要な手順を決定してください:

- タクソノミ評価 - XBRLの申告要件に最も適したタクソノミを評価します。
- トレーニング - XBRLの申告要件、タクソノミ概念、およびDisclosure Managementの使用方法に関して主要人員をトレーニングするプランを実施します。
- XBRLプロジェクト・チーム - 次の機能を実行できるチームを作ります:
 - XBRLプロジェクトの管理
 - 地域の規制ルールおよび組織のレポート要件に関する専門知識の提供
 - XBRLに関する専門知識のデモンストレーション
- マッピング - 財務諸表をマップする作業を引き受ける人員を特定します。
- データ収集 - XBRLインスタンス・ドキュメントに登録される財務データを集計および作成するプロセスを決定します。
- 拡張 - 組織のレポート要件に基づいてタクソノミを拡張する責任を負う人員を指定します。
- 確認 - インスタンス・ドキュメントを確認および検証するプロセスを実施します。インスタンス・ドキュメントは、規制機関がXBRLの提出物に課すすべての追加提出要件に従う必要があります。たとえば、SECには、申告者に対する追加提出基準があります。この提出基準は、XBRL仕様指定されている技術検証に追加されません。Disclosure Managementには、XBRL(仕様への)妥当性を確認する検証機能があり、いくつかの規制および提出基準(SEC、HMRC)が徹底されます。ただし、規制当局による追加の提出基準が必要な場合もあります。

XBRLおよび規制リソース

次のXBRLリソースおよびリンクはオンラインでアクセス可能です:



注:

オラクル社は、後述のサイトに含まれるコンテンツをメンテナンスすることはなく、またそれらをメンテナンスする責任を負うこともありません。

表1 XBRLリンクと説明

| リソース | リンク |
|-------------------------------------|---|
| XBRL.orgのメイン・サイト | http://www.xbrl.org |
| 「How XBRL Works」のビデオ | http://xbrl.squarespace.com/journal/2008/5/10/how-xbrl-works.html |
| 『XBRL in plain English』 | http://www.batavia-xbrl.com/downloads/XBRLinPlainEnglishv1.1.pdf |
| XBRLの仕様 | http://xbrl.org/SpecRecommendations (現在の仕様はXBRL 2.1) |
| XBRLのWiki | http://www.xbrlwiki.info/index.php?title=Main_Page |
| タクソミ・リポジトリ | http://www.xbrl.org/FRTaxonomies |
| タクソミ・ビューア(無償) | http://bigfoot.corefiling.com/yeti/resources/yeti-gwt/Yeti.jsp |
| XBRLディメンションのチュートリアル | http://docs.ubmatrix.com/webhelp/XPE/3_5/Dimensions_and_Aggregation_Tutorial.htm |
| 『XBRL US GAAP Preparers Guide』(PDF) | http://xbrl.us/Documents/PreparersGuide.pdf |
| SECによるXBRLの指令 | http://www.sec.gov/rules/final/2009/33-9002.pdf |
| 次世代EDGARシステムの検索(XBRLの提出物を含む) | http://www.sec.gov/edgar/searchedgar/webusers.htm |
| SECインスタンス・ドキュメント・ビューア: | http://www.sec.gov/spotlight/xbrl/xbrlviewerlicense.htm |
| SEC対話型データWebキャスト | http://www.sec.gov/spotlight/xbrl/xbrl-webcasts.shtml |
| 国際財務報告基準 | http://www.ifrs.com |
| IFRSタクソミ | http://www.iasb.org/XBRL/XBRL.htm |
| XBRLを使用した財務レポート | http://xbrl.squarespace.com/home-page/ |

3

財務サービスからのデータの取得

この項の内容:

| | |
|---------------------------------|----|
| レポート・レベルまたはデータ・ソースのマッピング | 13 |
| Smart Viewでのデータ・ソースのマッピング | 14 |

レポート・レベルまたはデータ・ソースのマッピング

Oracle Hyperionデータ・ソースからのデータを含むドキュメントを使用して作業している場合、基礎となるデータ・ソースまたはレポート内のデータに関連付けられたXBRLマップを作成できます。Smart Viewレポートまたは問合せから導出されたOfficeドキュメントのデータをマップする場合は、次の2タイプのマップを作成できます:

- データ・ソース・マップ - データ・ソース・マップは、メタデータ・ラベルがXBRLタクソノミ概念にマップされる場合に確立します。XBRLタクソノミ・マッピングは、データ・ソースのメンバーと関連付けられて、マッピング・リポジトリに格納され、複数のレポートで再利用できます。同じメタデータを使用して新しいレポートを作成した場合や、同じドキュメントの別の場所にメタデータを使用する場合に、概念を再マップする必要がない点が便利です。

データ・ソース・レベルのマップは、次のもので実行できます:

- 既存のFinancial Reportingレポートからインポートされた関数グリッドのディメンションを含む、Smart Viewを使用するMicrosoft Office
- Smart Sliceから関数グリッドに挿入されたデータ
- レポート・レベルのマップ - Smart Viewレポート、手動データ入力、またはMicrosoft Officeに統合されている別のシステムから実際のデータ(数値など)を選択すると、ドキュメント・レベルのマップが作成されます。この場合、マップされたタクソノミ概念は、Officeドキュメントにのみ関連付けられます。

たとえば、Smart Viewレポートの関数グリッドから次の表が導出されたとします:

- データ・ソース・メンバー「Gross Profit」を含むセルA2を選択し、それをタクソノミ概念GrossProfitにマップした場合、これはデータ・ソース・マップになります。この場合、セルB2、C2、D2およびE2内のすべてのデータ値がタクソノミ概念GrossProfitに関連付けられます。さらに、データ・ソース・メンバー「Gross Profit」を使用するSmart Viewレポートのその他すべての関数グリッドは、自動的にXBRLタクソノミ概念Gross Profitに関連付けられます。
- セルB2 (データ値1000000)を選択してタクソノミ概念をマップした場合、これはドキュメント・レベルのマップになります。
- セルA2のメンバーとセルB2のデータにそれぞれ異なるタクソノミ概念が関連付けられている場合は、ドキュメント・レベルのマップがデータ・ソース・マップ(セルB2に関連付けられているマップ)よりも優先されます。
- 同じデータ・ポイントにデータ・ソース・マップとドキュメント・レベルのマップが関連付けられている場合、ドキュメント・マップがデータ・ソース・マップよりも優先されます。

- ドキュメント・レベルのマップが除去され、対応するデータ・ソース・レベルのマップが存在する場合は、データ・ソース・マップが復元されます。

データ・ソース・マップから導出されるタクソノミ概念の自動関連付けがある場合、その関連付けは、そのマップにコンテキストと単位も関連付けられている場合のみインスタンス・ドキュメントで維持されます。表の例では、メンバー Gross Profitにデータ・ソース・マップがある場合、セルB2およびC2のデータ値は、マップされたタクソノミ概念に自動的に関連付けられます。単位およびコンテキストの関連付けをセルB2に対してのみ作成すると、セルC2には不完全なマッピングがあります。この場合、インスタンス・ドキュメントが生成されるときに、セルB2からのデータは維持されますが、セルC2からのデータは維持されません。

コンテキストに関連付けられているかどうかにかかわらず、すべてのデータ・ソース・マッピングが結果インスタンスに含まれます。インスタンスの生成から特定のデータ・ソース・マッピングを除外するには、抑制機能を使用します。71ページの[データ・ソース・アイテムの削除と抑制](#)を参照してください。

Smart Viewでのデータ・ソースのマッピング

Financial Management、Planning、EssbaseおよびHyperion(R) Reporting and AnalysisリポジトリなどのOracle Hyperionデータ・ソースは、Smart Viewに関数グリッドとしてインポートできます。データがOfficeドキュメントにインポートされると、問合せのメタデータ・ラベルまたはデータ・ソース・メンバーはDisclosure Managementマッピング・ツールを介してXBRL概念に関連付けることができます。このアソシエーションが発生すると、XBRL概念はデータ・ソース・メンバーから認識されます(Oofficeドキュメントの一部である場合)。このため、データ・ソースXBRLマップを一回だけ関連付けて、グリッドで使用できます。

Disclosure Managementでは、ドキュメントではなく、サーバー上にデータ・ソース・マッピングを格納することにより、データ・ソースの機能が拡張されています。この機能に関連付けられている主な機能は、次のとおりです：

- ドキュメントで参照される概念、コンテキスト、単位に関する最新情報が含まれる、一元化されたマッピングのストレージ。ドキュメントにはファクト値のみが格納されるため、概念固有のデータ損失が最小限になります。
- インスタンス生成用のデータがより短時間で準備されるようになりました。
- ファクトのコンテキストおよび単位を、元のドキュメントから独立して変更できるようになりました。
- ドキュメント・コンテンツ(nil値など)に関連付けられていないファクトを作成できます。
- Disclosure Managementにより、マッピングの際(インスタンスの生成および検証の前)に、概念の期間タイプとコンテキストの期間タイプの互換性が検証されます。
- ディメンションとプライマリ・アイテム間の互換性に関する編成された検証が実行されます。
- 同じ値に対する複数のマッピングが可能になりました。
- アイテムのマッピングに対して、データ・ソースを1つまたは複数選択することを可能にするプロンプト。また、存在する場合には、両方のデータ・ソースへのマッピングを参照できます。
- 「選択内容を記憶」オプションを使用して、今後のデータ・ソース・マッピングのために、データ・ソースの選択内容をデフォルトとして保持できます。

XBRLコンテキスト、単位および脚注は、データがOfficeドキュメントにインポートされた後にマップできますが、これらのマップは、レポートまたはドキュメント・レベルでのみ保持され、データ・ソース・マップとはみなされません。

Microsoft Officeで次のインポート・フォーマットを使用してデータをインポートできます：

- 問合せ準備(Excelのみ)
- 完全フォーマット(Excelのみ)
- 関数グリッド(Microsoft WordおよびExcel)

レポート・レベルのマッピングでは、任意の問合せまたはインポート・フォーマットを使用できます。データ・ソース・レベルのマッピングには、関数グリッドを使用する必要があります。



注:

データ・ソース・マッピングでは、Financial Management, PlanningおよびEssbaseのみがサポートされます。Smart Viewからのデータ・ソース・マッピングに非定型の問合せを使用することもできます。

Smart ViewとDisclosure Management間の移動

Disclosure ManagementはSmart Viewの拡張機能です。Disclosure Managementに接続されているときにパネルの切替えアイコンを使用して、Smart ViewでDisclosure Managementコンポーネント(レポート・マネージャおよびマッピング・ツール)を使用できます。

Smart ViewでDisclosure Managementコンポーネントを使用するには、リボンにある「パネル」を選択します。「Smart View」パネルで切替えドロップダウン -- を選択し、「**Disclosure Management**マッピング・ツール」または「**Disclosure Management**レポート・マネージャ」を選択します

Disclosure Management製品全部を使用するには、「**Disclosure Management**」タブをクリックします。

Smart Viewプログラム全部を使用するには、「**Smart View**」タブをクリックします。

データ・ソースの選択

複数のデータ・ソースを含むSmart View問合せに接続すると、Disclosure Managementにより、「データ・ソースの選択」ダイアログ・ボックスが自動的に表示されます。アイテムのマッピングに、1つまたは複数のデータ・ソースを選択できます。「選択内容を記憶」オプションを使用して、今後のデータ・ソース・マッピングのために、データ・ソースの選択内容をデフォルトとして保持できます。

▶ 複数のデータ・ソースを選択するには:

1. レポートを開き、**Smart View**サーバーに接続します。

「データ・ソースの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「データ・ソースの選択」で、アイテムのマッピングに使用するデータ・ソースを選択します。

複数のデータ・ソースを選択できます。

「マッピングの除去」ダイアログ・ボックスで、マッピングされたアイテムに選択されているデータ・ソースを表示できます。

3. 「**選択内容を記憶**」を選択して、今後のデータ・ソース・マッピングのために、現在の選択内容をデフォルトとして保持します。

4. 「OK」をクリックします。

スマート・スライス関数グリッドの挿入

Disclosure Management XBRLタクソノミ・マッピング・ツールを使用して、データ・ソース・メンバーをスマート・スライス関数グリッドでXBRL概念にマッピングできます。このXBRLマッピングはFinancial Management、Oracle Hyperion PlanningおよびEssbase内で再使用可能です。スマート・スライスは、ディメンションまたはディメンション・メンバーの限定された部分集合から構成される、データ・ソースのパーспекティブです。スマート・スライスはサポート情報を指定するため規制機関への提出物として使用できます。

- ▶ データ・ソース・マップをスマート・スライス関数グリッドに作成するには:
 1. 「Smart View」パネルから「スマート・スライス」を選択します。
 2. 「アクション」ペインで、スマート・スライスの挿入を選択します。
 3. で、「関数グリッド」を選択します。
 4. 「Smart View」リボンで、「リフレッシュ」を選択します。
 5. 「Disclosure Management」タブを選択します。
 6. 「接続」を選択してDisclosure Managementサーバーに接続します。
 7. ユーザー名とパスワードを「名前」と「パスワード」フィールドに入力し、「OK」をクリックします。
 8. 「Disclosure Management」リボンで、「マップ」を選択します。
 9. Disclosure Managementマッピング・ツールを使用してデータ・ソース・メンバーをマップします。

Disclosure Managementマッピング・ツールの詳細は、[29ページの第6章「XBRLインスタンス・ドキュメントの生成」](#)を参照してください。

図は、Disclosure Managementマッピング・ツールに統合されたスマート・スライス関数グリッドを示します。

Financial Reporting関数グリッドの挿入

Microsoft ExcelまたはWord (インポートされたOracle Hyperion Financial Reportingレポート)のSmart View問合せ(特に関数グリッド - セル関数が含まれる一連のセル)に接続すると、Disclosure Managementで概念が自動的にインポートされます。データ・ソース・レベルで概念がマップされた問合せのメタデータ(データ・ソース・メンバー)もインポートされます。このため、Smart View問合せで必要とされるのは、レポート・レベル・マッピングと同様に実行されるコンテキスト、単位および脚注のマッピングのみです。

関数グリッドとしてインポートする利点は、関数グリッドでは問合せの結果が動的グリッド・フォーマットで表示され、各セルの上にカーソルを移動すると、各セルの特性が表示されます。関数グリッドでSUM関数などのExcel関数を使用できます。



注:

関数グリッド・データをリフレッシュする際に、式を関数グリッドの一部として保持する場合は、グリッドと式を含むセルの間に、1行の空白行を残す必要があります。式の定義に選択されたセル範囲に空白行を含めることを忘れないでください。

- ▶ Financial Reportingレポートを関数グリッドとしてSmart Viewにインポートするには:

1. Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceのデータ・ソースに接続します。
2. 「Smart View」ペインで、「Financial Reporting」レポートに移動します。
3. レポートを右クリックし、「開く」を選択します。
4. 「すべてのページ」を選択して、レポートのすべてのページをインポートします。
5. 「ワークシート全体でページを分割」を選択して、各ページを別々のExcelワークシートに表示します。
6. 「ワークスペースPOVを使用してリフレッシュ」を選択し、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace POVを使用してレポートをリフレッシュします。
7. 「名前を付けてインポート」で、デフォルトの「関数グリッド」の選択を保持します。

Excelでは、既存のフォーマット済および問合せ準備済のインポート・フォーマットの他に、レポートを関数グリッドとしてインポートするオプションもあります。

8. 「終了」をクリックします。

レポートの関数グリッドがSmart Viewにインポートされます。

9. 「Smart View」リボンで、「リフレッシュ」を選択します。

▶ Disclosure Managementマッピング・ツールを起動するには:

1. 「**Disclosure Management**」タブを選択します。
2. 「接続」を選択してDisclosure Managementサーバーに接続します。
3. ユーザー名とパスワードを「名前」と「パスワード」フィールドに入力し、「OK」をクリックします。
4. 「**Disclosure Management**」リボンで、「マップ」を選択します。
5. Disclosure Managementマッピング・ツールを使用してデータ・ソース・メンバーまたはデータ・セルをマップします。

[29ページの第6章「XBRLインスタンス・ドキュメントの生成」](#)を参照してください

4

構成オプション

この項の内容:

| | |
|-------------------|----|
| サーバー情報の設定 | 19 |
| プレビュー・オプション | 20 |
| 公開オプション | 21 |
| 検証 | 21 |
| マッピング | 21 |

この章には、Disclosure Managementオプションの設定に関する情報が含まれます。

サーバー情報の設定

Disclosure Managementサーバー情報は、Oracle Hyperion Shared Services Registryに保存されます。最初は、サーバー(ホスト)名とサーバー(ホスト)ポート・フィールドは空です。サーバー情報を設定するには、Disclosure Managementの「オプション」ダイアログ・ボックスで、サーバー名とポートを指定する必要があります。サーバー名とポートは、拡張のダウンロードに使用されたものと同じにします。別のDisclosure Managementサーバーを設定または指定する必要がある場合は、「サービス」オプションを使用してサーバー名とポート、およびサーバー・アクセスURLを指定します。

▶ サーバー情報を指定するには:

1. 「**Disclosure Management**」リボンで、「オプション」を選択します。
2. ナビゲーション・ペインで、「サービス」を選択します。
3. 「サーバー名」に、サーバー名を入力します。
4. 「ポート」に、サーバーに関連するポート番号を入力します。
5. デフォルトでは、サーバーに関連付けられたサーバー・アクセスURLが表示されます。サービス・アクセスURLについて、サーバー・アクセスURLを手動で入力するには、URLを選択してアドレスを入力します。

Disclosure Managementサービス・アクセスURLは次のとおりです:

- XBRLマップ・ツールURL
 - セッション・サービスURL
 - レポート・サービスURL
 - マッピング・サービスURL
6. 「**OK**」をクリックします。

プレビュー・オプション

US GAAPタクソノミ(または関連する拡張)から派生したドキュメントについては、Disclosure ManagementではSECインタラクティブ財務レポート・ビューア(またはSECビューア)が使用されます。US GAAPベースのインスタンスのレンダリングに必要な従属ファイルは、Oracleでは提供していません。Disclosure Managementユーザーは、SECビューアのソース・コードをダウンロードする必要があります。ソース・コードは次のサイトから入手可能です：
<http://www.sec.gov/spotlight/xbrl/xbrlviewerlicense.htm>



注：

SECビューアでは、US GAAPタクソノミから派生したインスタンスのみを表示できます。SECに送信するUS GAAPタクソノミを直接参照するインスタンスの表示には使用できません。同一ディレクトリにないタクソノミを参照するインスタンスを表示する場合、SECビューアには完全な一連のタクソノミが含まれない場合があります。たとえば、ディレクトリADirのタクソノミAがADir\BDirのタクソノミBを参照する場合、インスタンス・パッケージには、参照されるすべてのタクソノミが含まれていない場合があります。タクソノミの参照は大規模になる可能性があり、インスタンス・パッケージにすべてを含めることは現実的でないため、このような制限があります。この問題を解決するには、サーバーのファイル・システムからクライアントのファイル・システムにタクソノミをコピーし、元のディレクトリ構造を保持します。

▶ SECビューアの最新バージョンをダウンロードするには：

1. <http://www.sec.gov/spotlight/xbrl/renderingenginelicense.htm>に移動します。

3つのダウンロードを使用できます。Disclosure Managementでは、3つすべてのダウンロードがサポートされていますが、最も小さいファイル(12MB)である個人用レンダラをダウンロードすることをお勧めします。

2. レンダリング・エンジンを構成可能なバイナリ・ディストリビューションのダウンロードを選択します。

リンクは、<http://www.sec.gov/spotlight/xbrl/renderingengineconfigurablebinary.zip>です。

3. インストールのルート・ソース・フォルダにソース・コード・ファイルを解凍します。



注：

SECソース・コードは、共有ネットワーク・ドライブではなく、ローカル・ドライブに解凍することをお勧めします。

4. 「Disclosure Management」リボンで、「オプション」、「一般」の順に選択します。
5. 次を選択します：

- 公開されたドキュメントの自動プレビュー。「XBRLの生成」または「iXBRLの生成」を選択してインスタンス・レポートを生成する場合、インスタンス・レポートを生成した直後にインスタンス・ビューアを起動するかどうかを選択できます。次のいずれかを選択します：

- レポートを生成した直後にインスタンス・ビューアを起動するには、このチェック・ボックスを選択します。

- レポートを生成した直後にインスタンス・ビューアを起動しないようにするには、このチェック・ボックスをクリアします。Disclosure Managementレポートが正常に生成されたことを確認するダイアログが表示されます。

- 「サポートされているタクソノミにSEC表示エンジンを使用」。次のいずれかを選択します：

○SEC Interactive Financial Report Viewerを使用してUS GAAPベースのインスタンスをレンダリングするには、このチェック・ボックスを選択します(推奨)。次に、「SEC表示エンジンのパス」フィールドで、ソース・フォルダのルートの入力場所を入力します。

○汎用インスタンス・ビューアでXBRLレポートを表示するには、このチェック・ボックスをクリアします。

6. 「OK」をクリックします。

公開オプション

ドキュメントを公開する場合に、いくつかのオプションを選択できます：

▶ 公開オプションを適用するには：

1. 次のオプションから選択します：

- 公開されるXBRLおよびiXBRLパッケージにイメージを含める—XBRL/iXBRLパッケージ内にイメージ・ファイルを含める、およびXBRL/iXBRLドキュメントに該当する参照を含める場合は、このオプションを選択します。XBRL/iXBRLパッケージからイメージ・ファイルを除外する、およびXBRL/iXBRLドキュメントから参照を除外する場合は、オプションの選択をクリアします。
- 財務表のフォーマットの拡張- 通貨記号および負数への調整など、表の位置合せを自動修正するには、このオプションを選択します

2. 「OK」をクリックします。

検証

Disclosure Managementには、SEC XBRLのベスト・プラクティスの検証を実行するためのオプションが用意されています。SEC提出に必要な必須検証ルールに加えて、Disclosure Managementでは、ユーザーがSEC提出プロセス中に強制されずに高品質のXBRLレポートを作成できることを目的としたベスト・プラクティスが提供されます。

▶ SEC XBRLのベスト・プラクティスの検証を有効にするには：

1. 「オプション」、「XBRL」の順に選択します。
2. SEC XBRL検証にベスト・プラクティスを含めるを選択します。

マッピング

今後のデータ・ソース・マッピング用に、データ・ソースの選択内容をデフォルトとして保持するよう、Disclosure Managementを設定できます。

▶ 今後のデータ・ソース・マッピング用に、データ・ソースの選択内容をデフォルトとして保持するには：

1. 「オプション」、「XBRL」の順に選択します。
2. 「「データ・ソースの選択」ダイアログの選択内容を記憶します。」を選択します。
3. 「OK」をクリックします。

5

エクスプローラの使用

この項の内容:

| | |
|-----------------------------|----|
| ドキュメントのオープンおよびチェックアウト | 23 |
| エクスプローラでの新規フォルダの追加 | 24 |
| エクスプローラからのファイルのダウンロード | 24 |
| エクスプローラへのファイルのアップロード | 25 |
| エクスプローラでのドキュメントの削除 | 25 |
| エクスプローラでのドキュメントの名前変更 | 25 |
| 権限の設定 | 25 |
| ドキュメントの以前のバージョンの表示 | 26 |
| エクスプローラでのアーティファクトの検索 | 26 |
| ドキュメントの変更内容の比較 | 26 |

エクスプローラを使用すると、アーティファクト(マスター・ドキュメントとドックレット)を管理できます。アーティファクトの以前のスナップショット・バージョンの読み取り、書き込み、ダウンロード、アップロード、削除、セキュリティの設定、表示および比較を行うことができます。Disclosure Management管理者役割を持つユーザーは、他のユーザーに読み取り、書き込み、ドキュメントの削除などのアクセス権限を付与できます。

次にエクスプローラのアクションを示します:

- 23ページのドキュメントのオープンおよびチェックアウト
- 24ページのエクスプローラでの新規フォルダの追加
- 24ページのエクスプローラからのファイルのダウンロード
- 25ページのエクスプローラへのファイルのアップロード
- 25ページのエクスプローラでのドキュメントの削除
- 25ページのエクスプローラでのドキュメントの名前変更
- 25ページの権限の設定
- 26ページのドキュメントの以前のバージョンの表示
- 26ページのエクスプローラでのアーティファクトの検索
- 26ページのドキュメントの変更内容の比較

ドキュメントのオープンおよびチェックアウト

ドキュメントを開いた後に、ドキュメントをチェックアウトできます(他のユーザーが同時にチェックアウトしていない場合)。ドキュメントをチェックアウトすると、そのドキュメントの次のバージョンを作成できます。チェックアウトしたドキュ

メントで作業している間、他のユーザーはマッピングを除くすべてのドキュメントへの変更を表示することができません。マッピングは、ドキュメントがチェックインされると表示されます。ドキュメントをチェックインするとエクスプローラに保存され、読取り専用バージョンもエクスプローラに保存されます。

▶ ドキュメントを開いてチェックアウトするには:

1. 「Disclosure Management」ウィンドウで、「エクスプローラ」ボタン - をクリックします。
2. エクスプローラでドキュメントを選択して、「ドキュメントを開く」ボタン - をクリックします。開いたドキュメントが「Disclosure Management」ページに表示されます。



注:

他のユーザーがチェックアウトしているドキュメントには、チェックアウト済アイコン - が表示されます。ボタンの上にマウスを置くと、チェックアウトされたドキュメントを使用しているユーザーが表示されます。

3. 「チェックアウト」ボタンを選択します。
4. ドキュメントへの変更を保存するには、「チェックイン」ボタンを選択します。



注:

ドキュメントへの現在の変更を元に戻すには、「チェックアウトを元に戻す」ボタンを選択します。

5. 「チェックイン」ダイアログで、このバージョンに対して表示するコメントを入力して「OK」をクリックします。確認のため、再度「OK」をクリックします。

エクスプローラでの新規フォルダの追加

エクスプローラでファイルを格納するフォルダを追加できます。任意の数のフォルダを作成して、他のフォルダ内にフォルダ(サブフォルダ)を格納することもできます。

▶ 新規フォルダを追加するには:

1. 「Disclosure Management」ウィンドウで、「エクスプローラ」ボタン - をクリックします。

エクスプローラで、「新規フォルダ」ボタンを選択します。

2. フォルダ名を入力して、**[Enter]**キーを押します。

エクスプローラからのファイルのダウンロード

エクスプローラからコンピュータに任意のファイル・タイプをダウンロードできます。

▶ ドキュメントをダウンロードするには:

1. 「Disclosure Management」ウィンドウで、「エクスプローラ」ボタン - をクリックします。
2. ドキュメントを選択して、「ダウンロード」ボタン - をクリックします。「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
3. ドキュメントをダウンロードする場所に移動して、「保存」をクリックします。

エクスプローラへのファイルのアップロード

コンピュータからエクスプローラに任意のファイル・タイプをアップロードできます

▶ ドキュメントをアップロードするには:

1. 「Disclosure Management」ウィンドウで、「エクスプローラ」ボタン - をクリックします。
2. フォルダを選択して、「アップロード」ボタン - をクリックします。「開く」ダイアログが表示されます。
3. ドキュメントの場所に移動して、「開く」をクリックします。
4. 「情報」ダイアログで、ドキュメントが正常にアップロードされたことを確認します。「OK」をクリックします。

エクスプローラでのドキュメントの削除

エクスプローラでドックレットまたはレポート全体(マスター・ドキュメントとドックレットを含む)を削除できますが、チェックアウトされたドックレットまたはチェックアウトされたドックレットを含むレポートは削除できません。

▶ ドキュメントを削除するには:

1. 「Disclosure Management」ウィンドウで、「エクスプローラ」ボタン - をクリックします。
2. エクスプローラでレポートまたはドックレットを選択して、「削除」ボタン - をクリックします。
3. 「はい」をクリックして削除を確認します。

エクスプローラでのドキュメントの名前変更

エクスプローラにアップロードされているドキュメントの名前のみ変更できます。

▶ ドキュメントの名前を変更するには:

1. 「Disclosure Management」ウィンドウで、「エクスプローラ」ボタン - をクリックします。
2. アップロードされているドキュメントを選択して、「名前変更」ボタン - をクリックします。
3. ドキュメントの名前を変更して、**[Enter]**キーを押します。

権限の設定

Disclosure Management管理者役割を持つユーザーは他のユーザーに、マスター・ドキュメントまたはドックレットの読取り、書込み、削除権限を適用できます。

▶ ユーザーに権限を付与するには:

1. Disclosure Managementの選択リボンで、「エクスプローラ」を選択します。
2. マスター・ドキュメントまたはドックレットを選択します。
3. 「プロパティ」ボタンを選択して、「権限」タブを選択します。
4. 「ユーザーの検索」フィールドに、完全または部分的な名前を入力します。「ユーザーの検索」アイコン - をクリックします。(アスタリスク(*)およびワイルドカード文字列も使用できます。)問合せに一致するすべての名前が表示されます。
5. 「権限」グループにユーザーを追加するには、ユーザー名を選択して「ユーザーの追加」ボタン - をクリックします。ユーザーが「権限」グループに追加されます。

「権限」グループのユーザーの権限を追加するには、「読取り」、「書込み」または「削除」チェック・ボックスを選択します。

「権限」グループのユーザーの権限を削除するには、「読取り」、「書込み」または「削除」チェック・ボックスをクリアします。

「権限」グループからユーザーを削除するには、ユーザーを選択して「ユーザーの削除」ボタン - をクリックします。

ドキュメントの以前のバージョンの表示

ユーザーがマスター・ドキュメントまたはドックレットを変更してエクスプローラに保存すると、ドキュメントのスナップショットが保存されます。ドキュメントのスナップショットでは、ドキュメント内のマッピング場所へのリンクを含む詳細マッピング・レビューが表示されます。

▶ ドキュメントの以前のバージョンを表示するには:

1. 「Disclosure Management」ページで、「エクスプローラ」ボタン - を選択します。
2. 「プロパティ」というラベル付きのボタンを選択して、「バージョン」タブを選択します。
3. バージョンには連番が振られ、最新バージョンが一番上に表示されます。各ドキュメントは改訂番号、コメント、変更者および改訂日に関連付けられています。
4. 表示するには、バージョンを選択して、「アクション」ドロップダウンから「プレビュー」を選択します。

エクスプローラでのアーティファクトの検索

エクスプローラでは、クイック検索および詳細検索機能が用意されています。ドキュメント名を入力すると、検索を開始できます。検索結果には、入力した検索文字列を含むすべてのアーティファクトが含まれます。検索を詳細に定義するために、名前、所有者、変更日、タイプなどの追加のフィルタ情報を入力できます。

▶ アーティファクトを検索するには:

1. 「Disclosure Management」ページで、「エクスプローラ」ボタン - を選択します。
2. エクスプローラで検索文字列を入力して、「検索」ボタン - をクリックします。「検索結果」タブが表示されます。一致するアーティファクトが「結果」領域に表示されます(該当する場合)。
3. 検索を絞り込むには、次のいずれかのフィールドに値を入力します:
 - 名前- アーティファクトの名前を入力します
 - 所有者- 作成者の名前を入力します
 - 変更日- 変更されたアーティファクトの日付範囲を入力します。
 - タイプ- ドロップダウンからアーティファクトのタイプ(「すべて」、「マスター・ドキュメント」または「ドックレット」)を入力します
4. 「検索」をクリックします。

ドキュメントの変更内容の比較

読取り専用モードで、バージョンングされたドキュメントに対して現在のドキュメントとの変更点を比較できます。

▶ ドキュメントの比較

1. エクスプローラに移動します
2. 旧バージョンと現行バージョンを比較するドックレットを選択します

3. 「プロパティ」タブに移動して、開くドックレットのバージョンを選択します
4. 開きます
5. リボンで「比較」をクリックします
6. 開いているバージョンが、ドックレットの最新バージョンと比較されます

6

XBRLインスタンス・ドキュメントの生成

この項の内容:

| | |
|---|----|
| XBRLインスタンス・ドキュメントの生成 | 29 |
| Disclosure Managementサーバーへの接続 | 30 |
| ドキュメントの移行 | 30 |
| ドキュメントの登録 | 31 |
| 財務諸表データの表示 | 31 |
| タクソノミへの財務レポートのマッピング | 31 |
| Disclosure Managementのインタフェース | 31 |
| XBRLタクソノミ概念について | 36 |
| XBRLコンテキストについて | 44 |
| XBRL単位について | 47 |
| 脚注について | 50 |
| 変数について | 54 |
| ディメンションについて | 58 |
| Disclosure Managementを使用したEDGAR HTMLの生成 | 64 |
| タプルについて | 65 |
| Disclosure Managementドキュメントのロールオーバー | 67 |
| ブロック・テキストのマッピング | 68 |
| ネストされたタグ | 68 |
| マップされたデータの除去とDisclosure Managementオブジェクトの削除 | 69 |
| データ・ソース・アイテムの削除と抑制 | 71 |
| マッピングの確認 | 72 |
| インスタンス・ドキュメントの生成 | 80 |
| IXBRLフォーマットのインスタンス・ドキュメントの生成 | 85 |
| インスタンス・ビューアでのインスタンス・ドキュメントの表示(SECまたはその他) | 86 |
| SECビューアのオフラインでの使用 | 87 |
| ルール・サポートを使用した検証 | 87 |
| レポートの複製 | 88 |
| レポートのエクスポート | 94 |
| レポートのインポート | 95 |
| ドキュメントのフォーマット | 96 |

XBRLインスタンス・ドキュメントの生成

最初に、Disclosure Managementサーバーに接続して登録済のタクソノミにアクセスし、XBRLインスタンス・ドキュメントを生成します。その後、次の処理を行います:

- レポート名の登録
- タクソノミの選択
- 選択したタクソノミから概念を含む財務諸表へのマッピングの実行
- マッピングの確認および修正
- インスタンス・ドキュメントの検証
- インスタンス・ドキュメントの生成およびエクスポート

Disclosure Managementサーバーへの接続

Microsoft WordまたはMicrosoft Excelで、「オプション」メニューまたは「オプション」ボタンを使用してDisclosure Managementサーバーのオプションを設定します。サーバーのオプションを定義した後、「接続」ボタンを使用してDisclosure Managementサーバーにログインします。



注:

管理者は、Disclosure Managementサーバーの詳細を提供する必要があります。



注:

Disclosure Managementマッピング・ツールが開くと、Disclosure Managementクライアントはユーザー・インタフェースが完全にロードされるまで待機します。Disclosure Managementマッピング・ツールが接続タイムアウト期間内にロードされない場合、Disclosure Managementでは試行が失敗したとみなされます。デフォルトでは、タイムアウト期間は2分(120秒)です。タイムアウト期間を変更するには、Windowsレジストリで次の値を設定します(まだ作成されていない場合は、新規文字列値を作成します): HKCU\SOFTWARE\Oracle\Disclosure Management\MappingToolTimeout。この値は秒単位で指定します。

ドキュメントの移行

新しいバージョンでドキュメントを開く際には、Disclosure Managementの旧バージョンで作成またはマップされたドキュメントを移行するよう求められます。移行することにより、ドキュメントは、新しいバージョンに含まれる新しいフォーマットに従います。

▶ ドキュメントを移行するには:

1. Disclosure Managementサーバーに接続し、Microsoft WordまたはMicrosoft Excelでドキュメントを開きます。

ドキュメントの移行が必要です。というメッセージが表示されます移行が行われるまで、このドキュメントでDisclosure Managementの機能は使用できません。リボンで「移行」ボタンをクリックして、移行を実行します。

2. 「OK」を選択します。
3. 「Disclosure Management」タブを選択して、「移行」をクリックします。
4. ユーザー名とパスワードを入力するように求められます。
5. 移行の完了後、「ドキュメントは正常に移行されました。」という確認メッセージが表示されます。

6. 「OK」をクリックします。



注:

移行の完了後、「移行」ボタンはDisclosure Managementリボンから除去されます。

ドキュメントの登録

データをマッピングする前に、Disclosure Managementにドキュメントを登録およびチェックアウトする必要があります。ドキュメントを登録すると、タクソノミ・マッピングとともにマッピング・リポジトリにドキュメント(レポート)名が保存されます。

▶ ドキュメントを登録するには:

1. Microsoft WordまたはMicrosoft Excelでドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management**」タブをクリックします。
3. 「Disclosure Management」リボンで「登録」を選択してレポートの登録ダイアログを表示します。
4. 登録済ドキュメントの場所を選択して「レポート名」フィールドに一意の名前を入力します。
5. 「登録」をクリックします。「Disclosure Management」ページに戻ります。
6. 「Disclosure Management」リボンで「チェックアウト」を選択します。

財務諸表データの表示

財務諸表ファイルは、ローカル・ファイル・システム、共有ドライブまたはWebCenter Content Managementなど様々な場所で、Microsoft WordまたはExcelで開くことができます。

タクソノミへの財務レポートのマッピング

XBRLでエンコードされた財務レポートを作成する場合、財務レポート内の個々の情報とタクソノミの概念を相互に関連させます。この処理は、マッピングと呼ばれます。タクソノミで定義されていない概念を定義するためにタクソノミを調整するには、標準タクソノミを拡張します。拡張により、新しい概念の追加、計算の指定、値の再配置、またはラベルの名前変更が可能になります。この処理が完了した後、マップされたドキュメントを確認して検証し、インスタンス・ドキュメントを作成して、それを該当する規制機関に提出します。



注:

タクソノミを拡張するプロセスについては、Disclosure Management XBRLタクソノミ設計者ガイドに説明されています。

Disclosure Managementマッピング・ツールでは、XBRL概念をドキュメント・データにマッピングするためのメカニズムとして、「マッピング」ボタンとドラッグ機能が提供されています。

Disclosure Managementのインタフェース

この項では、次に示すDisclosure Managementのインタフェースについて説明します:

- 35ページのリボンおよびメニュー
- 35ページのDisclosure Managementマッピング・ツールの各タブへの移動
- 36ページのDisclosure Managementマッピング・ツールのメニューへの移動

表2 「Disclosure Management」のリボンのコマンド

| リボンのコマンド | 説明 |
|---------------------------|---|
| 「開始」グループ: 接続/切断 | Disclosure Managementサーバーに接続または切断します。このコマンドを使用するには、ユーザー名とパスワードが必要です。 |
| 「リポジトリ」グループ: エクスプローラ | エクスプローラを開いて、マスター・ドキュメントとドックレットを保存および管理できます。 |
| 「リポジトリ」グループ: チェックアウト | <p>選択したドキュメントをチェックアウトしてその内容を編集します。</p> <p>注:</p> <p>別のユーザーがチェックアウトしているドキュメントについては、読取り専用アクセス権で使用可能です。</p> |
| 「リポジトリ」グループ: チェックイン | <p>チェックインして現在のドキュメントに対する変更をすべて保存します。ドキュメントをチェックインするたびに、ドキュメントの新しいバージョンも保存されます。</p> <p>Disclosure Management管理者役割を持つユーザーは、ユーザーのチェックアウトアウトを元に戻すこともできます。これは、最初にドキュメントをチェックアウトしたユーザーが使用できない場合のためです。</p> |
| 「リポジトリ」グループ: チェックアウトを元に戻す | <p>「チェックアウトを元に戻す」により、チェックアウトが取り消されます。変更内容をチェックインしない場合または新規コピーで開始する場合は、「チェックアウトを元に戻す」を使用してチェックアウトを取り消す(元に戻す)ことができます。</p> <p>管理者役割を割り当てられたユーザーは、他のユーザーのチェックアウトも元に戻すことができます。これは、ドキュメントをチェックアウトしたユーザーが再びチェックインできない場合に行われます。</p> |
| 「アクション」グループ: 登録 | ドキュメント名のレポート名を入力するよう求められます。レポート名が設定されると、Disclosure Managementでドキュメントが登録され、タクソミ・マッピングとともにマッピング・リポジトリに名前が保存されます。 |
| 「アクション」グループ: ロールオーバー | 元のタクソミまたは新しいタクソミを使用して、ある期間から別の期間にレポートをロールオーバーします。 |
| 「アクション」グループ: 複製 | 「複製したレポートのプロパティ」ダイアログ・ボックスを起動します。複製したレポートのオプションにより、ドキュメントとそのマッピングを別の物理ドキュメントにコピーし、Disclosure Managementレポート名を指定し、マップ |

| リボンのコマンド | 説明 |
|----------------------|--|
| | されたアイテムに関連付けられた数値フォーマットを表示できます。 |
| 「アクション」グループ: エクスポート | あるDisclosure Managementサーバー環境から別の環境にドキュメントやマッピングをエクスポートします。 |
| 「アクション」グループ: インポート | 新しいサーバーにドキュメントをインポート(コピー)します。 |
| 「アクション」グループ: 公開 | <ul style="list-style-type: none"> • インラインのXBRL (iXBRLドキュメント)を生成し、オプションでそのドキュメントをビューアで開きます。iXBRLで生成されたドキュメントを使用すると、同じドキュメントに埋め込まれたXBRLメタデータを維持しながら、人間が理解できるHTMLフォーマットでレポートを表示できます。英国の企業には、iXBRLフォーマットの納税申告書をオンラインで提出することが義務付けられています。 • サーバーにXBRLインスタンス・ドキュメントを生成し、それをユーザーのコンピュータの指定されたファイルまたはパスにダウンロードして、オプションでそのドキュメントをビューアで開きます。 • EDGAR用にドキュメントをHTML形式でレンダリングします。 • ドキュメントをPDF形式でレンダリングします。 • Excel/Wordオプションを指定すると、マスター・ドキュメントまたはドックレットから、マッピングを含む、Disclosure Managementのメタデータを除く現在のドキュメントのコピーが生成されます。 <p>注:</p> <p>ドキュメントがWordファイルの場合は「Word」が表示され、Microsoft Excelドキュメントの場合は「Excel」が表示されます。</p> |
| 「マップ」グループ: マッピング・ツール | 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルを表示します。 |
| 「マップ」グループ: 「確認」 | <p>Disclosure Managementマッピング・ツールの「確認」タブで、Officeドキュメントに関連する既存のマッピングを確認できます。ユーザーは、確認モードでOfficeドキュメント内の既存のマッピングを削除、変更および編集できます。確認モード内には、次の2つのビューがあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ツリー - すべてのマップされたデータが、概念およびその概念に含まれているアイテムの階層ビューに表示されます。 • リスト - マップされたすべてのデータを表形式で表示します。 |

| リボンのコマンド | 説明 |
|------------------------------|---|
| | <p>いずれのビューでも、ユーザーは確認リストからマップされたアイテムを選択することにより、Officeドキュメント内の該当データに移動できます。または、「確認」タブの「選択項目のフィルタ」ボタンをクリックして、現在のドキュメント内のテキストのセクションを選択し、そのセクション内で関連するマッピングのみを表示することもできます。また、Disclosure Managementマッピング・ツールの確認タブをクリックして、マッピングを確認することもできます。</p> |
| <p>「マップ」グループ: 抑制されたマッピング</p> | <p>「抑制されたマッピング」ダイアログ・ボックスを起動します。この機能を使用することにより、対応するデータ・ソース・マッピングに属している、現在抑制されている個別のセルのマッピングを確認して、必要に応じて抑制されたマッピングを削除できます。</p> |
| <p>「マップ」グループ: フォーマット</p> | <p>「フォーマット」ダイアログ・ボックスを起動します。「フォーマット」のオプションを使用すると、正と負の符号、小数位と精度の値、スケーリング値、日付フォーマット、および文字列のフォーマット(リッチ、プレーンまたはデフォルト)を設定できます。</p> |
| <p>「マップ」グループ: 検証</p> | <p>検証ルールを使用して、マップされたドキュメントを検証できます。次があります:</p> <ul style="list-style-type: none"> • XBRL • iXBRL • US SEC (EDGAR XBRLおよびEDGAR HTML) • UK HRMC • グローバルIRFS |
| <p>「マップ」グループ: プレビュー</p> | <p>インスタンス・ドキュメントおよびそのタクソノミへのローカル・パスを指定し、ビューアでインスタンス・ドキュメントをレンダリングできます。</p> |
| <p>「レポート」グループ: 管理</p> | <p>「Disclosure Managementレポート・マネージャ」ペインが開きます。</p> |
| <p>「レポート」グループ: プロパティ</p> | <p>「ドキュメントのプロパティ」ダイアログ・ボックスを起動します。「ドキュメントのプロパティ」のオプションを使用すると、数値の接頭辞や接尾辞を追加および編集できます。また、マッピング実行時にMicrosoft Wordドキュメントの数値データを解析するために、3桁ごとの区切り文字と小数点を指定できるだけでなく、マップされた数値アイテムにデフォルトのスケーリング値を指定することもできます。</p> |
| <p>「レポート」グループ: オプション</p> | <p>Oracle Hyperion Disclosure Managementの「オプション」ダイアログを起動してグローバル・オプションを設定できます。オプションを使用して、Disclosure Managementサーバー・オプションの選択、公開およびプ</p> |

| リボンのコマンド | 説明 |
|-------------------------|--|
| | レビュー・オプションとXBRL検証およびマッピング・オプションの設定を行うことができます。 |
| 「レポート」グループ: 変数の表示/変数の評価 | 「変数の表示」/「変数の評価」ボタンを切り替えて、変数設定または変数値を表示します。 |
| タクソノミ・マネージャ | タクソノミ・バージョンを管理できます。ユーザーはタクソノミ・プロパティ・アーティファクトなどのタクソノミの登録、および新規タクソノミ・バージョンのアップロード、ダウンロードおよび登録を行うことができます。 |
| 「ヘルプ」グループ: ユーザーヘルプ | Oracle Disclosure Managementユーザーズガイドのヘルプを表示します。 |
| 「ヘルプ」グループ: 管理者ヘルプ | Oracle Disclosure Management管理者ガイドのヘルプを表示します。 |
| 「ヘルプ」グループ: 設計者ヘルプ | Oracle Disclosure Management設計者ガイドのヘルプを表示します。 |
| 「ヘルプ」グループ: テクニカルサポート | Oracleカスタマサポートページが表示されます。 |
| 「ヘルプ」グループ: EPMドキュメント | Enterprise Performance Management Systemのドキュメントライブラリが表示されます。 |
| 「ヘルプ」グループ: バージョン情報 | Oracle Hyperion Disclosure Managementのコピーライトページが表示されます。 |

リボンおよびメニュー

Office 2007および2010では、機能は「Disclosure Management」リボンの下に表示されます。Office 2003上の項目の編成は、Office 2007のリボン構造に対応しています。

Disclosure Managementマッピング・ツールの各タブへの移動

Officeアドインで表示されるDisclosure Managementマッピング・ツールには、7つのタブがあります:

- 概念 - 財務諸表データにマッピングするタクソノミ概念に移動、検索および選択します。
- コンテキスト - ビジネス・エンティティ、時間枠およびXBRLファクトに関するその他のオプションの詳細に関する情報を提供するXBRLコンテキスト定義を作成、編集および選択します。コンテキストは、XBRLファクトにマップできます。
- 単位 - 数値データによって表されるメジャーを定義するXBRL単位定義を作成、編集および選択します。単位は、XBRL数値ファクトにマップできます。非数値データにはマップできません。
- 脚注 - レポート内の特定のデータに関する説明テキストの詳細を作成、編集および選択します。
- 変数 - 静的変数と参照変数を作成、編集および削除します
- 確認 - ドキュメントで定義されているXBRLマッピングを表示する確認ペインを開きます。
- 検証 - XBRL、iXBRLおよびEDGAR検証を行うことができます。

- 生成する前にドキュメントを検証できます。エラーが発生した場合、「検証」タブにメッセージが表示され、ドキュメントでエラーが発生した場所が強調表示されます。



注:

Disclosure Managementマッピング・ツールの幅によっては、5つのタブの一部が表示されない場合があります。デフォルトでは、最初の4つのタブのみが表示されます。表示されていないタブに移動するには、Disclosure Managementマッピング・ツールの左上隅か右上隅にある矢印をクリックして、目的のタブを選択します。すべてのタブが表示されるようにDisclosure Managementマッピング・ツールのサイズを変更することもできます。

Disclosure Managementマッピング・ツールのメニューへの移動

各タブには、「Disclosure Managementマッピング・ツール」タブに固有のメニューおよび機能があります。たとえば、「概念」タブの「アクション」メニューには、タクソノミの選択、検索およびリフレッシュに固有のオプションがあります。

XBRLタクソノミ概念について

「概念」タブでタクソノミを選択し、財務諸表データにマッピングするタクソノミ概念に移動、検索および選択します。タクソノミ概念または要素(同義で使用されます)は、タクソノミに定義されたメンバーを表します。たとえば、「総利益」はタクソノミに定義された概念です。Disclosure Managementマッピング・ツールで、タクソノミ概念はツリービュー構造でレンダリングされます(親子関係がレンダリングされます)。Disclosure Managementマッピング・ツールにより、Microsoft Officeドキュメントのデータにタクソノミ概念をマップできます。

タクソノミの選択

管理者は、使用可能なタクソノミをDisclosure Managementマッピング・ツールに登録します。

Disclosure Managementは、各Disclosure Managementレポートにつき1つのタクソノミからのマッピングをサポートします。Disclosure Managementレポートは、マスター・ドキュメントとドックレットの集まりです。

ユーザーがタクソノミを変更すると、変更の確認を求めるプロンプトが表示されます。変更が確認されると、元のタクソノミと一致するマッピングはそのまま保持され、一致しないものは適用できなくなり、表示されなくなります。詳細は、[42ページのタクソノミの変更](#)を参照してください。

タクソノミがすでにDisclosure Managementレポートに添付されている場合、ログイン時にドキュメントで自動的にタクソノミが開かれます。

▶ タクソノミを選択するには:

1. **概念**タブを選択します。
2. 「**アクション**」メニューから**タクソノミの選択**を選択します。
3. タクソノミを選択し、「**OK**」をクリックします。

「タクソミ」ペインに、最上位のタクソミ・ノードが表示されます。



注:

特定の表で複数のセルを選択され、概念タイプがグループ・タグ付けの対象となる場合(対応する概念タイプのサーバー側ルールに基づいて)、「表全体をマップしますか」というメッセージが表示されます。「はい」を選択すると、選択したセルに1つのマッピングが作成され、「いいえ」を選択すると、セルごとに別個のマッピングが作成されます。

タクソミ言語の変更

タクソミは、タクソミの作成者によって作成された言語に基づいて、様々なローカライズ言語ラベルで表示できます。別の言語を選択すると、選択した言語は、概念ツリーとその様々なビュー、検索、および詳細に関連するすべてのラベルに反映されます。

タクソミは、その名前でも表示することもできます。「名前」オプションでは、概念に定義された一意のXBRL名が表示されます。「名前」オプションは、ローカライズされたラベルではなく、特定のXBRL名でタクソミ概念を表示したい場合に役立ちます。

▶ タクソミの言語を変更するには:

1. 「Disclosure Management マッピング・ツール」を選択します。
2. 「Disclosure Management マッピング・ツール」パネルで「**概念**」タブを選択します。
3. タクソミが表示されている状態で、パネル・リボンにあるドロップダウンをクリックして言語コードを選択するか、「名前」を選択してXBRLタクソミ名を表示します。



注:

タクソミを選択するには、「アクション」、タクソミを選択の順にクリックします。

タクソミ・ビュー

タクソミおよびツリー構造ビューはタクソミで定義されます。Disclosure Managementには5つのビュー(「表示」、「定義」、「ディメンション」、「計算」、「タプル」)が用意され、「Disclosure Management マッピング・ツール」パネルの「概念」タブに表示できます。アクティブなタクソミのビューは、「概念」タブ・リボンの右にある)ドロップダウン・リストに表示します。

次に、使用可能なビューの注目すべき特徴を示します。

- 表示ビュー - 「表示ビュー」は、親から子への要素の階層構造を提供する、表示リンクベース(タクソミ内で概念が相互に表象的に関連する方法を定義する関係ファイル)である関係のタイプです。場合によっては、表示階層は財務レポートと同様に表されます。
- 定義ビュー - 「定義ビュー」には、タクソミ内の様々なマルチディメンショナル関係が含まれます。要素が相互に関連する方法について説明します。最も一般的な方法として、タクソミからの定義リンクベースを表します。

- ・ 「ディメンション」ビュー - 「ディメンション」ビューにはフラット・リストで表示されます。ビューを選択すると、上部ペインに、アクティブなタクソミで定義されたプライマリ・アイテムが表示されます。最初のアイテムにはデフォルト・ディメンションが表示されます。ビューで、「概念」タブの下部ペインに「ディメンション・メンバー」ペインが表示されます。

上部ペインからプライマリ・アイテムを選択すると、「ディメンション・メンバー」ペイン(下部ペイン)が更新され、選択したプライマリ・アイテムに関連する割当て可能なドメインおよびドメイン・メンバーを示すディメンション・ツリーが表示されます。

デフォルト・ディメンション・アイテムを選択すると、「ディメンション・メンバー」タブが更新され、すべてのタクソミ・メンバーに割当て可能なデフォルト・ディメンションが表示されます。

- ・ 計算ビュー - 計算の関係を示す概念の階層組織で、さまざまな概念がロールアップを介して相互に関連する方法を示します。合計が親ノードで、コントリビュータはリーフ・ノードとして表示されます。概念は借方および貸方インジケータ、ならびに各アイテムの横の加重インジケータで表示されます。この情報は、「詳細」タブにも表示されます。
- ・ 「タプル」ビュー - XBRLタプルは、一連の関連概念です。タプルでは、同じ概念のいくつかの異なるグループを報告できるなど、これらの概念をグループとして報告することができます。タプルにはネストされたタプルが含まれている場合もありますが、循環依存関係が存在しない可能性があります。

▶ タクソミ・ビューに変更するには:

1. Disclosure Managementマッピング・ツールで「概念」タブを選択します。
2. 「タクソミ」ペインにタクソミが表示されている状態で、「表示」ドロップダウンをクリックします。
3. タクソミの表示に使用するビューを選択します。

タクソミ・ビューの変更

タクソミを操作する場合、複数のパースペクティブまたはビューからタクソミの構造を確認できます。Disclosure Managementには、タクソミを表示するために複数のビューが用意されています。ビューに表示される概念の構造および数は、仕様デザインによって異なります。特定のビューに表示される概念が別のビューでは表示されない場合があります。また、1つの概念が同じビュー内に複数回表示されることもあります。

Disclosure Managementは、次の5つのタクソミ・ビューをサポートしています:

- ・ 表示
- ・ 計算
- ・ 定義
- ・ ディメンション
- ・ タプル

▶ ビューを変更するには:

1. 概念タブを選択します。
2. タクソミが表示されている状態でをクリックして、タクソミ・ビューを選択します。

表示ビュー

表示ビューでは、親子階層内で概念がタクソミ別に配置されます。

計算ビュー

計算ビューは、数値概念間の加算および減算関係別に概念を表示します。XBRL計算は、値が同じコンテキスト(ポイント・イン・タイム)参照と単位(メジャー)参照を共有する概念間の加算と減算を表します。

定義ビュー

定義ビューには、タクソノミ内の様々なその他の関係が含まれます。これは一般に、ディメンショナル関係を表すのに使用されます。

ディメンション・ビュー

ディメンション・ビューでは、プライマリ・アイテムでありXBRLディメンショナリティを持つ概念が配置されます。ディメンション・ビューは、タクソノミ内で使用可能なプライマリ・アイテム、ハイパーキューブ、ディメンション、ドメインおよびドメイン・メンバーを評価します。



注:

ディメンション・ビューはタクソノミ内で定義されるのではなく、XBRLディメンションを使用するすべてのタクソノミで使用可能なDisclosure Managementで提供されたビューです。

タプル・ビュー

タプル関係別に概念が配置されます。タプルは、複数の値が含まれる関連概念のグループです。個別タプル・メンバーのみでは十分な関連情報が提供されない場合がありますが、タプル・メンバーのグループによってより詳細な情報が提供されます。



注:

タプル・ビューはタクソノミ内で定義されるのではなく、XBRLタプルを使用するすべてのタクソノミで使用可能なDisclosure Managementで提供されたビューです。

マッピングの概念

マッピングにより、タクソノミ概念を財務諸表データと関連付けることができます。同じアイテムを何度もマッピングして、複数のファクト値を作成できるようになりました。

- ▶ Microsoft Officeドキュメントのデータにタクソノミ概念をマップする手順は、次のとおりです(レポート/ドキュメント・レベルのマッピング):

1. マップするデータ・ポイントを強調表示します。

複数のExcel表セルのデータ・ポイントを選択するには、[Ctrl]および[Shift]を押します。Microsoft Wordのフリー・フォーム・テキストの単語、文または段落を選択できます。

Microsoft Word表では、マッピングする前に、データ値または複数のセルを選択する必要があります。

Microsoft WordまたはExcelでは、ドラッグしてタクソノミ概念をマップできます。

2. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで、「概念」タブをクリックしてタクソノミ概念を選択します。「マッピングのアタッチ」ボタン - をクリックします。

レポート/ドキュメント・レベルのマッピングが作成されると、黄色い影付きのセルになります。

▶ Smart View Officeドキュメントからデータ・ソースのタクソノミ概念をマップするには:

1. ドキュメントで、データ・ソース・メンバー(メタデータ・ラベル)を強調表示します。
2. Smart Viewリボンで「パネル」を選択し、パネルで切替え先ドロップダウンをクリックして、「概念」タブを選択します。
3. 「タクソノミ」ペインのタクソノミ概念に移動し、「マッピングのアタッチ」ボタン - をクリックします。

色のキューは、グリッドで実行したマッピングのタイプを示します。セルに青い影が付いている場合は、データ・ソース・マッピングを示します。

13ページの第3章「財務サービスからのデータの取得」も参照してください。

マップされた概念の除去

OfficeドキュメントまたはOracle Hyperionデータ・ソース内のデータ・ポイントからタクソノミ概念マップを除去できます。マップされたデータ・ポイントが選択対象に複数含まれる場合、「マッピングの除去」ダイアログに、データ・ポイントに関連付けられたマッピングが表示されます。

▶ Officeドキュメント内のデータ・ポイントにマップされた概念を除去するには:

1. Disclosure Managementマッピング・ツールで「概念」タブを選択します。
2. タクソノミ・リストでXBRL概念を選択します。
3. 「マッピングの除去」ボタン - を選択します。
4. 「マッピングの除去」ダイアログに、行ごとに、選択したXBRL概念にマップされた値のリストが表示されます。
5. 削除する行を選択して、「除去」ボタン - をクリックします



注:

削除された行を元に戻すには、「リセット」ボタン - をクリックします

6. 「OK」を選択します。

概念にXBRLディメンションが関連付けられている場合、このディメンション情報もマップ・リポジトリから除去されます。



注:

マップされた概念を「OK」をクリックして除去した場合は元に戻すことができないため、XBRL概念を再マップしてタクソノミ概念の関連付けを再作成する必要があります。

クイック・マッピング

クイック・マッピング機能を使用すると、マッピング時に個々の「概念」、「コンテキスト」および「単位」タブを切り替えずに、概念、コンテキスト、単位を同時にマップできます。また、Microsoft ExcelとWordの両方で使用可能な、グローバル・コンテキストおよび単位を作成できます。

▶ クイック・マッピングを適用するには:

1. 「タクソノミ」ペインのタクソノミ概念に移動し、をクリックします。
2. 「コンテキスト」ドロップダウンから、コンテキストを選択します。
3. 「単位」ドロップダウンから、単位を選択します。
4. マップするデータ・ポイントを選択します。

複数のExcel表セルのデータ・ポイントを選択するには、[Ctrl]および[Shift]を押します。Microsoft Wordのフリー・フォーム・テキストの単語、文または段落を選択できます。

Microsoft Word表では、マッピングする前に、データ値または複数のセルを選択する必要があります。

Microsoft WordまたはExcelでは、ドラッグしてタクソノミ概念をマップできます。

5. をクリックして概念をマップします。

NIL値のマッピング

Microsoft WordやExcelの空白または空のセルをハイライトしてマッピングすることにより、Disclosure Managementにnil値を割り当てられます。nil値が割り当てられると、確認モードで、「マップされた値」フィールドに空白値の新しいエントリが表示されます。nil値のコンテンツを使用してレポートされるファクトは、値が不明であること、または要素に適用されないことを示します。XMLスキーマでは、nil値のコンテンツを使用してレポートされるファクトには、次の例で示すように、true属性が割り当てられます: `<us-gaap:AccountsReceivableNetCurrentcontextRef="I-2010" precision="INF" unitRef="USD" xsi:nil="true"/>`

タクソノミのリフレッシュ

タクソノミ・ツリーをリフレッシュすると、Disclosure Managementサーバーから最新コンテンツが取得されます。

タクソノミ・ツリーをリフレッシュするには、を選択します

概念詳細の表示

選択したタクソノミ概念の詳細が、Disclosure Managementマッピング・ツールの「概念の詳細」ペインに表示されます。この情報は、選択した概念に関するプロパティ(ラベル、名前またはデータ型など)を反映しています。一部のプロパティはオプションです。

「概念の詳細」タブを表示するには、「概念」タブの水平スクロール・バーのすぐ下にある「ペインを元に戻す」アイコン - をクリックします。

表3 概念詳細ペインのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|--------|---|
| ラベル | 理解しやすい概念名を示します。 |
| 名前 | タクソミ内の概念を示す一意の名前を示します。各概念には標準の名前があり、概念名と同一に扱われます。また各概念はタクソミ内で一意です。 |
| データ型 | 概念への関連付けが可能な所定のデータ・フォーマット(数値または文字列など)を示します。 |
| 抽象 | 抽象概念を使用してレポートまたはドキュメント内のデータをマップすることはできません。 |
| 期間タイプ | 概念が一時点と期間のどちらとしてレポートされるかを示す、概念の属性。概念の期間タイプは、コンテキスト内の期間タイプ定義と一致する必要があります。たとえば、一時点として定義されているコンテキストは、期間タイプが期間であるタクソミ概念に関連付けることはできません。 |
| 残高 | 数値に関連付けられている残高を識別するオプションの属性。使用可能な値: 貸方または借方。 |
| タプル | 複数の値が含まれるファクトで、ネストしたアイテムを保持した単一のXML概念によって識別されます。1つのタプル・メンバーのみでは十分な関連情報が提供されない場合がありますが、タプル・メンバーのグループによって必要な情報が提供されます。たとえば、「会社の住所」というタプル概念は、「名前」、「番地」、「市町村区」、「都道府県」、「郵便番号」および「国」の各タプル・メンバーで構成できます。単一のタプル・メンバー(「市町村区」など)のみでは「会社の住所」という概念を記述するには十分ではありません。Disclosure Managementマッピング・ツールの「概念」タブの下には、タクソミ内に定義されている既存のすべてのタプルが表示されるタプル・ビューがあります。 65ページのタプルについて を参照してください。 |
| 代替グループ | 複数の継承構造を実装できるXSD (XMLスキーマ)エンティティ。XBRLでは多くの代替グループを使用でき、必要に応じて規制タクソミで定義できます。 |
| ドキュメント | 概念に関する追加ドキュメントの提供に使用される特定の引用文を示します。 |

タクソミの変更

Disclosure Managementでは、1つのOfficeドキュメントに1つのタクソミのみを関連付けることができます。ただし、Officeドキュメントに関連付けられているタクソミを変更できます。この操作を実行する場合は、その結果がどうなるかを事前によく検討してください。

ドキュメントのタクソミを変更する場合、Disclosure Managementでは、そのOfficeドキュメントにタクソミ・マップが存在するかどうかの確認が行われます。タクソミ・マップが存在する場合は、「このドキュメントに関連付けられているタクソミを変更すると、既存のマップが失われる可能性があります。タクソミを変更しますか?」という警告が表示されます

タクソミの変更を選択すると、次の処理が実行されます:

- すべての完全な概念マッピングが更新され、各要素のネームスペースがソース・タクソミからターゲット・タクソミのものに変更されます。いずれかのマッピングが無効な場合(概念の不一致と呼ばれる)、検証の際にエラーとして報告されます。
- ドキュメントに(前のタクソミに関連する)データ・ソース・レベルのマップがある場合、これらのマップはマッピング・リポジトリから削除されません。
- コンテキスト、単位および脚注は保持されます(定義とマップはドキュメントに保存されているため、削除されません)。

ドキュメントへのタクソミ・マッピングが作成されていない場合、ユーザーによる確認の必要なしにタクソミを変更できます。Disclosure Managementマッピング・ツールでは、ユーザーが選択した新しいタクソミは自動的にレンダリングされません。

タクソミ概念の検索

何千もの概念があるタクソミを操作する場合、概念ラベルおよび追加フィルタ(概念名、日付タイプ、抽象および期間タイプ)別に概念を検索できます。

▶ タクソミ概念を検索するには:

1. 「**概念**」タブで、「**検索**」アイコン - を選択します。
2. 「**ラベル**」に、理解しやすい概念名を入力します。たとえば、支出に関する概念を検索するには、「**支出**」と入力します。
3. オプション: 「**名前**」に、概念を示す一意の識別子を入力します。
4. オプション: 「**データ型**」で、概念に関連付けられたデータ型を選択します。値セットは、タクソミのスコープに定義されたタイプに応じて異なります。

オプションは次のとおりです:

- すべて
 - なし
 - (タクソミに基づいて、ドロップダウン・リストに様々なタイプが表示されます)
5. オプション: 「**抽象**」で、概念の抽象属性TrueまたはFalseを選択します。

オプションは次のとおりです:

- すべて
 - False
 - True
6. オプション: 「**期間タイプ**」で、概念に関連付けられた期間タイプを選択します。

オプションは次のとおりです:

- すべて
- なし
- 期間
- 一時点

7. 「OK」をクリックします。

検索結果は、「検索結果」タブに表示されます。

「検索結果」タブは、水平スクロール・バーの直下にあるをクリックして、いつでも表示できます。

XBRLコンテキストについて

インスタンス・ドキュメントでは、XBRLコンテキストは、レポートの個別ファクトまたは値に割り当てられたエンティティ、スキームおよびレポート期間の組合せに対する一意の識別子となります。XBRLコンテキストは、タクソノミ概念と組んでファクト値を定義し、XBRLがファクト値を他の値と関連させて解釈できるようにします。XBRLコンテキストは、数値情報と非数値情報に適用できます。コンテキストは、マップされるすべてのタクソノミ概念に必要です。

XBRLコンテキストの追加

▶ XBRLコンテキストを追加するには:

1. 「コンテキスト」タブを選択します。
2. をクリックします。
3. 「名前」に、理解しやすいビジネス・エンティティ名、機関名または会社名を入力します。

この値は、インスタンス・ドキュメントには登録されません。

4. 「エンティティID」に、ビジネスまたは機関エンティティを示す一意の識別子を入力します。
5. 「スキーム」に、ファクトに関するコンテキスト情報を入力します。

通常、この値はURLです。

エンティティIDの命名機関への参照を指定します。たとえば、コンテキストがUS GAAPフレームワークを参照するよう指定できます。

6. 「タイプ」で、ファクトが表す時間枠を選択します。

すべてのタクソノミ概念には、期間タイプ属性があります。タクソノミ概念にコンテキストを関連付ける場合、期間タイプが一致する必要があります。

オプション

- 一時点 - 貸借対照表勘定科目などのある時点での概念に使用されます。
- 期間 - 損益計算書やキャッシュ・フロー表などの時間の流れを示します。
- 永久

7. 「開始」で「日付の選択」アイコン -- をクリックして、レポート期間の開始期間を選択します。

日付を入力する場合、xx/xx/xxxxフォーマットを使用します。日付フォーマットは、ブラウザの現在のロケールにデフォルト設定されます。たとえば、ブラウザのロケールが欧州のロケールに設定されている場合、データはUS GAAPタクソノミであってもdd/mm/yyyyとして入力されます。

8. 「終了」で「日付の選択」アイコン - - をクリックして、レポート期間の終了期間を選択します。

このフィールドは、コンテキスト・タイプが「期間」である場合にのみ使用可能です。

日付を入力する場合、xx/xx/xxxxフォーマットを使用します。日付フォーマットは、ブラウザの現在のロケールにデフォルト設定されます。たとえば、ブラウザのロケールが欧州のロケールに設定されている場合、データはdd/mm/yyyyとして入力されます。

9. 「OK」をクリックします。

コンテキストがコンテキスト一覧ペインと対応する「詳細」タブに追加されます。

コンテキストのマッピング

- ▶ Officeドキュメント内のXBRLコンテキストにデータ・ポイントをマップするには(レポート/ドキュメント・レベルまたはSmart Viewの関数グリッド):

1. マップするデータ・ポイントを選択します。

複数のExcel表セルのデータ・ポイントを選択するには、[Ctrl]および[Shift]を押します。Microsoft Wordのフリー・フォーム・テキストの単語、文または段落を選択できます。

Microsoft Word表では、マッピングする前に、データ値または複数のセルを選択する必要があります。

Microsoft WordまたはExcelでは、ドラッグしてコンテキストをマップできます。

2. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルの「概念」タブでXBRL概念を選択し、「マッピングのタッチ」アイコン - をクリックします。

マップされたデータ・ポイントが黄色で強調表示されます。

マップされたコンテキストの除去

OfficeドキュメントまたはOracle Hyperionデータ・ソース内のマップされたコンテキストを除去できます。コンテキストを削除すると、削除したコンテキストに関連付けられた既存のマッピングに影響します。



注:

マップされたコンテキストの除去は元に戻すことはできず、XBRLコンテキストを再マップしてマッピングを再作成する必要があります。

- ▶ Officeドキュメント内の単一のデータ・ポイントまたは複数のデータ・ポイントにマップされたコンテキストを除去するには:

1. マップされたデータ・ポイントを選択します。
2. 「マッピングの除去」ボタン - を選択します。「マッピングの除去」ダイアログが表示されます。

除去したコンテキスト・マップにXBRLディメンションが関連付けられている場合、仮想コンテキストが適用されない場合に備えて、Disclosure Managementマッピング・ツールで仮想コンテキストの内部リストもリフレッシュします([61ページの仮想コンテキスト](#)を参照)。

3. マップされたコンテキストの横にある「**除去**」アイコン()をクリックします。
4. 「**OK**」をクリックします。

コンテキストの更新

コンテキスト定義を変更すると、変更したコンテキストに関連付けられた既存のすべてのマッピングに影響します。

▶ コンテキストを更新するには:

1. コンテキスト・リスト・ペインで、コンテキストを選択し、をクリックします。
2. 必要に応じてコンテキスト詳細を更新し、「**OK**」を選択します。

コンテキストの削除

XBRLコンテキストまたは仮想コンテキストは、Officeドキュメント内のデータから除去できます。仮想コンテンツを削除すると、仮想コンテキストに関連付けられたディメンションおよび基本コンテキストと一致する既存のドキュメント・マップが除去されます([61ページの仮想コンテキスト](#)を参照)。

▶ コンテキストを除去するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインの「コンテキスト」ペインで、除去するコンテキストを選択します。
2. 「**削除**」アイコン - をクリックします。
3. 「**OK**」をクリックして確認します。

コンテキストの検索

「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで検索機能を使用して、名前、タイプ、期間開始/期間終了で現在のドキュメントのコンテキストを検索します。

▶ 選択したコンテキストを検索するには:

1. Disclosure Managementマッピング・ツールの「コンテキスト」タブの「**検索**」フィールドに、コンテキスト値を入力します。

使用可能な値タイプ:

- コンテキスト名
 - コンテキスト・タイプ
 - 期間開始
 - 期間終了
2. 「**前**」アイコン -- をクリックしてリストを上方向に検索するか、「**次**」アイコン -- をクリックしてコンテキストを前方検索します。

コンテキストが見つかったら、コンテキスト・リスト・ペインで強調表示されます。

コンテキスト詳細の表示

コンテキスト詳細は、選択したタクソノミ・コンテキストのコンテキスト詳細ペインに表示されます。この情報は、選択したコンテキストに関連するプロパティ(名前、エンティティID、タイプおよび期間開始/終了など)を反映しています。

表4 コンテキスト詳細ペインのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-----------|--|
| *名前 | コンテキストの名前またはラベルを指定します。この名前はインスタンス・ドキュメントには登録されません。たとえば、SEC CIK番号を入力できます。必須。 |
| *エンティティID | エンティティ、会社または機関を示す一意のIDを指定します。エンティティIDには、他との識別になるコンテキストを記述します。会社のSEC CIK番号を入力します。 注: インスタンス・ドキュメントに1つの会社のみが関連付けられている場合、「エンティティID」フィールドにこの会社名を入力しないでください。 |
| *スキーム | エンティティIDの命名機関への参照を指定します。通常、この値はURLです。たとえば、コンテキストがUS GAAPフレームワークを参照するように指定できます。 |
| *タイプ | ファクトが関連する期間を指定します。有効なオプションは、次のとおりです: <ul style="list-style-type: none">一時点 - 特定の日付(11/28/2009など)期間 - 開始日および終了日が定義された期間(2009年11月28日から2010年5月28日までなど)永久 - 日付または期間の制限なし |
| *開始 | レポート期間の開始日を指定します。日付はxx/xx/xxxxフォーマットで入力します。カレンダーから日付を選択するには、をクリックします。 日付フォーマットは、ブラウザの現在のロケールにデフォルト設定されます。たとえば、ブラウザのロケールが欧州のロケールに設定されている場合、データはUS GAAPタクソノミであってもdd/mm/yyyyとして入力されます。 |
| 終了 | レポート期間の終了日を指定します。日付はxx/xx/xxxxフォーマットで入力します。カレンダーから日付を選択するには、をクリックします。 日付フォーマットは、ブラウザの現在のロケールにデフォルト設定されます。たとえば、ブラウザのロケールが欧州のロケールに設定されている場合、データはUS GAAPタクソノミであってもdd/mm/yyyyとして入力されます。 |

XBRL単位について

インスタンス・ドキュメントでは、各数値に単位を指定する必要があります。単位には、単一メジャー値(通貨または通貨コード)として表示される単純単位か、単位の積の比率があります。この比率は、分子および分母が含まれる除

算要素を使用して表されます。単純な単位の例には、USD (米国ドル)、CAD (カナダ・ドル)、キログラム、FTE (工数)、メートルまたは株式などがあります。積の比率には、1株当たりのユーロ(分子: EUR; 分母: 株数)などがあります。

XBRL単位の追加

▶ 単位を追加するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで「単位」タブを選択します。
2. 「新規」アイコン - をクリックします。
3. 「名前」に、単位の名前を入力します。
4. メジャーで、単位タイプを選択するか単位タイプを入力します。

に、mappingtool.propertiesファイルから導出された編集可能な単位タイプのリストを示します。

5. 「メジャー」フィールドで単位の単位タイプの積の比率を選択した場合、「次で除算」を選択し、「分母」に分母を指定します。
6. 「OK」をクリックします。

下の表に、「単位」入力フィールドの詳細情報を示します。

表5 「単位」ペインのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| *名前 | 単位のラベルを入力します。たとえば、米国ドルの場合は/USD/、ユーロの場合は/EUR/と入力します。この値は、インスタンス・ドキュメントには登録されません。必須。 |
| メジャー | <p>オプション: 数値アイテムの測定に使用されている単位を選択します; たとえば、ドル、株式、ユーロまたは1株当たりのドルです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通貨の値には、International Standards Organizationの標準であるISO 4217で認識される通貨単位タイプが必要です。詳細は、次を参照してください: www.iso.org (測定が行われた際に有効だったもの。) • 株式の値には、単位「shares」を設定する必要があります。 • 1つの数値を乗算した値を使用せず、pureまたはpercentageデータ型を使用して示されるレート、パーセンテージおよび割合には、単位「pure」を設定する必要があります。 |
| 次で除算 | オプション: 「分母」フィールドに表示されるメジャーを使用して測定された値の除算を使用可能にします。 |
| 分母 | オプション: 「メジャー」フィールドに表示されるメジャーの除数として機能するメジャーを選択します。たとえば、 |

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | 「メジャー」フィールドに「iso4217:USD」とある場合、「shares」を選択できます。 |

単位のマッピング

▶ Officeドキュメント内のデータ・ポイントをマップする手順は、次のとおりです(レポート/ドキュメント・レベルまたはSmart Viewの関数グリッド):

1. マップするデータ・ポイントを選択します。

複数のMicrosoft Excel表セルのデータ・ポイントを選択するには、**[Ctrl]**を押しながら**[Shift]**を押します。

Microsoft Wordのフリー・フォーム・テキストの単語、文または段落も選択できます。

Microsoft Word表では、マッピングする前に、データ値または複数のセルを選択する必要があります。

Microsoft WordまたはExcelでは、ドラッグして単位をマップできます。

2. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで、「単位」タブをクリックしてリストから単位を選択します。
3. 「マッピングのアタッチ」ボタン - をクリックします。

マップされたデータ・ポイントが強調表示されます。

マップされた単位の除去

OfficeドキュメントまたはOracle Hyperionデータ・ソース内の単一のデータ・ポイントまたは複数のデータ・ポイントにマップされた単位を除去できます。



注:

マップされた単位の除去は元に戻すことはできず、XBRLコンテキストを再マップしてマッピングを再作成する必要があります。

▶ Officeドキュメント内の単一または複数のデータ・ポイントにマップされた単位を除去するには:

1. Disclosure Managementマッピング・ツールで「単位」タブを選択します。
2. を選択して「マッピングの除去」ダイアログを表示します。
3. マップされた単位を選択して、「除去」アイコン - をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

単位詳細の更新

▶ 単位を更新するには:

1. Disclosure Managementマッピング・ツールで「単位」タブを選択します。
2. 単位リストペインで単位を選択し、をクリックして「単位」ダイアログを表示します。

3. 単位詳細を更新し、「OK」をクリックします。

単位の削除

XBRL単位は除去できます。単位を削除すると、削除した単位に関連付けられた既存のすべてのマッピングに影響します; マッピングは単位の関連付けを失います。

▶ 単位を除去するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで「単位」タブを選択します。
2. 単位リスト・ペインで、単位を選択します。
3. 「削除」アイコン - をクリックします。
4. 確認のメッセージで「はい」をクリックします。

単位の検索

検索機能を使用して、選択した単位を単位名、メジャー、次で除算属性または分母値別に検索します。

▶ 選択した単位を検索するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで「単位」タブを選択します。
2. 「検索」フィールドに、単位値別に検索内容を入力します。

使用可能な値は次のとおりです: 単位名、メジャー、次で除算属性または分母値。

3. を選択してリストを上方向に検索するか、を選択してリストを下方向に検索します。

見つかった単位は、単位リスト・ペインで強調表示されます。

脚注について

多くの場合、ビジネス・レポートでは、ビジネス・データに関する詳細な説明テキストがレポート内に含まれます; これらを脚注と呼びます。脚注は、数値タクソノミ概念にマップされる財務諸表のデータ・ポイントに関連付けることができます。たとえば、データ型がxbrli:monetaryItemTypeの数値タクソノミ概念「マーケティングおよび流通」にマップされる\$1000に脚注を関連付けます。

脚注の追加

▶ 脚注を追加するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで「脚注」タブを選択します。
2. 「追加」アイコン - を選択して「脚注」ダイアログを表示します。
3. 「名前」に、脚注のわかりやすい名前を入力します。

たとえば、収益に関する脚注を追加する場合、「収益認識」のように入力します。

4. 「フォーマット」を選択して、フォーマット・オプションを表示します。

詳細は、[52ページの表 6](#)を参照してください。

5. テキスト・エントリ・フィールドに脚注テキストを入力します。

たとえば、「収益認識」の場合、次のように入力できます：

弊社は、次の事業から収益を得ます：(1)ソフトウェア(これには、新規ソフトウェア・ライセンス、ソフトウェア・ライセンスの更新、および製品サポートの収益が含まれます)、および(2)サービス(これには、コンサルティング、オンデマンドおよびエデュケーションの収益が含まれます)。新規ソフトウェア・ライセンスの収益とは、弊社のデータベース、ミドルウェアおよびアプリケーション・ソフトウェアを使用するライセンスを顧客に供与することによって得られる手数料を表しますが、ソフトウェア・ライセンスの更新から得られる収益を除きます。これは、ソフトウェア・ライセンスの更新および製品サポートの収益に含まれます。ソフトウェア・ライセンスの収益認識の基準は実質的に、米国公認会計士協会が発行する意見書の第97-2号「ソフトウェアの収益認識」(SOP 97-2)の規定に従いますが、弊社自身で判断を行い、会計期間ごとに認識されるソフトウェアおよびサービスの収益額の算出に関連する概算を使用します。

6. 「OK」をクリックします。

脚注のマッピング

- ▶ Officeドキュメント内の脚注に単一または複数のデータ・ポイントをマップする手順は、次のとおりです(レポート/ドキュメント・レベルまたはSmart Viewの関数グリッド)：

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインを開いて「脚注」タブをクリックします。
2. ドキュメントで、マップするデータ・ポイントを選択します。

複数のExcel表セルのデータ・ポイントを選択するには、**[Ctrl]**および**[Shift]**を押します。Microsoft Wordのフリー・フォーム・テキストの単語、文または段落を選択できます。

Microsoft Word表では、マッピングする前に、データ値または複数のセルを選択する必要があります。

Microsoft WordまたはExcelでは、ドラッグして脚注をマップできます。

3. 「脚注」タブでマップする脚注を選択して、「マッピングのアタッチ」アイコン - をクリックします。マップされたデータ・ポイントが強調表示されます。

マップされた脚注の除去

OfficeドキュメントまたはOracle Hyperionデータ・ソース内の単一のデータ・ポイントまたは複数のデータ・ポイントにマップされた脚注を除去できます。



注：

マップされた脚注の除去は元に戻すことはできず、マッピングを再作成するにはXBRLコンテキストを再マップする必要があります。

- ▶ Officeドキュメント内の単一のデータ・ポイントまたは複数のデータ・ポイントにマップされた脚注を除去するには：

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで「脚注」タブを選択します。
2. 「マッピングの除去」アイコン - を選択して「マッピングの除去」ダイアログを表示します。
3. マップされた脚注を選択して、「除去」アイコン - をクリックします。



注:

「リセット」アイコン - をクリックすると、操作を元に戻すことができます。ただし、「OK」をクリックした後に、除去された脚注を元に戻すことはできません。

4. 「OK」をクリックします。

脚注の更新

▶ 脚注を更新するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで「脚注」タブを選択します。
2. 「脚注」リスト・ペインで脚注を選択し、をクリックして「脚注」ダイアログを表示します。
3. 脚注詳細を更新し、「OK」をクリックします。

脚注の削除

XBRL脚注は除去できます。脚注を削除すると、削除した脚注に関連付けられた既存のすべてのマッピングに影響します; マッピングは脚注の関連付けを失います。

▶ 脚注を除去するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで「脚注」タブを選択します。
2. 「脚注」リスト・ペインで、除去する脚注を選択します。
3. をクリックします。
4. 確認メッセージ・ボックスで「はい」を選択します。

脚注のフォーマット

標準的なワードプロセッサのフォーマットの適用、インデントおよびスペースの管理、および単語、数値または段落のフォーマットにより、脚注をフォーマットできます。

表6 脚注のフォーマット・オプションと説明

| フォーマット・アイコン | 説明 |
|-------------|----------|
| | フォント・タイプ |
| | フォント・サイズ |
| | 太字 |
| | 斜体 |
| | 下線 |
| | 下付き |
| | 上付き |

| フォーマット・アイコン | 説明 |
|-------------|-------------------------------|
| | 左揃え |
| | 元に戻す |
| | やり直し |
| | スタイルのクリア |
| | リッチ・テキスト編集モード |
| | ソース・コード編集モード |
| | 最前面色 |
| | 背景色 |
| | 中央揃え |
| | 右揃え |
| | 両端揃え |
| | 箇条書き |
| | 番号付きリスト |
| | インデント解除 |
| | インデント |
| | リンクの追加(エクスプローラのユーザー・プロンプトを起動) |
| | リンクの除去 |

脚注の検索

検索機能を使用して、脚注を検索します。

▶ 脚注を検索する手順は、次のとおりです：

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで「脚注」タブを選択します。
2. 「検索」フィールドに、脚注名を入力します。
3. 「前」アイコン - をクリックしてリストを後方検索するか、「次」アイコン - をクリックしてリストを前方検索します。

一致した脚注は、「脚注」ペインで強調表示されます。

脚注詳細の表示

脚注詳細は、選択したタクソノミ脚注の脚注詳細ペインに表示されます。この情報は、脚注の名前と説明を反映しています。

表7 脚注詳細ペインのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|--|
| 名前 | 脚注の名前を表示します。この値は、インスタンス・ドキュメントには登録されません。 |

| フィールド | 説明 |
|-------|---------------|
| 脚注 | 脚注のテキストを表示します |

変数について

変数には、マスター・ドキュメントおよびドックレットで繰り返し使用できる特定の値が含まれます。既存の変数を編集して、変数がマップされるすべての場所に異なる値を表示できます。

変数マッピングを示すために、変数のプレースホルダがマスター・ドキュメントまたはドックレットに配置されます。ドキュメント/ドックレットが評価される際、変数に関連付けられた値がプレースホルダに置き換わります。変数には、次の2つのタイプがあります：

- 静的変数:** 静的変数は任意のユーザー定義値で作成され、ドキュメント/ドックレットにマップされます。変数には数値、日付、記号、文字列などを指定できます。静的変数は、「変数」タブを使用して単一の場所で定義できます。この変数は、ドキュメント内の任意の場所で、そのテキストのプレースホルダとして使用されます。評価される際、プレースホルダにはマップされたエリア内の変数の値が表示されます。静的変数の有効な例として、日付管理があります。申告では多く場所に同じ日付が出現し、ロールオーバーの処理中にこれらを個別に更新する必要がありますが、変数を使用することで、ロールオーバー時に変数値のみを変更すれば済みます。静的変数は、指定されたマスター・ドキュメントに関連付けられている任意のドックレットから編集できます。どこで編集された場合でも、静的変数の元のドックレット情報は保持されます。たとえば、doclet1で作成された静的変数が別のドックレットまたはマスター・ドキュメントで編集された場合、静的変数値は更新され、元のドックレット情報は保持されます。
- 参照変数:** 参照変数は、ドキュメント/ドックレット内の任意のテキストまたはイメージを使用して参照を作成できます。参照変数が作成されたら、その変数をマップして相互参照またはページ参照ハイパーリンクを作成できます。ドキュメントに目次が含まれる場合、参照変数を使用して目次テキストおよびページ番号を追加できます。

静的変数の作成

▶ 静的変数を作成するには：

- Disclosure Management マッピング・ツールで「変数」タブを選択します。をクリックして**静的変数**を選択します。
- 静的変数ダイアログの「名前」フィールドに、一意のIDを入力します。例: CURR_YEAR。特殊文字は使用できません。また、単語の間にスペースを追加しないでください。
- 「値」フィールドに値を入力します。例: 2012年4月1日。
- 「OK」をクリックして変数を保存します。
- 「変数」タブに変数が保存されます。

参照変数の作成

参照変数は、キーワード、語句およびドキュメント内の場所を識別するのに便利です。参照変数は、指定した場所またはテキスト選択を識別して、将来の参照のために特定します。

▶ 参照変数を作成するには：

- ドキュメントまたはドックレットでテキスト、イメージまたはデータを選択します。

2. Disclosure Managementマッピング・ツールで「変数」タブを選択します。をクリックして参照変数を選択します。
3. 選択したテキストが、参照変数ダイアログの「値」フィールドに入力されます。



注:

データ・ソース・グリッドのデータが選択された場合、変数はデータ・ソース・レベルではなくドキュメント・レベルで作成されます。

4. 「名前」フィールドに、一意の説明を入力します。特殊文字は使用できません。また、単語の間にスペースを追加しないでください。
5. 「リンク」をクリックして、選択したテキストへのリンクを作成します。
6. 「OK」をクリックします。

参照変数の検索

マスター・ドキュメントとドックレット内の参照変数の場所を表示できます。

▶ 変数を検索するには:

1. ドックレットまたはマスター・ドキュメントを開きます。
2. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」で「変数」タブを選択します。
3. 参照タイプ変数を右クリックします。「参照変数」ダイアログが表示されます。
4. 「検索」をクリックします。参照変数がドキュメントでハイライト表示されます。
5. 「参照変数」ダイアログを終了するには、「OK」をクリックします。

静的変数のマッピング

静的変数の作成後、それらをドキュメント内の場所にマップできます。

▶ 静的変数をマップするには:

1. 変数を表示するドキュメント内の場所を選択します。
2. Disclosure Managementマッピング・ツールで、「変数」タブを選択して変数リストを表示します。リストの変数ごとに、「タイプ」列に、添付されている変数の種類(静的または参照)が示されます。
3. 静的タイプ・リスト項目を選択して、「マッピング」アイコン - をクリックします。
4. 「詳細」タブにマッピング手順が追加されます。

参照変数のマッピング

参照変数は、様々な方法でマップできます(参照変数として、ページ参照として、またはハイパーリンクとして)。

参照変数を相互参照としてマップ

参照タイプの変数を作成後、それを相互参照としてマップできます。相互参照は、ドキュメントのある部分から別の部分にテキストやイメージを参照する際に使用されます。たとえば、「損益計算書」という参照変数を作成する場合、このテキストを別の場所に相互参照としてマップできます。評価時には、参照変数「損益計算書」の値がマップされた場所に表示されます。

▶ 参照変数を相互参照としてマップするには

1. 相互参照を追加するドキュメント内の場所を強調表示します。
2. Disclosure Managementマッピング・ツールで「変数」タブを選択して変数リストを表示し、参照タイプの変数を検索します。「タイプ」列見出しをクリックして、タイプ別に変数のリストをグループ化できます。
3. 参照変数を強調表示し、「マッピング」アイコン - をクリックして変数のマップダイアログを表示します。
4. 相互参照をクリックして、参照変数の値を挿入します。これはデフォルト設定です。
5. オプション。ハイパーリンクとして挿入をクリックして、参照変数の場所へのリンクに追加します。
6. 「OK」をクリックします。

参照変数をページ参照としてマップ

ページ参照では、マップされた場所に参照変数のページ番号を挿入します。参照変数を選択して、それを目的の場所にマップできます。たとえば、目次にマッピングを配置できます。結果としてページ番号が表示されます。参照変数へのハイパーリンクを設定することもできます。この場合、ページ番号をクリックすると、ドキュメント内の参照変数にリンクされます。

▶ 参照変数をページ参照としてマップするには

1. ページ参照を追加するドキュメント内の場所を強調表示します。
2. Disclosure Managementマッピング・ツールで「変数」タブを選択して変数リストを表示し、参照タイプの変数を検索します。「タイプ」列見出しをクリックして、タイプ別に変数のリストをグループ化できます。
3. 参照変数を強調表示し、「マッピング」アイコン - をクリックして変数のマップダイアログを表示します。
4. ページ参照をクリックして、参照変数の場所のページ番号参照を挿入します。
5. オプション。ハイパーリンクとして挿入をクリックして、参照変数の場所へのリンクに追加します。
6. 「OK」をクリックします。

参照変数をハイパーリンクとしてマップ

ドキュメント内の任意の場所で参照変数を選択し、ハイパーリンク・マッピングを使用して、ドキュメント内の選択した場所に表示するテキストを作成できます。たとえば、ハイパーリンク・マッピングでは、選択した参照変数の場所にリンクする"ここをクリック"というテキストを、ドキュメントに追加して表示することができます。選択した場所にマウスを置いた際に表示されるスクリーン・ヒントのテキストを定義することもできます。

▶ ハイパーリンクを参照変数にマップするには:

1. ハイパーリンクを追加するドキュメント内の場所を強調表示します。
2. Disclosure Managementマッピング・ツールで「変数」タブを選択して変数リストを表示し、参照タイプの変数を検索します。「タイプ」列見出しをクリックして、タイプ別に変数のリストをグループ化できます。
3. 参照変数を強調表示し、「マッピング」アイコン - をクリックして変数のマップダイアログを表示します。
4. 「ハイパーリンク」をクリックします。
5. 表示するテキストフィールドに、ドキュメントに表示するハイパーリンク・テキストを入力します。
6. 「スクリーン・ヒントのテキスト」フィールドに、ユーザーが選択したテキストにマウスを置いた際に表示するテキストを入力します。
7. 「OK」をクリックします。

変数リストの表示

変数は、Disclosure Managementマッピング・ツールの「変数」ペインに表示されます。次の情報が含まれます:

- ・ 名前 - ユーザーに割り当てられたユーザー定義の変数名。スペースを入れることはできません。
- ・ 値 - 静的変数の場合、ユーザーが入力した値。参照変数の場合、ドキュメントから選択された値。
- ・ タイプ - 変数のタイプ(静的または参照)。
- ・ 場所 - 変数が作成されたドックレットの名前。

変数がマスター・ドキュメントで作成された場合は、レポート名が表示されます。

リストの変数をクリックすると、そのマッピングが下部ペインに反映されます。次の情報が含まれます:

- ・ 値 - Wordを使用している場合、ドキュメント内にマッピングが存在するページおよび行番号。Excelを使用している場合、ドキュメント内にマッピングが存在するページおよびセルの位置(行および列)。
- ・ タイプ - 参照変数の場合、表示されるマッピング・タイプは相互参照、ページ参照またはハイパーリンクです。静的変数の場合、静的変数タイプが表示されます。
- ・ 場所 - マッピングが行われたドックレットの名前。

変数の編集

変数を編集するには、変数を選択して「編集」ボタン - をクリックします。

- ・ 静的変数を選択すると、静的変数ダイアログが表示されます。「新規の値」フィールドを入力して、「OK」をクリックします。
- ・ 参照変数を選択すると、参照変数ダイアログが表示されます。「検索」をクリックすると、ドキュメント内の参照変数の現在の場所が、黄色に強調表示されて表示されます。ドキュメントで新しい場所をクリックし、変数にリンクダイアログで「リンク」をクリックします。「OK」をクリックします
- ・ 「リフレッシュ」ボタン、をクリックして、変数のマップ済の場所を更新します。



注:

参照変数は、変数が作成されたドックレットでしか編集できません。

変数の削除および変数マッピングの除去

変数を削除すると、マッピングもすべて削除されます。削除されたグローバル変数のマッピングがドキュメントに存在する場合、それらは自動的に除去されます。複数のドックレットにマップされた変数がマスター・ドキュメントから除去されると、その変数はすべてのドックレットから除去されます。

変数が作成された場所に関係なく、変数マッピングはマスター・ドキュメントまたはドックレットのどこからでも除去できます。マッピングを除去すると、ドキュメントのその場所から変数情報が除去されます。

▶ 変数を削除するには:

1. 「Disclosure Management」リボンで「マッピング・ツール」を選択し、「変数」タブを選択します。
2. 変数を強調表示し、「アクション」ドロップダウンをクリックして「削除」を選択します。

▶ 変数マッピングを削除するには:

1. 「Disclosure Management」リボンで「マッピング・ツール」を選択し、「変数」タブを選択します。
2. 「詳細」タブで変数マッピングを強調表示し、「アクション」ドロップダウンをクリックして「マッピングの除去」を選択します。

ドキュメントでの変数マッピングの表示

「詳細」タブでマッピングを選択して、現在のドキュメントでのマッピングの位置を強調表示できます。

▶ マッピングを表示するには:

1. 「Disclosure Management」リボンで「マッピング・ツール」を選択し、「変数」タブを選択します。
2. 「変数」タブで変数をクリックすると、「詳細」タブにマッピングが表示されます。
3. ドキュメント内のマッピングを表示するには、次を行います:
 - 変数マッピングをダブルクリックします。
 - 変数マッピングを強調表示して、値検索アイコン - をクリックします。
 - 複数の変数マッピングを強調表示して、値検索ボタン - をクリックします。

変数の評価

「Disclosure Management」リボンで、「変数の表示」および「変数の評価」ボタンを切り替えて、変数の値または変数の定義をそれぞれ表示できます。いくつか制限事項があります:

- Microsoft ExcelおよびWordのドックレットでは、ページ番号の値がその位置を表すのはマスター・ドキュメントの範囲内に限られるため、ページ参照変数は評価できません。ページ参照はマスター・ドキュメントから正しく評価します。
- Microsoft ExcelおよびWordのドックレットで、評価モードでハイパーリンク変数をクリックすると、ハイパーリンクのターゲットが同じドックレット内にある場合のみ、適切な場所へ移動します。ハイパーリンクのターゲットが別のドックレットにある場合は、リンクをクリックしても効果はありません。すべてのハイパーリンクはマスター・ドキュメントから正しくリンクします。
- マスター・ドキュメントでは、すべてのドックレットからのすべての変数が正しく評価されます。

ディメンションについて

ディメンションは、ハイパーキューブのスライスまたは軸です。タクソノミによっては、ディメンションは"軸"、ハイパーキューブは"表"と呼ばれることがあります。XBRLでは、2つのディメンション・タイプが定義されます。

- 明示的なディメンション・ドメインとメンバーが既知です。詳細構造およびコンテンツはタクソノミで明示的に定義されます。
- タイプ指定されたディメンション - ドメイン・メンバーは不明で、詳細構造とコンテンツを含みます。これらのメンバーは無限である可能性があり、またはタクソノミに明示的に列挙することは非実用的です。

XBRLディメンションを使用して、メジャー値にコンテンツを追加できます。XBRLディメンションは、概念をカテゴリ化またはセグメント化したものとみなすことができます。XBRLディメンションでは、ファクト間のセマンティック関係を表

すことによってどのようにメジャー値に到達したか、およびそれらがどのようにセグメント化されたかを説明する手段としてカテゴリが使用されます。たとえば、収益概念に地域ディメンションと製品ライン・ディメンションが含まれている場合、他の概念に対しても同様に地域ディメンションと製品ライン・ディメンションを再利用できます。収益概念は各ディメンションから1つの値を選択する必要があります。そのため、どの地域や製品ラインが適用されるかを指定せずに収益をレポートすることはできません。これにより検証エラーが生成されます。一部のタクソミでは"デフォルト"(通常は"ドメイン")を指定します。そして、地域ディメンションのデフォルトは"全地域"および製品ラインは"すべての製品"である可能性があります。これらの2つのデフォルトが設定され、明示的にマップされたディメンションを含まないレポートされた"収益"は、"全地域"および"すべての製品"に対する"収益"をレポートしていることを示します。

このイメージは、「ディメンション・メンバー」タブの"デフォルトの"表記を示しています。

マッピング処理で、ディメンション・メンバーがXBRLコンテキストに関連付けられるようになります。したがって、ディメンション・マッピングは、コンテキストによってのみ概念マップ(ファクト値)に関連付けられます。

XBRLディメンションは、Oracle Hyperionデータ・ソース(Oracle EssbaseまたはOracle Hyperion Financial Managementなど)のディメンションとは異なります。XBRLディメンションとOracle Hyperionデータ・ソースのディメンションの間には、概念の面でいくつかの類似点がありますが、体系的な関係はありません。これら2つを混同しないでください。

XBRLディメンションの基本用語:

- ハイパーキューブ - ディメンションのコレクションを表します。ハイパーキューブはプライマリ・アイテムに関連付けるディメンションを定義します
- プライマリ・アイテム - 財務レポートのライン・アイテムを表す概念。ハイパーキューブがプライマリ・アイテムに関連付けられている場合、適用されるディメンションが決まります。
- ディメンション - 情報がレポートされるカテゴリ。
- ドメインおよびドメイン・メンバー - ディメンションを表すために使用されるすべてのドメイン・メンバーのセットです。

プライマリ・アイテムのマッピング

「概念」タブで「ディメンション」ビューを選択してプライマリ・アイテムを表示したら、通常のタクソミ概念をマップするのと同じ方法で、プライマリ・アイテムをマップします。プライマリ・アイテムは、表示ビューと計算ビューにも一覧表示されます。

▶ プライマリ・アイテムをマップする手順は、次のとおりです:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで、「概念」タブで「ディメンション」ビューが選択されていることを確認します。
2. ドキュメントで、マップするプライマリ・アイテムを選択します。
3. 「概念」タブで、「マッピングのアタッチ」アイコン - を選択します。

ドメインおよびドメイン・メンバーのマッピング

上部ペインからプライマリ・アイテムを選択した後、「ディメンション・メンバー」ペインのディメンション・ツリーからドメインおよびドメイン・メンバーをマップできます。ドメインおよびドメイン・メンバーをマップする場合は、次の点に注意してください:

- 様々なディメンションからの複数のドメインまたはドメイン・メンバー(あるいはその両方)を同じファクト値にマップできます。たとえば、ドメイン・メンバーSodaおよびNew Yorkを同じファクト値にマップできます。
- 同じディメンションの複数のドメイン・メンバーを同じファクト値にマッピングすることはできません。たとえば、RegionsディメンションからのドメインEastおよびWestを同じファクト値にマップすることはできません。
- ハイパーキューブとディメンションは常に抽象であり、Disclosure Managementでは、Officeドキュメント・データにマップすることはできません。
- 「デフォルト」ディメンション - 一部のタクソノミではディメンションに"デフォルト"(通常は"ドメイン")を指定します。デフォルトが意図したディメンション値の場合、ディメンション・マッピングは必要ありません。その代わりに推測されます。次のイメージは、「ディメンション・メンバー」タブのデフォルトの表記を示しています。

▶ ドメインまたはドメイン・メンバーをマップするには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで、「概念」タブの「表示」または「定義」ビューが選択されていることを確認します。
2. ドキュメントで、マップするドメイン・アイテムを選択します。
3. ドメインまたはドメイン・メンバーを選択します。
4. 下部ペインにある「ディメンション・メンバー」タブで、「マッピングのアタッチ」アイコンをクリックします。

レポート・レベルのマッピング

レポート・レベル・マッピングに対しディメンションをマッピングする場合、Disclosure Managementでは次をマップできます。

1. プライマリ・アイテム。次の例では、「概念」タブを使用して、プライマリ・アイテム・マッピングがドキュメント内のセルに作成されます。
2. ディメンションを個別のセルに。次のイメージは選択したセルを示しています。

次のイメージは、「ディメンション・メンバー」タブを使用してセルにマップされたディメンションを示しています。

3. ディメンションをセルの選択に。次のイメージは、選択したセルのグループを示しています。

次のイメージは、「ディメンション・メンバー」タブを使用してセルのグループにマップされたディメンションを示しています。

データ・ソース・レベル・マッピング

データ・ソース・ディメンションをマッピングする場合は、データ・ソースのタグ付けの場合にのみ、Disclosure Managementで次のマッピングが可能です。

1. プライマリ・アイテム:
2. ヘッダーに対するディメンションのマッピング:
3. セルをディメンションへ

前述の2番目と3番目のマッピングでは、プライマリ・アイテムの概念マッピングには関係のないデータ・ソース・ディメンションのマッピングを作成します。この機能を使用すると、プライマリ・アイテム・マッピングおよびディメンション・マッピングの視点(POV)の交差に基づいて、対応するファクトとディメンションを動的に関連付けられます。

データ・ソースのタグ付けを使用して直接タグ付けするよりも、SmartViewグリッドの間接的なタグ付けを行った方がよいこともあります。この方法の利点の1つは、Smart Viewグリッドをリフレッシュしても、すでに行われたフォーマットが保持される点です。

Smart Viewによる間接的なデータ・ソースのタグ付けは、次によって行われます。

1. Excelドックレットをシート1として作成し、マスター・ドキュメントに追加
2. シート2でデータ・ソース用のSmart Viewグリッドを作成
3. シート2にタグ付けするシート1のセルを参照
4. レポート・レベルのタグ付けを使用した新しい表のタグ付け

ディメンション・マッピングの検証

Disclosure Managementでディメンション・マップを作成するには、ドメインまたはドメイン・メンバーが有効なタクソノミ概念に関連付け可能である必要があります。ディメンションに関するXBRLの仕様では、タクソノミ概念とドメイン・メンバー間のバインディング関係が定義されています。

ディメンション・マップを作成するための前提条件は、次のとおりです：

- 既存の概念マップ - ディメンション・マップを作成する前に、最初のタクソノミ概念をマップする必要があります。ドメインおよびドメイン・メンバーのマッピングは、既存のタクソノミ概念がマップされていないOfficeデータに対しては許可されません。
- プライマリ・アイテムの互換性 - マップされたプライマリ・アイテムは、指定されたドメインまたはドメイン・メンバーとの間で互換性がある必要があります。各プライマリ・アイテムには、それに関連付けることのできるディメンシヨナリティを定義します。たとえば、ドメインEastは、概念GrossProfitにもマップされているデータにマップできます。しかし、概念CompanyNameにもマップされているデータにはマップできません。Disclosure Managementでは作成することはできますが、検証エラーがスローされます。

ディメンション・マップの格納

Officeドキュメント(Microsoft ExcelまたはWord)のデータに対して有効なドメインまたはドメイン・メンバーのマップを作成すると、Disclosure Managementアドインにより、マップされたディメンシヨナリティに関する情報が格納されます。この情報の他に、マップされたタクソノミ概念、そのコンテキストおよび単位(数値コンテキストの場合)に関する情報が存在します。

仮想コンテキスト

マップされたXBRLドメインとドメイン・メンバーは、最終的にはインスタンス・ドキュメントのコンテキスト内のセグメントまたはシナリオ(あるいはその両方)として定義されます。Disclosure Managementでは、仮想コンテキストを使用することによって、マップされたディメンシヨナリティが管理されます。ファクト値にコンテキストとディメンシヨナリティがある場合、仮想コンテキストが生成されます。仮想コンテキストはベース・コンテキストを拡張してディメンシヨナリティを追加したものです。仮想コンテキストは該当するドメインまたはドメイン・メンバーのディメンション名を含む

ことで、基本コンテキストを拡張します。ディメンショナリティを自動的に伝播するために仮想コンテキストをマップできます。

仮想コンテキストを表示または非表示にするオプションを設定できます。

▶ 仮想コンテキストを表示または非表示にするには:

1. 「Disclosure Management」リボンで「オプション」をクリックし、「XBRL」を選択します。Oracle Hyperion Disclosure Managementの「オプション」ダイアログが表示されます。
2. Oracle Hyperion Disclosure Managementの「オプション」ダイアログの「マッピング」領域で:
 - 仮想コンテキストを表示するには:「仮想コンテキストの表示」チェックボックスをオンにします。
 - 仮想コンテキストを非表示にするには:「仮想コンテキストの表示」チェックボックスをクリアします。

コンテキストの管理

Disclosure Managementでの仮想コンテキストの管理は、同じコンテキストとディメンションの組合せを使用する仮想コンテキストの連結によって行われるのであり、マップされたアイテムごとに1つの仮想コンテキスト(つまり、ファクト値に関連付けられたディメンション)を作成するわけではありません。たとえば、ドキュメントが次のようにモデル化されているとします:

- セルB3には、概念(Revenue)、コンテキスト(Qtr1)およびドメイン(East)がマップされています。Qtr1およびEastで構成される仮想コンテキストが生成されます。
- セルB4には、概念(Profit)、コンテキスト(Qtr1)およびドメイン(East)がマップされています。このセルは、セルB3によって使用される仮想コンテキストと同じ仮想コンテキストを使用します。Disclosure Managementでは、セルB4に対する新しい仮想コンテキストは作成されません。
- 前述の例では、4つの仮想コンテキスト(Qtr1-East、Qtr2-East、Qtr1-West、およびQtr2-West)が生成されます。ただし、明示的に定義されたコンテキストは2つのみ(Qtr1およびQtr2)です。
- Disclosure Managementアドインでは、マップされたタクソノミ概念と(Officeドキュメントの)対応するデータを格納する場合とほぼ同様の方法で、ディメンショナル情報が格納されます。

「コンテキスト」ペイン

仮想コンテキストが作成されると、「コンテキスト」ペインが更新され、仮想コンテキストが表示されます。すべての仮想コンテキストは読取り専用です。ただし、仮想コンテキストは、通常のコンテキストをマップする場合と同じ方法でマップできます。バージョン1では、ユーザーは、「コンテキスト」ペインに表示される自動生成された仮想コンテキスト名を変更することはできません。この名前は、ディメンション・ツリーに表示されているように、コンテキスト名とディメンション名で構成されます(Qtr1 - Eastなど)。

インスタンスの生成

仮想コンテキストが連結されると、それらは(インスタンス・ドキュメント専用の)実コンテキストになります。インスタンス生成ルーチンにより、(インスタンスXML内の)コンテキスト定義の上に、ユーザーにわかりやすいコンテキスト名を

記述するXMLコメントが挿入されます。これにより、ユーザーは、XMLを検証することを選択した場合、インスタンスXML内のコンテキストを確認できます。

型付きディメンションの適用

タクソノミの分類が既知(有限)でリストされている明示的なディメンションとは異なり、型付きディメンションは、分類構造および内容が不明かつ無限、または明示的に列挙するのが非現実的な場合に使用されます。型付きディメンション値は策定者によって定義され、タクソノミには表示されません。策定者は、報告主体の要件に従って、任意の数のメンバーを作成できます。たとえば、"Sales Representation Name"の型付きディメンションは、各"Sales"個人に対して複数回レポートできます。

Disclosure Managementでは、ドキュメント・レベルおよびDisclosure Managementがサポートされるすべてのデータ・ソースで、型付きディメンション・メタ値をタグ付けする機能がサポートされています。

型付きディメンションを定義したら、明示的なディメンションと同じように、マップ、確認、検証、複製、ロールオーバー、エクスポートおよび公開を行うことができます。

マッピング - プライマリ・アイテム・マッピング、コンテキスト・マッピングおよび(オプションの)単位マッピングが必要です(プライマリ・アイテムのデータ型に応じて)。財務アイテムは一般に通貨アイテムであるため、XBRL検証エラーを防ぐために、常に単位をプライマリ・アイテムにマップする必要があります)。

型付きディメンション・インスタンスの作成

登録されたレポートを開き、型付きディメンション定義を含むタクソノミを選択してから、ディメンション・メンバーを選択します。次に、マスター・ドキュメントにあるプライマリ・アイテムを識別してインスタンスを作成し、プライマリ・アイテムに関連付けられている各値をマップし、プライマリ・アイテムに関連付けられているマスター・ドキュメント内の値領域全体をマップします。

▶ 型付きディメンションの値を定義するには

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」()を選択して、「マッピング・ツール」パネルを表示します。
2. 「概念」タブをクリックして、型付きディメンション定義を含むタクソノミのXBRL概念に移動します。
3. 適切なXBRL概念を選択すると、「ディメンション・メンバー」タブの下部ペインに、関連する明示的ディメンションと型付きディメンションの両方が表示されます。型付きディメンションは「ディメンションの編集」ボタンを使用して識別します。
4. 「ディメンション・メンバー」タブで、「ディメンションの編集」ボタンに関連付けられたディメンションをリックします。



注:

「ディメンションの編集」ボタンは型付きディメンションであることを示します。

型付きディメンション定義のすべてのインスタンスが、使用可能な場合、「ディメンション・メンバー」タブの右に配置された「タイプ指定されたディメンション」タブに表示されます。

5. 「新規」ボタン - をクリックします。
6. ドキュメントでディメンション値を値ヘッダーに関連付けるには、値ヘッダーを強調表示して「値の取得」ボタンをクリックします。このイメージは選択したアイテムを示しています。

7. 値ヘッダーに関連付けられている値をマップする準備ができました。「概念」タブで型付きディメンションを選択し、ドキュメントでマップする値を選択して、「マッピングのアタッチ」ボタンをクリックします。マップされたアイテムが表示されます。
8. 選択した値ヘッダーのすべての値のマッピングを完了したら、下部ペインでディメンションを選択し、ドキュメントで値を表す領域を選択して、「マッピングのアタッチ」ボタンをクリックします。

Disclosure Managementを使用したEDGAR HTMLの生成

このセクションでは、SEC申告のためにEDGAR HTMLドキュメントを検証および公開するプロセスについて説明します。

Disclosure ManagementでのEDGARドキュメントの作成

Disclosure ManagementはSEC申告者向けに、SECのEDGAR HTML申告およびXBRL申告を作成、検証、公開するための包括的なソリューションを提供しています。Disclosure Managementを使用すれば、EDGAR Filer Manualの検証ルールに準拠しながら、DMマスター・ドキュメントからEDGAR HTML申告ドキュメントとXBRL申告ドキュメントの両方を作成できます。

次の手順では、EDGAR HTMLの生成を中心に説明していますが、XBRLの作成手順と一緒に使用する必要があります。ユーザーは同じマスター・ドキュメントおよびドックレットを利用して、HTMLドキュメントとXBRLドキュメントの両方を作成できます。

▶ EDGARドキュメントを作成するには:

1. Financial Reportingのコンテンツを、Microsoft WordおよびExcelドックレットに通常どおりに組み込みます。EDGAR HTMLの生成では、表紙、目次、追加ノート、その他のコンテンツなど、XBRL以外のコンテンツを含む追加のドックレットを作成する必要があります。
2. ドックレットをマスター・ドキュメントに組み込みます。
3. 必要であれば、Disclosure Managementの変数を利用して、目次を管理したり共通データを同期します。
4. マスター・ドキュメントのルック・アンド・フィールを完成させます。マスター・ドキュメントは、EDGAR HTMLを生成するための最終レポートになります。このため、ドックレットが正しい順序に並べられ、フォーマットが適切で、不要なHTMLコンテンツ(XBRL申告のDEIタグ情報など)が非表示になっているように、注意を払う必要があります。
5. 検証または生成手順の前に、Disclosure Managementの変数が「評価」モードになっており、マスター・ドキュメントが最終状態になっていることを確認します。
6. 「Disclosure Management」リボンで「**検証**」、**US SEC, EDGAR HTML**の順に選択して、ドキュメントをEDGAR Filers ManualのHTML検証ルールと照合します。
7. 必要に応じて、エラーを確認して解決します。
8. 「Disclosure Management」リボンで「**公開**」、**EDGAR HTML**の順に選択して最終ドキュメントを生成します。EDGARファイルを保存するためのダイアログが表示されます。
9. zipファイル名を指定して、「**保存**」をクリックします。zipファイル名がHTMLドキュメントの名前になります。必要な場合、後からこのドキュメントの名前を変更できます。該当するドキュメントがすべて、名前の付いたzipファイルに保存されます。zipファイルには、EDGAR HTMLドキュメントとレポートで使用されるイメージ・ファイルが含まれます。

前述の最後の手順でドキュメントが生成されたら、ドキュメントの公開におけるDisclosure Managementの役割は終了します。ドキュメントをSECのWebサイトに提出するのは、申告者の責任です。SEC提出システムを介してドキュメントを提出するには、適切なEDGARアクセス・コードが適用されていることを確認してください。詳細は、[http:// www.sec.gov/info/edgar/edmanuals.htm](http://www.sec.gov/info/edgar/edmanuals.htm)にあるEDGAR Filer Manualを参照してください。

フォーマットに関するガイドライン

Disclosure Managementドキュメントの作成時に、生成されるEDGAR HTMLドキュメントのルック・アンド・フィールを適切なものにするには、フォーマットに関する考慮事項が重要になります。Microsoft Officeの標準機能を使用して、Disclosure Managementのマスター・ドキュメントおよびドックレット内で適切なフォーマットを作成し、維持するのは申告者の責任です。

コンテンツをEDGAR HTMLに公開する際 ドキュメント内の最終フォーマットに基づき、Disclosure Managementによって最も正確な表現が提供されます。

すべてのMicrosoft WordフォーマットがHTMLに正しく変換されるわけではありません。たとえば、Wordではタブの使用はサポートされますが、HTMLではサポートされません。このため、WordでWord表オブジェクトではなくタブを使用して表が作成された場合、最終的なHTML出力で表の列や行のアライメントは保持されません。このような一般的なフォーマットのヒントについては、Disclosure Management製品に付属するホワイトペーパー、DM 11.1.2.2.300ドキュメント・フォーマットに関するガイドランを参照してください(<http://support.oracle.com>でも参照できます)。これらのガイドラインを参照して、ドキュメントに最も正確なフォーマットが適用されていることを確認してください。

EDGARのサンプル

Disclosure Managementには、EDGARドキュメントのサンプルも付属しています(<http://support.oracle.com>にあるDM 11.1.2.2.300 10Q Sample Report.zip)。このzipファイルはDisclosure Managementレポートを完全にエクスポートしたもので、次のものが含まれます。

- SECレポート四半期報告書(10Q)を表すマスター・ドキュメント
- 製品に付属するDisclosure Managementのベスト・プラクティスに関するガイドランを使用した、10Qのサブセットを表すMicrosoft WordまたはExcelドックレット。
- SEC申告要件のサブセットを表すXBRLタグ。
- 次の事項の設定および使用を示す変数:
 - 目次管理
 - 一般的なテキストと数値
 - クロスフッティング・ルール
 - 指示語

DM 11.1.2.2.300 Implementation Best Practices.pdfおよびDM 11.1.2.2.300 Performance Benchmarks.pdfについて詳しくは、Disclosure Management製品フォルダへのリンク、<http://support.oracle.com>をクリックしてください。

タプルについて

XBRLタプルは、関連のある一連の概念です。タクソノミとは違い、タプルには関連のある追加の概念が必要です。単一のタプル・メンバーのみでは十分な関連情報が提供されない場合がありますが、タプル・メンバーのグループでは提供されます。たとえば、「会社の住所」というタプル概念は、次のタプル・メンバーで構成されます:「名前」、「番

地」、「市区町村」、「都道府県」、「郵便番号」および「国」。単一のタプル・メンバー（「市区町村」など）のみでは「会社の住所」という概念を記述するには十分ではありません。すべてのタプル・メンバーが揃ったときのみ概念が有意義になります。Disclosure Managementマッピング・ツールの「概念」タブの下には、タクソノミ内に定義されている既存のすべてのタプルが表示されるタプル・ビューがあります。

タプルの操作

インスタンス・ドキュメントでは、**タプル・グループ**は、**タプル・ノード**内でネストされている**タプル・メンバー**のコレクションを表します。XBRLのコンテキスト、単位および脚注と同様に、**タプル・グループ**はDisclosure Managementマッピング・ツールで作成および削除されます。ただし、主な相違点は、**タプル・グループ**はマップ・リポジトリに格納されることです。**タプル**の親は通常は抽象（マップ不可）であり、その子メンバー（**タプル・メンバー**）は非抽象（マップ可能）であることに注意してください。

すべてのタクソノミで**タプル**が使用されるわけではありません。通常、タクソノミでは**タプル**またはXBRLディメンションのいずれかが使用されますが、これら両方が使用されるわけではありません。

埋込み**タプル**は親**タプル**で、別の**タプル**内で定義されます。埋込み**タプル**は（上で定義されている）**タプル・グループ**に類似していますが、対応する**タプル・グループ**内からのみ作成および削除できる点が異なります。埋込み親**タプル**から**タプル・グループ**を作成することはできません。さらに、埋込み**タプル・グループ**の親に関する情報は、Officeドキュメントには格納されません。

タプル・ビューの使用

XBRL**タプル**は、「概念」タブで表示できます。アクティブなタクソノミのディメンション・ビューは、「概念」タブ・リボンの右にある関係ビュー・リストを使用して表示します。**タプル・ビュー**を選択すると、上部パネルにすべての**タプル・ノード**（存在する場合）が表示されます。

上部ペインから**タプル**を選択すると、**タプル詳細ペイン**（下部パネル）が更新され、**タプル・グループ・メンバー**の詳細が表示されます。

下部ペインには「**タプル・グループ**」ペインが表示されます。このペインで、**タプル・メンバー**を**タプル・グループ**にマップできます。

▶ **タプル・ビュー**を変更するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルで「**概念**」タブを選択します。
2. **タプル**を使用するタクソノミが表示されている状態で、をクリックします。
3. ドロップダウン・メニューから「**タプル**」を選択します。

▶ **タプル・メンバー**を**タプル・グループ**にマップするには:

1. **タプル・ビュー**に切り替えます。
2. 上部パネルで、親**タプル**要素を見つけます。

たとえば、「会社住所」を検索できます。

3. 「**追加**」アイコン - をクリックして、**タプル・インスタンス**を作成します。
4. **タプル・インスタンス**の名前の指定を求められます。

下部ペインにある「タプル・グループ」タブで、タプル・ツリーが再作成されます。

5. 下部ペインにある「タプル・グループ」タブで、(表示ビューで)通常の概念のマッピングに使用するのと同じマッピング・パラダイムで、個々のタプル・メンバーをマッピングします。

特定のタプル・メンバーを2つ以上のアイテム("住所行1"など)にマッピングする必要がある場合は、"住所行1"メンバーを選択し、下部のパネルで「新規」アイコン -- をクリックすることで、タプル・グループ内にタプル・メンバーの2番目のインスタンスを作成できます。下の画像では、"住所行1"の2番目のインスタンスがタプル・グループに追加されています。

Disclosure Managementドキュメントのロールオーバー

ロールオーバー機能を使用すると、元のタクソノミまたは新しいタクソノミを使用して、ある期間から別の期間にレポートをロールオーバーできます。エクスプローラ・リポジトリにはロールオーバーに使用されるレポートが含まれ、ロールオーバー・ドキュメントもエクスプローラ・リポジトリに保存されます。ロールオーバー中に実行される主な操作:

- すべてのレポート・ドキュメントの複製: Microsoft ExcelまたはWordのレポート・ドキュメント、Microsoft ExcelおよびWordのドックレット・ドキュメント。
- レポート・プロパティの更新: Disclosure Managementレポートの名前、およびXBRLインスタンス・ドキュメントの名前。
- レポートのタクソノミ関連付けの変更、および対応するXBRLマッピング・プロパティの更新。
- ネームスペースによるマッピングの識別およびロールオーバー(必要に応じて、新規ターゲットのネームスペースの指定が可能)。参照されているタクソノミ内の変更が、ロールオーバー処理で反映されます。

▶ ドキュメントをロールオーバーするには:

1. Disclosure Managementサーバーに接続します。
2. 「**Disclosure Management**」リボンでロールオーバーアイコン - を選択します

ロールオーバー・レポート・ウィザードが起動されます。

3. 「次」をクリックします。

「レポートの場所」画面が表示されます。

4. 「ファイル名」フィールドで、ロールオーバーしたレポートを保存するパスを指定し、「次」をクリックします。

パスに移動するには、「参照」をクリックしてフォルダに移動し、レポート名を入力します。

タクソノミ・リストの取得画面が表示されます。登録済タクソノミのリストが作成されると、「タクソノミの選択」画面が自動的に表示されます。

5. 登録済タクソノミのリストから新しいタクソノミを選択して、「次」をクリックします。

「レポートのプロパティ」画面が表示されます。

6. 「レポート名」フィールドに、新しいレポートの名前を入力します。
7. 「**XBRLインスタンス名**」フィールドに、新しいXBRLインスタンスの名前を入力し、「次」をクリックします。サーバーからソースおよびターゲットのタクソノミの収集、タクソノミ・データの取得画面が表示されます。完了したら、「次」をクリックして、ロールオーバー・ルール(ネームスペース)画面を表示します。

レポートにデータ・ソース・マッピングがあり、概念の不一致が存在する場合は、「データ・ソース・マッピング」画面が表示されます。

8. ソース・ネームスペース列には、オリジナル・レポート(マスター・ドキュメントとドックレットを組み合わせたもの)内のすべての既存のマッピングがリストされます。リスト内の各ソース・ネームスペースに対応して、ターゲット・ネームスペース列に、ネームスペースを選択、確認または上書きできるネームスペースが表示されます(1つのソース・ネームスペースについて1つのターゲット・ネームスペース)。
9. 各ソース・ネームスペースについて選択を確定する必要があります。ターゲット・ネームスペース・リスト内で使用可能なデフォルトのネームスペースがない場合、またはネームスペースを変更する場合、対応する「参照」ボタンをクリックし、ターゲット・タクソミ・ネームスペースの選択ウィンドウからネームスペースを選択し、「OK」をクリックします。
10. ターゲット・ネームスペースの選択が完了したら、「次」をクリックし、「データ・ソース・マッピング」画面を表示します。
11. 「データ・ソース・マッピング」画面で、重複するデータ・ソース・マッピングがないか、考えられる競合を確認して解決します。ステータス記号の詳細は、[78ページの検証エラー・メッセージの表示](#)を参照してください。



注:

概念の不一致(データソース・レベルで異なったタグが付けられている概念、つまり、元のデータソースで「純収益」勘定科目が概念「収益合計」にタグ付けされていたが、新規データソースで、すでに他の概念にタグ付けされているなど)が、インスタンスの検証機能でレポートされます。概念の不一致の横の「オーバーライド/フィールド」を選択し、不一致を解決します

12. レポートをロールオーバーするには、「次」をクリックします。レポートのロールオーバー処理画面が表示されます。処理が完了すると、「Disclosure Managementレポートのロールオーバーが完了しました」画面が表示されます。
13. 新しいレポートを表示するには、「新規レポートを開きます。」を選択して、「終了」をクリックします。



注:

Disclosure Managementドキュメントのタクソミを変更した場合、既存のXBRL概念のマッピングがマッピング・リポジトリに保持されます。マッピングに属する概念が新しいタクソミに存在しないにもかかわらず、ドキュメントのデータを引き続き参照する場合、不一致とみなされます。

ブロック・テキストのマッピング

ブロック・テキストは、品質または非通貨タクソミ概念にマップされるテキスト情報のセットです; 一方、脚注は、任意のマッピングに割り当てることができます。

次の例では、ブロック・テキストを"Basic of Presentation and Recent Account"タクソミ概念にマップします。

▶ ブロック・テキストをタクソミ概念にマップするには:

1. マップするブロック・テキストが含まれるドキュメントを開きます。
2. Disclosure Managementマッピング・ツールで、「概念」を選択します。
3. 適切なデータ型を含む概念に移動し、ブロック・テキストをマップします。

ネストされたタグ

Disclosure Management Disclosure Managementでは、データ値を別のタグ内でタグ付けできる、すべてのレベルのネストされたタグがサポートされています。ネストされたタグは、インスタンス・ドキュメント内に複数回表示す

る必要のあるアイテムにタグ付けする必要がある場合に便利です。たとえば、小数点以下の値がブロック・テキスト内でタグ付けされ、さらにテキスト・タグ内で個別にタグ付けする必要があるとします。この場合、小数点以下の値は、ドキュメント内で2回表示されます。インスタンス内で、小数点以下の値が、ブロック・テキスト内に含まれ、また、数値としても含まれます。

Disclosure Managementでは、マップされているアイテム、およびマッピングが発生している場所に基づいて、ネストされたタグが処理されます。

- タグが作成されたとき(概念がドキュメントの項にマップされたとき)、新しいタグには、デフォルトのコンテキストおよび単位はありません。
- クイック・マッピング機能を使用して新しいタグを作成した場合(41ページのクイック・マッピングを参照)、タグは、クイック・マッピングのユーザー・インターフェースから、指定されたコンテキストまたは単位で作成されます。
- ドキュメントの項が強調表示され、マッピングのためのコンテキストまたは単位に関連付けられている場合、Disclosure Managementでは、すべての最上位レベルのタグが識別されます。最上位レベルのタグは、別のタグ内にネストされていないタグを参照します。
- 最上位レベルのタグが、強調表示された範囲内にある場合、Disclosure Managementでは、そのタグをコンテキストまたは単位にマップします。マッピングは、コンテキストまたは単位がすでにマップされているかどうかにかかわらず発生します。既存のコンテキストまたは単位のマッピングはすべて上書きされます。
- 強調表示されている範囲外の開始または終了の最上位レベルのタグは無視され、マッピングは発生しません。

マップされたデータの除去とDisclosure Managementオブジェクトの削除

XBRLマップの関連付けの除去とDisclosure Managementオブジェクトの削除は、次のように厳密に区別されます。

- XBRLマップの関連付けの除去 - Officeドキュメントまたはデータ・ソース・メンバーから、マップされたXBRL要素を除去すること、またはその関連付けを解除することを表します。たとえば、数値表セルから単位マップを除去した場合でも、単位の定義は残ります。
- Disclosure Managementオブジェクトの削除 - コンテキスト、単位、変数、脚注などの定義済オブジェクトの削除を表します。たとえば、ユーザーは単位のリストから定義済単位を削除できます。Disclosure Managementオブジェクトを削除すると、Disclosure Managementオブジェクトおよび関連付けられたマッピングが除去されます。



注:

タクソノミ概念は、タクソノミに定義されているため削除できません。

XBRLマップの除去

タクソノミ概念、コンテキスト、単位および脚注のXBRLマップの除去は、次のものに適用できます:

- ・ 単一データ・ポイント
- ・ 複数データ・ポイント(複数のマップされたデータ・ポイントにまたがるOfficeドキュメント)
- ・ データ・ソース(タクソノミ概念のみ。71ページのデータ・ソース・アイテムの削除と抑制を参照)
- ・ デイメンション(ドキュメントまたはデータ・ソース・レベル(あるいはその両方)のマッピングの関連付け)
- ・ タプル

マップされたアイテムを除去すると、除去可能なマップされたアイテムが表示された「マッピングの除去」ダイアログ・ボックスが表示されます。表示されるアイテムの数は、Disclosure Managementマッピング・ツールで選択されたDisclosure Managementオブジェクトによって決まります。たとえば、単位オブジェクトが選択された場合、このダイアログには、その単位オブジェクトにマップされているドキュメント・データ・ポイントが列挙されます。マッピングが除去された後、元に戻すことはできません。データをDisclosure Managementオブジェクトに再マップして、マップを再作成する必要があります。タクソノミ概念については、マッピング情報がマッピング・リポジトリから除去され、確認モードで表示されなくなります。マップされた概念にXBRLデイメンションが関連付けられている場合は(ドキュメントまたはデータ・ソース・レベル(あるいはその両方)の関連付けが行われている場合)、それらのデイメンションもマッピング・リポジトリから除去されます。

データ・ソース・マッピングの除去は、Officeドキュメント・マッピングの除去とは異なります。Smart View OfficeドキュメントまたはFinancial Reportingレポートを使用して作業している場合は、タクソノミ概念を使用してデータ・ソースXBRLマップを作成できます。マッピング・リポジトリで、これらのマップはOfficeドキュメントではなくデータ・ソースに関連付けられます。データ・ソース・マップは、Officeドキュメント内の対応するデータに自動的に関連付けられます。

データ・ソース・マッピングの除去には、次のオプションがあります：

- ・ Officeドキュメント内の選択されたデータ・ポイントからタクソノミ概念マップを抑制します(概念マップは、Officeドキュメント内での関連付けは解除されますが、マッピング・リポジトリからは削除されません)。これは、Officeドキュメント内のデータ・ポイントからのデフォルト・データ・ソース・マップのオーバーライドとは異なります。マップされたアイテムの抑制の詳細は、71ページのデータ・ソース・アイテムの削除と抑制を参照してください。
- ・ タクソノミ概念マップをデータ・ソース・メンバーから永続的に除去します(概念マップは、データ・ソース・メンバーを参照するすべてのOfficeドキュメントからのみでなく、マッピング・リポジトリからも除去されます)。この場合、マッピングが除去された後で除去を取り消すことはできず、マップを再作成するには、データ・ソース・メンバーをXBRLタクソノミ概念に再マップする必要があります。タクソノミ概念はマッピング・リポジトリから除去され、確認モードで表示されなくなります。さらに、データ・ソースXBRLマップは、同じデータ・ソース・メンバーから導出されたOracle Smart View for Officeデータを使用する、XBRLマッピングのあるすべての既存のOfficeドキュメントに影響を与えます。

表8 「マッピングの除去」ダイアログのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| タイプ | Disclosure Managementオブジェクトのタイプ(概念、コンテキスト、単位、脚注)を示します |
| マッピング | 値がマップされているXBRLタクソノミ・オブジェクトを表示します |
| 値 | マップに関連付けられているレポートまたはデータ・ソース値を表示します |

| フィールド | 説明 |
|---------|---|
| データ・ソース | 値がレポート/ドキュメント・レベルのマッピングであるか、データ・ソース・マッピングであることを示します |

Disclosure Managementオブジェクト削除の削除

Disclosure Managementオブジェクトの削除とは、コンテキスト、単位、変数、脚注などの定義済Disclosure Managementオブジェクトを削除することを表します。たとえば、ユーザーは、単位のリストから定義済の単位オブジェクトを削除できます。この場合、Disclosure Managementオブジェクトが除去されるだけでなく、削除されたオブジェクトに関連付けられているOfficeドキュメント内のすべてのマッピングも除去されます。タクソミ概念はタクソミで定義されるため(OfficeユーザーではなくDisclosure Management XBRLタクソミ・デザイナーによって定義されるため)、Disclosure Managementマッピング・ツールでは削除できません。Disclosure Managementオブジェクトが完全に削除される前に、手順をリセットできます。ただし、「OK」をクリックしてDisclosure Managementオブジェクトを完全に削除した後は、操作を元に戻すことができないため、オブジェクトを再定義してマップを再作成する必要があります。

データ・ソース・アイテムの削除と抑制

Smart View Officeドキュメントを使用して作業する場合、タクソミ概念とともにデータ・ソースのXBRLマップを作成できます。マッピング・リポジトリで、これらのマッピングは、Officeドキュメントではなくデータ・ソースに関連付けられます。データ・ソース・マップは、Officeドキュメント内の対応するデータに自動的に関連付けられます。データ・ソース・マップは、次の2つの方法で除去できます：

- データ・ソースとのタクソミ概念マップの関連付けを除去します。概念マップは、マッピング・リポジトリからだけでなく、同じデータ・ソース・メンバーを使用するすべてのOfficeドキュメントからも削除されます。削除対象としてマークされたアイテムは、「マッピングの除去」ダイアログ・ボックスで元に戻すことができます。ただし、アイテムを削除すると、完全に削除されます。
- Officeドキュメント内の選択したデータ・ポイントでタクソミ概念マップを抑制します(概念マップは、Officeドキュメントとの関連付けは解除されますが、マッピング・リポジトリからは除去されません)。このアクションは、Officeドキュメントのデータ・ポイントにあるデフォルトのデータ・ソース・マップのオーバーライドとは異なります。また、「Disclosure Management」リボンの「抑制されたマッピング」オプションを選択することにより、抑制されたデータ・ソース・マップを再び使用可能にすることもできます。

▶ データ・ソース・アイテムを除去(削除)するには：

1. 削除するデータ・ソース概念を選択し、Disclosure Managementマッピング・ツールのツールバーのをクリックします。

を選択して、「マッピングの除去」画面上のアイテムの表示を縮小できます。

「表示」リストを使用して、すべてのアイテム、抑制されたアイテムのみ、または抑制解除アイテムのみを「マッピングの除去」ダイアログ・ボックスに表示します。

2. 除去するディメンションまたはメンバーを選択し、をクリックします。

アイテムに関する詳細が取り消されます。

3. 「OK」をクリックします。

▶ 除去された概念をリセットするには:

1. 「マッピングの除去」ダイアログ・ボックスで、除去された概念を選択します。
2. をクリックして除去ステータスをリセットします。

▶ 概念マップを抑制するには:

1. XBRLタクソノミ概念が関連付けられているSmart View Officeドキュメントから、単一のデータ・ソース・ディメンションまたはメンバーを選択します。
2. を選択します。
3. 概念を選択し、「抑制」列で、をクリックします
4. 「OK」を選択します。

抑制されたアイテムがステータスとともに表示されます。

▶ 抑制されたアイテムを再び使用可能にするには:

1. 「Disclosure Management」リボンで、「抑制されたマッピング」を選択します。
2. 抑制を除去するディメンションまたはメンバーを選択し、をクリックします。
3. 「OK」をクリックします。

マッピングの確認

確認タブでは、OfficeドキュメントまたはFinancial Reportingレポートに関する既存のすべてのマッピングを確認できます。確認モードで、マッピングを除去したり、Officeドキュメント内の既存のマッピングを変更または編集できます。また、「選択項目のフィルタ」ボタンをクリックして、現在のドキュメント内のテキストのセクションを選択し、そのセクション内で関連するマッピングのみを表示できます。「表示」オプションを使用すると、ツリー・ビュー(連結マップ)とリスト・ビュー(個別マップ)の2つのフォーマットで、マップされたアイテムを表示できます。次も使用できます

いずれのビューでも、ユーザーは確認リストからマップされたアイテムを選択することにより、Officeドキュメント内の該当データに移動できます。確認タブでアイテムを選択すると、OfficeドキュメントまたはFinancial Reportingレポートでそのアイテムが強調表示されます。

ツリー・ビューまたはリスト・ビューの変更

表示オプションを使用すると、マップされたアイテムを確認モードにおいて2つのフォーマットで表示できます:

- リスト - 個別にマップされたファクト値がすべて含まれた表が表示されます。列はソート可能で、表の列ヘッダーはカスタマイズできます。
- ツリー - マッピングが階層表示で表示されます。個別マップは、概念、コンテキスト、単位および脚注別にまとめられます。

どちらのビューでも、ユーザーは、OfficeドキュメントまたはFinancial Reportingレポート内のデータに移動できます。

ビューを切り替えるには、「確認」ペインでツリー・ビューのをクリックするか、リスト・ビューのをクリックします。このアイコンで、ツリー・ビューとリスト・ビューを切り替えることができます。

レポートのディメンション・マッピングの確認

以前に作成したディメンション・マッピングを"Review Export"レポートで確認できます。

▶ プライマリ・レポートの型付きディメンション・マッピングを確認するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」で「確認」タブをクリックします。
2. 「エクスポート」ボタンをクリックします。「エクスポート」ダイアログが表示されます。
3. "Detailed Mapping Review"を選択し、「エクスポート」をクリックします。プライマリ・アイテム・マッピングに対し"Detailed Mapping Review"レポートが生成されます。

マップされたアイテムのプレビュー

「現在のマッピング」タブで、アイテムのマップされた値をプレーン・テキスト形式で確認できます。さらに数値の場合、フォーマットを適用する前に値を表示することもできます(対応する「フォーマット」タブに確認用に表示できません)。文字列値の場合は、プレーン・テキスト・フォーマットのみが表示されます。「現在のマッピング」タブには、ディメンションを削除する機能があります。「ディメンション・メンバーの編集」ダイアログに移動して、ディメンションを追加または削除することもできます(74ページのディメンションの編集を参照してください)。

「確認」タブにはドキュメント内のマップされたアイテムがすべて表示されます。リスト項目をドキュメントの選択したセクションに制限できます。Disclosure Managementでは、「選択項目のフィルタ」トグルボタンで、現在のドキュメントのテキストのセクションを選択し、そのセクション内のマッピングのみを表示できます。フィルタ選択がオンの場合、ドキュメントの別のセクションを選択し、「リフレッシュ」をクリックすると、マッピングのフィルタされたリストにより、新しいセクションにマッピングが表示されます。「選択項目のフィルタ」ボタンをもう一度クリックすると、デフォルトでドキュメントのすべてのマッピングに設定されます。

▶ マップされたアイテムをプレビューするには:

1. **確認**タブを選択します。
2. まだ表示されない場合は、「リスト・ビュー」に変更します。「アクション」ドロップダウンをクリックし、「リスト・ビュー」を選択することで、この操作を実行します。ドキュメント内のすべてのマッピングがリストに表示されます。



注:

ドキュメントのセクション内にあるアイテムのみを表示するには、セクションをハイライトし、「**選択項目のフィルタ**」ボタンをクリックします。「**選択項目のフィルタ**」ボタンを再度クリックすると、フィルタが削除され、デフォルトでドキュメント内のすべてのマッピングが表示されます。

3. リスト・ビュー表で、マップされた値を選択します。
4. 「確認」タブの下部にある「現在のマッピング」タブで、「マップされた値」フィールドの値をプレビューします。

ドックレットのページング

ドックレットのページング機能を使用して、特定のドックレットのマッピングのみを表示できます。

▶ ドックレットのページングを有効化するには:

1. オプションに移動します
2. 「フィルタの使用可能」を選択します
3. 「フィルタ」ボタンをクリックします
4. 表示するドックレットのマッピングを選択します

ディメンションの編集

「ディメンション・メンバーの編集」ダイアログで、選択したセルのディメンションの削除や追加ができます。このダイアログには、「明示」と「型付き」ディメンション用の別個のタブが表示されます。上部の領域には関連するディメンション・メンバーのリスト・ボックスが表示され、選択したセルのマッピングに追加できます。下部の領域にはディメンションのリスト・ボックスが表示され、選択したセルにマップできます。シャッフル・パネルの「追加」および「除去」ボタンを使用して、リスト・ボックスの内および外にディメンションを移動できます。

▶ ディメンション・メンバーを変更するには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで「確認」タブをクリックします。
2. 「概念」列で、ディメンションを選択します。「確認」ペインの下部にある「現在のマッピング」タブには、選択されたディメンション値が表示されます。
3. 「現在のマッピング」タブで「削除」ボタン()をクリックしてディメンションを削除できます。または「編集」ボタン()をクリックして、「ディメンション・メンバーの編集」ダイアログを表示できます。
4. 「編集」ボタン()をクリックします。「ディメンション・メンバーの編集」ダイアログが表示されます。「明示」タブまたは「タイプ指定」タブが選択したディメンションのタイプに基づいて表示されます。
5. 上部の領域にドキュメントに追加できるディメンションのリストが表示されます。下部の領域にドキュメントに対して選択した現在のディメンションが表示されます。
6. シャッフル・ボタン()をクリックして、リスト間でディメンションを追加または削除します。
7. 「現在のマッピング」タブに戻るには、「OK」をクリックします。
8. **重要:**「保存」ボタンをクリックします

コンテキストおよび単位の変更

コンテキストまたは単位のマッピングは、「確認」ペインの「現在のマッピング」タブから直接変更できます。

▶ コンテキストまたは単位を変更するには

1. **確認**タブを選択します。
2. 「確認」ペインで、「アクション」ドロップダウンをクリックして「リスト・ビュー」を選択します。
3. マップされたアイテムを選択します。
4. 「確認」ペインの下部にある「現在のマッピング」タブを選択します。
5. 「コンテキスト」ドロップダウンで、コンテキストを選択します。
6. 「単位」ドロップダウンで、単位を選択します。

符号の反転の設定

レポートをレンダリングするときに、マッピングの符号を逆にし、ラベルをネゲートするには、「符号の反転」オプションを使用します。この機能は、借方と貸方を逆にしてレポートする必要がある場合に便利です。



注:

ファクトの符号を負の値に反転する前に、ドキュメントをレンダリングする際に他のラベルに与える影響を考慮します。たとえば、US GAAPタクソノミで、株式配当の収益が減少したとします。ファクト値を負の値に変更した場合、2つの負数が作成され、値は正数とみなされ、配当所得が増加します。

▶ マップされたアイテムの符号の反転を設定するには:

1. 確認タブを選択します。
2. 「確認」ペインで、「アクション」ドロップダウンをクリックして「リスト・ビュー」を選択します。
3. マップされたアイテムを選択します。
4. 現在のマッピング・タブを選択します。
5. 「符号の反転」で、チェック・ボックスを選択します。

値のオーバーライド

オーバーライド・オプションを使用すると、マップされた値フィールドに示されているように、数値、文字列、日付およびブール演算子のマップされた値を変更またはオーバーライドできます。また、未定義のラジオ・ボタンを使用して、オーバーライドを除去し、元のマップされた値に戻すことができます。マップされた値のデータ型に応じ、次に示すように、特定のオーバーライド値のフィールドが使用可能になります。

表9 オーバーライド値のタイプ

| マップされた値のタイプ | オーバーライド値 |
|-------------|---|
| ブール | 未定義-オーバーライドを除去し、元のマップされた値に戻します。 true-マップされた値を、trueの条件を記録するためのフラグとして設定します。 false-マップされた値を、falseの条件を記録するためのフラグとして設定します。 |
| 数値 | 未定義-オーバーライドを除去し、元のマップされた値に戻します。 値- オーバーライド数値を使用するために選択します。「値」入力フィールドにオーバーライド値を指定します。 |
| 日付 | 未定義-オーバーライドを除去し、元のマップされた値に戻します。値- オーバーライド日付値を使用するために選択します。「値」入力フィールドにオーバーライド日付値を指定します。日付フォーマット-「日付フォーマット」ドロップダウンからオーバーライド日付フォーマットを選択します。有効なオプションは、次のとおりです: • なし • DD.MM.YY(YY) • MM.DD.YY(YY) • DD Month, YY(YY) • Month DD, YY(YY) • DD Mon YY(YY) |

| マップされた値のタイプ | オーバーライド値 |
|-------------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> • Mon DD, YY(YY) • DD/MM/YY(YY) • MM/DD/YY(YY) • カスタム(日付フォーマットは、「カスタム・フォーマット」フィールドに指定する必要があります) <p>カスタム・フォーマット-カスタムの日付フォーマットを指定します。</p> |
| 文字列 | <p>未定義-オーバーライドを除去し、元のマップされた値に戻します。フォーマット-文字列のフォーマットを指定します。文字列がxbrl.us:TextBlockItemTypeタイプとその派生タイプの概念に基づく、数値以外のXBRLマッピングで使用可能なフォーマット・オプションがあります。次のフォーマット・オプションを使用できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • リッチ・テキスト - Disclosure ManagementがOfficeドキュメントからHTMLフォーマットのコンテンツを抽出し、このフォーマットを数値以外のアイテムに適用します。 • プレーン・テキスト - Disclosure Managementは対応するファクトのフォーマット値を使用し、フォーマットを数値以外のアイテムに適用します。 • デフォルト - プレーン・テキスト・フォーマットが数値以外のアイテムにデフォルトで適用されます。ただし、特定の文字列タイプとその派生タイプにはリッチ・テキスト・フォーマットを使用するようにデフォルト構成を設定できます。 <p>未定義-オーバーライドを除去し、元のマップされた値に戻します。空-空の文字列値を使用して、マップされたファクト値を作成するために選択します。値-オーバーライド文字列値を指定します。デフォルトで、このフィールドには数値を入力する必要があります。英数字を入力するには、「値の追加」ボタンをクリックして、「値の上書き」ダイアログ・ボックスに新しい値を入力します。</p> |

▶ ファクト値をオーバーライドするには:

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」ペインで「確認」タブを選択します。
2. 「アクション」ドロップダウンで「リスト・ビュー」を選択します。
3. 「確認」ペインで、ファクト値を選択します。
4. 「確認」ペインの下部にある「現在のマッピング」タブを選択します。
5. 「オーバーライド済」チェックボックスをクリックして、選択したファクト値を最新情報でオーバーライドする必要があることを確認します。
6. 「マッピング値」に、新しい値を入力します。

たとえば、借方勘定の符号を負から正に切り替えるには、ファクト値の前に「-」と入力します。

7. をクリックします。

「現在のマッピング」タブでの変更の保存

「現在のマッピング」タブで値を追加または変更する際は、「保存」を使用します。

▶ 変更を保存するには、をクリックします。

「アクション」ドロップダウン・メニューから「保存」を選択することもできます。

マッピングの確認のエキスポート

申告プロセスの任意の時点で、マスター・ドキュメントまたはドックレットに関する特定の情報を提供するように設計された3つの確認タイプのうち、どれを生成するかを選択できます。これらの確認により、レポート内の既存のマッピングを分析して、既存の問題または潜在的な問題を特定できます。次のような確認があります。

- **マッピングの詳細の確認** - ドキュメント内のマッピングの詳細を示します。マスター・ドキュメントでは、すべてのドックレット間のすべてのマッピングが表示されます。ドックレットでは、ドックレット内のマッピングのみが表示されます。
- **マッピングの重複の確認** - すべてのマッピングが表示され、同じ値および異なる値を持つマッピングが区別されます。値の異なるマッピングが重複する場合、検証エラーが発生し、修正が必要になります。値が同じマッピングが重複する場合、エラーは発生しませんが、正しいかどうかを確認する必要があります。
- **負の値の確認** - 負の値に関連付けられたマッピング、すなわち負の数値のXBRLファクト値が生成されるマッピングが表示されます。

▶ レポートをエキスポートして表示するには:

1. マスター・ドキュメントまたはドックレットを開きます。
2. 「Disclosure Management」リボンで「マッピング・ツール」アイコン()を選択し、「確認」タブを選択します。
3. 「アクション」ドロップダウンを選択して、「エキスポート」を選択します。「エキスポート」ダイアログが表示されます。
4. 「タイプ」ドロップダウンで確認するレポート(マッピングの詳細の確認、マッピングの重複の確認または負の値の確認)を選択して、「エキスポート」をクリックします。ドキュメントの確認情報が生成されるまで待ちます。完了すると、「ファイルのダウンロード」ダイアログが表示されます。
5. 次のいずれかを選択します:
 - **開く** - レポートがMicrosoft Excelスプレッドシートに開かれます。
 - **保存** - レポートがローカル・マシンに保存されます。
 - **取消し** - 生成されたレポートが保存されずに取り消されます。

数値フォーマットのプレビューおよび変更

マップされたアイテムのフォーマット設定を「フォーマット」タブでプレビューし、数値フォーマットのデフォルト設定の追加または変更を選択できます。「フォーマット」タブでは、マップされた各数値に次の内容が表示されます:

- 小数位または精度の桁数
- スケール(係数)
- 数値フォーマット
- 正数の接頭辞
- 負数の接頭辞
- 正数の接尾辞
- 負数の接尾辞

▶ フォーマットを更新するには:

1. 「Disclosure Management」マッピング・ツール」ペインで「確認」タブを選択します。
2. 「アクション」ドロップダウンで「リスト・ビュー」を選択します。

3. 数値を選択します。
4. 「確認」ペインの下部にある「フォーマット」タブを選択します。
5. 「アクション」ドロップダウンをクリックして、「編集」を選択します。

「フォーマット」ダイアログが表示されます。詳細は、[96ページのドキュメントのフォーマット](#)を参照してください。

6. フォーマットに変更を加えて、「OK」をクリックします。

ドキュメントの検証

インスタンス・ドキュメントの検証を検証モードで起動できます。検証では次の操作が実行されます：

- マッピング・ツール・クライアント・ツールからXBRLマッピングが取得されます。
- タクソノミのメタデータに対してXBRLマッピングが確認および検証されます。
- XBRLタクソノミ・スキーマ・ルールおよび計算を使用して、データの精度と準拠が検証されます。
- マッピング・ツールからエラー・メッセージが表示されます。

▶ インスタンス・ドキュメントを検証するには：

1. 「Disclosure Managementマッピング・ツール」パネルの「検証」タブで、「アクション」ドロップダウンをクリックして検証タイプを選択します。
 - XBRLインスタンス
 - IXBRLインスタンス
 - US SEC—US SEC EDGAR XBRL: (SEC申告者は必須)
 - US SEC—US SEC EDGAR HTML: (SEC申告者は必須)
 - HMRC: Joint Filing Checks (HMRC申告者は必須)
 - IFRS: Global Filing Manual (オプション)
2. 検証要約を確認します。

検証エラー・メッセージの表示

リスト・ビューでインスタンス・ドキュメントを検証するときには、「ステータス」フィールドに次のような検証ステータスが表示されます：

表10 確認ステータス記号とその説明

| 確認ステータス記号 | 説明 |
|-----------|--------------------------------------|
| | 致命的なエラー |
| | エラー・ステータス - マップされたアイテムが正しくないことを示します。 |
| | 警告 |
| | 不整合 |
| | 情報 |

| 確認ステータス記号 | 説明 |
|-----------|----|
| | 成功 |

検証プロセス中に、インスタンス・ドキュメントで適用された不正なマッピングは、マップされたアイテムの横にある「ステータス」フィールドにステータスで表示されます。「検証」ペインを使用して、エラーの詳細および推奨される解決方法を表示してください。マッピングごとに検証メッセージのリストを表示できます。検証の際に、どこにも属さない検証メッセージをまとめた行がマッピングのリストに追加されます。

不正なマップされたアイテムに関するエラー・メッセージを表示するには、マップされたアイテムの横にあるをダブルクリックします。

エラー・メッセージの解決

エラーを解決するための一般的な方法は次のとおりです。

- タクソノミの概念の対応する期間タイプに一致するよう、コンテキストを変更します。
- 財務諸表のマップされた値をオーバーライドします。
- スケーリングまたは負のオプションを設定します。
- 精度や小数点の設定を変更します
- マッピングを抑制または除去します。
- 単位を変更します。

また、Disclosure Management XBRLタクソノミ・デザイナーを使用して、次のタイプのエラーを解決できます：

- 概念の欠落
- 順序が不適切または不正な概念ラベル
- 無効な計算ロールアップ
- 無効な表モデル

確認モードのナビゲーション・オプション

表11 確認モードのナビゲーション・オプション

| ナビゲーション・オプション | 説明 |
|---------------|--|
| (リスト・ビュー) | <p>リスト・ビューには、個別にマップされたアイテムが表形式で表示されます。この表には、カスタマイズおよびソートが可能な列ヘッダーが表示されます。リスト・ビューでアイテムを選択すると、Officeドキュメント内の対応するデータが選択されます。タプル・グループの一部であるマップされたタプル・メンバーは、次のフォーマットで示されます： TupleParentName(TupleGroupName). TupleMemberName</p> <ul style="list-style-type: none"> • TupleParentName - マップされたタプル・メンバーの親の名前(ラベル) |

| ナビゲーション・オプション | 説明 |
|---------------|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> • TupleGroupName - ユーザーによって指定されたタプル・グループ名 • TupleMemberName - タプル(ラベル)メンバーの名前 |
| (次のマッピング) | ツリー・ビューで、「確認」ペインのツールバーにある「次」ボタンを選択できます。これにより、ツリーの次のマップ・アイテムが選択されます。ツリーの最後のマップ・アイテムが選択されているときに「次」ボタンをクリックすると、ツリーの最初のアイテムが選択されます。 |
| (前のマッピング) | ツリー・ビューで、「確認」ペインのツールバーにある「前」ボタンを選択できます。これにより、ツリーの前のマップ・アイテムが選択されます。ツリーの最初のマップ・アイテムが選択されているときに「前」ボタンをクリックすると、ツリーの最後のアイテムが選択されます。 |
| (ツリー・ビュー) | <p>ツリー・ビューには、マッピング情報が階層順に表示されます。個別マップは、概念、コンテキスト、単位および脚注別にまとめられます。</p> <p>注： ツリー・ビューには、タプル・ツリーは表示されません。</p> |

インスタンス・ドキュメントの生成

タクソノミがXBRL概念および他の概念との関係を定義するのに対し、インスタンス・ドキュメントは実際のデータを含むレポートです。タクソノミとインスタンス・ドキュメントの間には緊密な関係があります。タクソノミが作成された後、その定義と関係を使用して、XBRLレポートを作成できます。タクソノミの参照に加え、インスタンス・ドキュメントには次の情報も含まれています：

- XBRLコンテキスト - レポート(ビジネス)エンティティ、時間枠、およびシナリオやディメンションなどのその他のオプションの詳細に関する情報を提供します。
- XBRL単位 - 数値データが表す単位を示します。単位の例: 米国ドル、ユーロ、株数。
- データ - インスタンス・ドキュメントには、Microsoft OfficeドキュメントおよびOracle Hyperionデータ・ソース内に存在する数値データまたはテキスト・データ(あるいはその両方)が含まれています。一般的な"ドキュメント・データ"という用語は、Excel内の単一セル、Microsoft Word内の単一の単語または段落全体を意味する場合があります。この用語は、Disclosure Managementマッピング・ツールによってマップ可能なデータを表すために全体で使用されます。さらに、数値データを増減したり、数値データに脚注への参照を含めることができます。

インスタンス・ドキュメントはHTML Webページに似ていますが、レポート言語は、ブラウザでの読取りが可能なHTMLではなく、インスタンス・ドキュメントを利用および分析する様々なXBRLアプリケーションでの読取りが可能なXMLです。

XBRLの申告は、XBRLタクソノミとインスタンス・ドキュメントで構成されています。XBRLタクソノミは、会社の開示の背景にあるメタデータを説明し、インスタンス・ドキュメントは、タクソノミへのファクトのマップ方法を示します。

検証により、概念間のセマンティック関係が確認され、正しいファクトがベース・タクソノミの正しいファクト・フィールドにマップされていることが確認されます。たとえば、検証で、「資産」にファイルされたファクトが「負債」および「株主資本」にファイルされたファクトと一致しているかどうかを確認されます。XBRLインスタンス・ドキュメントの生成は、XBRLに準拠した開示を生成するための最後のステップです。申告で提出されるXBRLデータが正確であることを確認するために、Disclosure Managementでは、インスタンス・ドキュメントの作成前に、XBRLタクソノミ仕様と照らして会社のタクソノミが検証されます。

検証は、3つの手順を伴うプロセスです。最初に、タクソノミを検証します。次の手順では、インスタンス・ドキュメントを生成します。これにより、インスタンス・ドキュメントに関連付けられたXMLファイルが作成されます。XBRLはXMLベースのフレームワークで、XMLの構文に依存してXLinkスキーマやXMLスキーマのセマンティックな意味を宣言します。最後のステップでは、インスタンス・ドキュメントを作成します。作成したインスタンス・ドキュメントは、他のビジネス・エンティティと交換したり、監督官庁に提出できます。

マップされたデータの検証

Disclosure Managementでは、次の3タイプのインスタンス検証がサポートされます：

- 表示 - インスタンス・ドキュメントがXBRL仕様に準拠しているかどうかを検証します。たとえば、マップされた概念が「期間」期間タイプで、そのインスタンス・ドキュメントには対応するコンテキストに単一日付が含まれているとします。この場合、「期間」期間タイプでは開始日と終了日が定義されている必要があるため、表示検証は失敗します。
- 計算 - インスタンス・ドキュメント内のすべての計算値が、タクソノミ内で定義されている計算関係ごとに検証されます。この検証では、数値ファクトの加重属性を考慮しながら、計算スキーマで定義されている計算関係が使用されます。
- 式 - インスタンス・ドキュメント内のすべての計算値が、タクソノミ内で定義されている式ごとに検証されます。タクソノミ内の式では通貨アイテム・タイプに加えてブール(trueまたはfalse)および文字列データ型がサポートされるため、式の使用によってビジネス分析と予測が容易になります。

▶ タクソノミを検証するには：

1. 検証するタクソノミを含むOfficeドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management**」リボンで、「**検証**」を選択します。

検証の実行中には、進捗状況を示すゲージが表示されます。

検証メッセージのエクスポート

検証したXBRLインスタンスについての検証メッセージを開いたり、マシンにエクスポートしたりできます。

▶ 検証メッセージをエクスポートするには：

1. Disclosure ManagementでOfficeドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management** マッピング・ツール」ペインの「**検証**」タブで、「**検証**」アイコン - をクリックします。
3. 検証が完了したら、「**エクスポート**」アイコンをクリックします。「**ファイルのダウンロード**」ダイアログが表示されます。
4. 「**保存**」をクリックします。

5. 「名前を付けて保存」ダイアログで保存する場所に移動し、オプションでファイル名を変更して、「保存」をクリックします。「ダウンロード」ダイアログが表示されます。「開く」、「フォルダを開く」または「保存」をクリックできます。メッセージがMicrosoft Excelファイルにコピーされます。

ルール・サポートを使用した検証

また、次に示す、規制固有の検証を行うこともできます：

- XBRL 2.1仕様(デフォルト)に基づく、ディメンション、リンクベースおよび単位タイプ・レジストリに関する検証
- US SEC EDGAR Filing Manual、HMRC合同申告チェックおよびIFRS Global Filing Manualに関する規制の検証
- タブルの生成、カスタム関数などに使用可能な拡張モジュール。

▶ ルール・サポートを使用した検証を実行するには：

1. 「Disclosure Management」リボンでをクリックし、ドロップダウンから検証タイプを選択します。
2. 検証要約を確認します。

計算トレースの表示

計算トレースは、ドキュメントの演算がタクソノミの計算に対応していることを確認します。計算トレースには、検証時に加算が合計を表すインスタンス値とは異なる場合の差異が記載されます。このアクションは、検証を実行した後に実行されます。



注：

このオプションを使用できるのは、タクソノミにCalculationLinkBaseが存在する場合のみです。

▶ 計算トレースを表示するには：

1. 「検証」タブを選択します。
2. 「アクション」メニューで、「計算トレースの表示」を選択します。

または、をクリックします。

式トレースの表示

式トレースは、XBRLドキュメントの式がタクソノミの式に対応していることを確認します。式には、セマンティック表現のビジネス・ルールが含まれます。たとえば、式には、「資産 = 負債 + 資本」という定義が含まれる場合があります。式トレースには、検証時の式の失敗が記録されます。



注：

このオプションを使用できるのは、タクソノミにCalculationLinkBaseが存在する場合のみです。

▶ 式トレースを表示するには：

1. 「検証」タブを選択します。
2. 「アクション」メニューで、「計算トレースの表示」を選択します。

インスタンス・ドキュメントのレンダリング

Disclosure Managementは、自動タクソミ、複数のタクソミ、およびIFRSベース・レポートの検出を行い、結果に基づいて個別にレンダリングを処理します。

自動タクソミ

Disclosure Managementは、インスタンス・ドキュメント内のスキーマ参照(SchemaRef)属性を読み取ることで、インスタンス・ドキュメントに関連付けられているタクソミの検出を試行します。検出されると、属性は、SECビューアでのインスタンス・ドキュメントのレンダリングに使用されます(使用可能な場合)。タクソミを検出できない場合は、ユーザーにタクソミのパスまたはURLの指定が求められます。

複数のタクソミ

インスタンス・ドキュメントに2つ以上のタクソミへの参照が含まれている場合、Disclosure Managementは、複数のschemaRef属性によって宣言されたタクソミのロードを試行し、SECビューアでインスタンスをレンダリングします(使用可能な場合)。

IFRSベース・レポート

「XBRLの生成」オプションがトリガーされた後、IFRSベース・レポートが検出されると、SECビューアに自動的に表示されます(使用可能な場合)。

IFRSベース・レポートには、次に示す使用上の注意事項が適用されます:

- 様々な国際タクソミにより、IFRSタクソミ(UK-IFRSやチリのタクソミなど)が拡張されます。
- 現在認識されるのは、次のバージョンのIFRSタクソミのみです:
2014、2013、2012、2011、2010、2009、2008、2006および2005。2005より前のバージョンのIFRSタクソミはサポートされていません。
- SECビューアでは、IFRSベースのインスタンス・ドキュメントが正常にレンダリングされない場合があります。SECビューアの失敗の原因になることがわかっているIFRSベース・タクソミのスキーマ参照があります。たとえば、インスタンス・ドキュメントに次のスキーマ参照が使用されていると、SECビューアが失敗します: http://www.svs.cl/cl/fr/ci/2011-04-26/clci_shell_2011-04-26.xsd
 - SECビューアでは、IFRSベースのインスタンス・ドキュメントが正常にレンダリングされない場合があります。SECビューアの失敗の原因になることがわかっているIFRSベース・タクソミのスキーマ参照があります。たとえば、インスタンス・ドキュメントに次のスキーマ参照が使用されていると、SECビューアが失敗します。http://www.svs.cl/cl/fr/ci/2011-04-26/clci_shell_2011-04-26.xsd
 - 無効なスキーマ参照により、SECビューアが失敗することがあります。XBRLレポートに適切なスキーマ参照が指定されていることを確認する必要があります。たとえば、前の例のスキーマ参照は、インスタンス・ドキュメントでは一般的ではありません。

- SECビューアのファイル・ダウンロード・サイトで、更新やバグ修正を定期的を確認してください。サイトのURLは次のとおりです: <http://www.sec.gov/spotlight/xbrl/renderingenginelicense.htm>
- Disclosure Managementでは、インスタンス・ドキュメントの最終的なレンダリングを制御できません(これには、US GAAPベースのインスタンス・ドキュメントも含まれます)。

インスタンス・ドキュメントへのエクスポート

ドキュメント内のマップされたXBRLデータが検証された後、そのインスタンス・ドキュメントを、DMR出力ファイル・タイプにエクスポートします。インスタンス・ドキュメントをローカル・ファイル・システムに保存して、そこからドキュメントを内部監査などの社内用、またはSECなどの監督官庁用に送信できます。

.DMR出力ファイル・タイプは、すべてのXBRLレポート・ファイルを含む圧縮ファイルです:

- [taxonomy]_entrypoint.xml
- genericviewerreport.html
- [taxonomy].xsd
- [taxonomy]-label.xml
- [taxonomy]-presentation.xml
- xbrlreport.xml

レポート・ファイルを表示するには、WinZip(R)などの圧縮ユーティリティを使用して、DMRファイルを開きます。

▶ インスタンス・ドキュメントの出力タイプを選択するには:

1. エクスポートする検証済インスタンス・ドキュメントが含まれているOfficeドキュメントを開きます:
2. 「**Disclosure Management**」リボンで、「エクスポート」を選択します。エクスポートが成功すると、「レポートは正常にエクスポートされました。」という確認メッセージが表示されます。
3. 「ファイル名」に、保存するレポートの名前を入力し、「保存」をクリックします。

レポートがエクスポートされ、ビューアで表示されて、次のファイルが生成されます:

マップされたタクソノミがUS GAAPタクソノミに基づいている場合、デフォルトでは、インスタンス・ドキュメントはSECビューア・フォーマットで開きます(SECビューア・ファイルが使用可能な場合)。汎用またはその他のビューアも使用できます。US GAAP以外のすべてのタクソノミは、デフォルトでは、汎用ビューアで表示されません。

表12 ビューアのタイプ

| ビューア・フォーマットのタイプ | 説明 |
|-----------------|---|
| SEC | インスタンス・ドキュメントがUS GAAPタクソノミの拡張から導出されている場合、Disclosure Managementでは、そのドキュメントはSECの対話型ビューアを使用して表示されます。 |
| 汎用 | インスタンス・ドキュメントがUS GAAPタクソノミから導出されたものでない場合は、SECビューアは使用できません。かわりに、XMLスタイル・シートを使用してインスタンス・ドキュメントをプレビューします。汎用ビューアでは、イン |

| ビューア・フォーマットのタイプ | 説明 |
|-----------------|--|
| | スタンス・ドキュメント(XML)内に存在する順序でファクト値が表示されます。通常、これは概念がマップされた順序です。 |

XBRL出力のプレビュー

XMLファイル・タイプのインスタンス・ドキュメントを生成すると、そのインスタンスXMLファイルが指定されたフォルダの場所に保存されます。インスタンス・ドキュメントがUS GAAPタクソノミの拡張であるタクソノミを使用している場合は、そのインスタンス・ドキュメントはSECインスタンス・ビューアに表示されます(SECビューア・ファイルが使用可能な場合)。その他すべてのインスタンス・ドキュメントは、汎用インスタンス・ビューアと呼ばれる表形式で表示されます。汎用ビューアでインスタンス・ドキュメントを開くと、WebブラウザでXMLドキュメントを開く場合に類似したフォーマットでXBRLコンテンツを表示できます。申告会社のデータがXBRLフォーマットの場合は、インスタンス・ドキュメントを監督官庁に申告したり、別の会社に送信できます。

▶ XBRL出力をプレビューするには:

1. 「Disclosure Management」リボンの「エクスポート」オプションを選択して、インスタンス・ドキュメントを生成します。

詳細は、[84ページのインスタンス・ドキュメントへのエクスポート](#)を参照してください。

2. 「Disclosure Management」リボンで、「プレビュー」を選択します。
3. 「プレビュー」ペインで、「ファイル」、「レポートを開く」の順に選択します。
4. インスタンス・ドキュメントが格納されているフォルダに移動して、「開く」をクリックします。

タクソノミは自動的に検出されるため、「プレビュー」で「ファイル」、「US-GAAPレポートを開く」の順に選択すると、標準のファイルを開くダイアログが表示されます。Disclosure Managementでタクソノミを自動的に検出できない場合は、ユーザーにタクソノミのパスまたはURLの指定が求められます。

5. 「ツール」を選択し、「表示」、「XBRL」の順に選択します。

次の例では、インスタンス・ドキュメントの出力にコンテキスト、単位および脚注が含まれており(最初の例)、次にファクトが含まれています(2番目の例):

IXBRLフォーマットのインスタンス・ドキュメントの生成

IXBRLフォーマットで生成されたインスタンス・ドキュメントでは、同一ドキュメント内に、ユーザーが理解しやすいフォーマットとマシンで読取り可能なフォーマットで申告を表示できます。XBRLは、コンピュータによる読取り専用です; IXBRLで生成されたバージョンは、人が理解できるHTMLコンテンツとマシンで読取り可能なXBRLフォーマットを兼備し、これらをブラウザで表示できます。

ドキュメント内のマップされたXBRLデータがすべて検証された後、.DMRファイルが生成されます。マップされた財務諸表をエクスポートするときに、ドキュメントの保存を求めるプロンプトが表示されます。インスタンス・ドキュメントをローカル・ファイル・システムに保存して、そこからドキュメントを内部監査などの社内用、またはSECなどの監督官庁用に送信できます。

.DMR出力ファイル・タイプは、次のようなすべてのiXBRLレポート・ファイルを含む圧縮ファイルです:

- document.xhtml
- genericviewerreport.html
- themedata.thmx
- colorschememapping.xml
- [taxonomy]_entrypoint.xml
- filelist.xml
- xbrlreport.xml
- [taxonomy].xsd

レポート・ファイルを表示するには、WinZip(R)などの圧縮ユーティリティを使用して.DMRファイルを開きます。

▶ IXBRL出力タイプのインスタンス・ドキュメントを選択するには:

1. エクスポートする検証済インスタンス・ドキュメントが含まれているOfficeドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management**」リボンで、「**IXBRLの生成**」を選択します。
3. 「ファイル名」に、保存するレポートの名前を入力し、「**保存**」をクリックします。

インスタンス・ビューアでのインスタンス・ドキュメントの表示 (SECまたはその他)

Disclosure Managementには、インスタンス・ドキュメントXBRLのためのいくつかの表示オプションがあります:

- 汎用ビューアまたはSECビューアに、人間が理解できるフォーマットでXBRLを表示できます。この場合、Disclosure ManagementによりXBRL出力にスタイル・シートが適用されます。
- 汎用ビューアまたはSECビューアにRAW XBRLを表示できます
- ユーザーのデフォルト・ブラウザに、人間が理解できるフォーマットでXBRLを表示できます

▶ 汎用ビューアにインスタンス・ドキュメントを表示するには:

1. 「Disclosure Management」リボンで、「**プレビュー**」を選択します。
2. US GAAP以外のインスタンス・ドキュメントについては、「**開く**」、「**レポートを開く**」の順に選択します。
3. インスタンス・ドキュメントが格納されているフォルダに移動して、「**OK**」をクリックします。

オプション: 別のフォルダにあるDisclosure Managementレポートを選択するには、「**開く**」、「**レポート・フォルダを開く**」の順に選択し、レポートが格納されたフォルダに移動し、レポートを選択して「**OK**」をクリックします。タクソノミは自動的に検出されるため、「**ファイル**」、「**US-GAAPレポートを開く**」の順に選択すると、標準のファイルを開くダイアログが表示されます。Disclosure Managementでタクソノミを自動的に検出できない場合は、ユーザーにタクソノミのパスまたはURLの指定が求められます。

4. **オプション:** レポートのRAW XBRLコンテンツを表示するには、「**表示**」、「**XBRL**」の順に選択します。

▶ インスタンス・ドキュメントをブラウザで表示するには:

1. 「Disclosure Management」リボンで、「**プレビュー**」を選択します。
2. US GAAP以外のインスタンス・ドキュメントについては、「**開く**」、「**レポートを開く**」の順に選択します。
3. インスタンス・ドキュメントが格納されているフォルダに移動して、「**OK**」をクリックします。

オプション: 別のフォルダにあるDisclosure Managementレポートを選択するには、「**開く**」、「**レポート・フォルダを開く**」の順に選択し、レポートが格納されたフォルダに移動し、レポートを選択して「**OK**」をクリックします。

4. 「ツール」で、「デフォルト・ブラウザで開く」を選択します。

SECビューアのオフラインでの使用

Disclosure Managementでは、オフラインでSECビューアにXBRLレポートをレンダリングして表示できます。この機能を使用できるのは、SECビューア・プログラムがキャッシュを使用して最初にインターネットからフェッチしたXBRLリソースを保存するからです。XBRLリソースがキャッシュに保存されると、SECビューアはキャッシュにあるファイルを参照してインスタンス・ドキュメントをレンダリングします。

SECビューアをオフラインで使用するには、次のいずれかのアクションを実行します:

- 依存XBRLリソース・ファイルを含むキャッシュ・ディレクトリを手動で作成します。それには、次の(アタッチされた)依存XBRLリソース・ファイルを次のフォルダにコピーします: %USERPROFILE%\Application Data\Rivet\Dragon Tag:
 - us-types-2009-01-31.xsd
 - dei-2009-01-31.xsd
 - negated-2008-03-31.xsd
 - us-gaap-2009-01-31.xsd
 - us-roles-2009-01-31.xsd

インスタンス・ビューアのプレビューを使用するたびに、ユーザーは常にキャッシュ内のファイルを使用するように要求されます(US GAAPレポート)。

- リソース・ファイルをインスタンス・ファイルと同じフォルダにコピーします。依存リソース・ファイルをインスタンス・ファイル(インスタンスXMLファイルとそのタクソノミ拡張ファイル)と同じフォルダから使用できる場合、ユーザーに対するリソース・ファイルのプロンプトは表示されません。SECビューアは、自動的にフォルダのファイルを使用します。

ルール・サポートを使用した検証

Disclosure Managementには、次のような、追加のルール検証があります:

- XBRL 2.1仕様(デフォルト)に基づく、ディメンション、リンクベースおよび単位タイプ・レジストリに関する検証
- US SEC Edgar Filing Manual、HMRC合同申告チェックおよびIFRS Global Filing Manualに関する規制の検証
- タブルの生成、カスタム関数などに使用可能な拡張モジュール。

▶ 規制固有の検証を実行するには:

1. レポートをMicrosoft WordまたはExcelで開き、Disclosure Managementサーバーに接続します。
2. **Disclosure Management**リボンから「プレビュー」を選択します。

「プレビュー」ダイアログが表示されます。

3. 「ファイル」メニューから、.DMRファイルまたはXMLファイルを選択します。

オプション: 「レポート・フォルダを開く」または「US-GAAPレポートを開く」を選択して、ファイルに移動することもできます。

ファイルがロードされると、「プレビュー」ダイアログに「検証」メニュー・アイテムが追加されます。

「検証」ドロップダウンが表示されます。

4. 「**検証**」を選択し、「**検証**」ドロップダウンから検証オプションを選択します。

オプションは次のとおりです:

- US SEC
- UK HRMC
- IRFS

Disclosureシステム・チェック・ログが生成され、「プレビュー」に表示されます。

- ▶ 「プレビュー」の「ツール」メニューからDisclosureシステム・チェック・ログを表示するには:
1. Disclosure Managementリボンで「**プレビュー**」を選択します。
 2. 「ツール」、「**ビュー**」、「**XBRL**」または「**汎用**」(.DMRファイルの場合)の順に選択します。
 3. 「**Disclosureシステム・チェック・ログ**」を選択します。

レポートの複製

複製したレポートの「一般」オプションを使用すると、ドキュメントとそのマッピングを別の物理ドキュメントにコピーし、Disclosure Managementレポート名を指定して、マップされたアイテムの数値フォーマットを表示できます。参照:

- [88ページのレポートの複製の作成](#)
- [89ページの複製したレポートのフォーマットの変更](#)

レポートの複製の作成

ドキュメントのデータを更新し、新しいコメントを追加することで、古いドキュメントおよびマッピングを保持しながら以前のマッピングを再利用できます。

- ▶ レポートを複製するには:
1. 複製するドキュメントのコピーを作成します。
 2. ドキュメントを開きます。
 3. 「**Disclosure Management**」リボンで「**複製**」アイコン - を選択します

「複製したレポートのプロパティ」ダイアログが表示されます。

4. 「**全般**」タブを選択します。
5. 「**レポート名**」に、複製するレポートの名前を入力します。

レポート名は、タクソノミ・マッピングとともにマッピング・リポジトリに格納され、レポート名に基づいてマッピングを管理できます。

6. 「**XBRLインスタンス名**」に、複製するレポートのインスタンス名を入力します。
7. 「**場所**」で「**エクスプローラ**」ボタン()をクリックし、リポジトリを開いて目的の場所に複製レポートを保存します。
8. 「**OK**」を選択します。

表13 複製したレポートの「全般」オプションと説明

| フィールド | 説明 |
|----------------|--|
| ドキュメントID | マッピング・リポジトリ内のOfficeドキュメントのドキュメント識別子を示します。非データ・ソース・マッピングがあるすべてのOfficeドキュメントは、ドキュメント識別子 (documentNameとも呼ばれる)を割り当てられます。このプロパティの値は、カスタムXMLとしてOfficeドキュメント内に格納されます。 |
| レポート名 | レポートに関連付けるレポート名を指定します。レポート名は、タクソノミ・マッピングとともにマッピング・リポジトリに格納され、レポート名に基づいてマッピングを管理できます。 |
| 関連付けられているタクソノミ | レポートの複製で使用されるタクソノミを示します。タクソノミは、元のドキュメントから継承されます。タクソノミの変更の詳細は、 67ページのDisclosure Managementドキュメントのロールオーバー を参照してください。 |
| XBRLインスタンス名 | エクスポート時にレポートに割り当てられるXBRLインスタンス名を指定します。 |
| 場所 | 物理ドキュメントのコピー先となるファイル・システム上の宛先パスを入力します。 |

複製したレポートのフォーマットの変更

「レポートの複製」の「変換」オプションを使用すると、マッピングを実行する際にMicrosoft Wordドキュメントの数値データの数値の接頭辞、接尾辞、桁区切り文字および小数点を表示できます。Microsoft Excelでは基礎となる数値データがフォーマットされないため、Microsoft Excelには影響がありません。

▶ 数値フォーマットを表示するには:

1. 「**Disclosure Management**」リボンで、「**レポートの複製**」を選択します。
2. 「**変換**」を選択します。

表14 正数の記号のフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|--|
| 接頭辞 | それぞれの正の値の左に配置される、正数の接頭辞記号を表示します。記号オプション: <ul style="list-style-type: none"> • なし • \$ • % • [•] デフォルトの接頭辞記号は「なし」です。 |

| フィールド | 説明 |
|-------|--|
| 接尾辞 | <p>それぞれの正の値の右に配置される、正数の接尾辞記号を表示します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • \$ • % • [•] <p>デフォルトの接頭辞記号は「なし」です。</p> |

表15 負数の記号のフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| 接頭辞 | <p>それぞれの負の値の左に配置される、負数の接頭辞記号を表示します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • - (負の符号) • なし • \$ • % • [•] <p>デフォルトの接頭辞記号は-です。または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |
| 接尾辞 | <p>それぞれの負の値の右に配置される、負数の接尾辞記号を表示します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • \$ • % • [•] <p>デフォルトの接頭辞記号は「なし」です。</p> |

表16 区切り文字のフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|------------|-----------------------------------|
| 区切り文字 | 数値の3桁ごとの区切り文字および小数点のフォーマットを表示します。 |
| 3桁ごとの区切り文字 | 3桁ごとの区切り文字を表示します。 |
| 小数点 | 小数点を表す文字を表示します。 |

表17 小数位、精度およびスケール属性の全般情報

| フィールド | 説明 |
|----------------------|--|
| 小数位、精度およびスケール属性の全般情報 | <p>インスタンス・ドキュメントを生成すると、XBRLライン・アイテムにマッピングされた数値はrawデータ値とともに保存されます。数値からは、フォーマットと丸め処理が除去されます。値を正しくレポートするには、精度とスケールリングのプロパティの両方を適用する必要があります。たとえば、アイテムを30にマップし、この値を百万の単位で表したい場合、2つの属性を指定する必要があります。まず、数値が百万の単位まで正確に表すように小数位属性を6に設定します。次に、スケール係数を6と指定すると、マップされた値30に6つのゼロが追加され、値30000000がインスタンス・ドキュメントにレポートされます。インスタンス・ドキュメント内のすべての数値には、小数位または精度の属性のいずれかが必要なため、Disclosure Managementでは、インスタンス・ドキュメントに存在するすべての数値データに精度設定を指定できます。また、スケール属性を指定して、インスタンス・ドキュメントに含める正しいゼロ値を決定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 小数位 - 小数位属性は、小数位に基づいてX位置まで数値がどの程度正確であるかを示します。たとえば、小数位属性が0の場合、数値は整数の値まで正確であることを意味します。小数位属性が2の場合、数値は百分の1まで正確であることを意味します。小数位属性は、SEC申告者には必須です。 • 精度 - 精度属性は、数値のどの桁まで正確かを示します。つまり、このライン・アイテムにマッピングされる数値は、インスタンス・ドキュメントに示される値と同じになります(丸め処理なし)。デフォルトでは、Disclosure Managementでは精度設定を使用します。このオプションは常にINFに設定されます。データ・ソースに保管される値がすでに丸められている場合(保管された値250が、実際は250,000であるなど)、インスタンス・ドキュメントの作成後に、作成されたXMLファイルの精度属性を手動で調整することが必要な場合があります。精度属性の詳細は、XBRL 2.1仕様を参照してください。 • スケールリング - スケールリング属性を使用すると、値の単位にスケール係数を乗算する際に使用される係数を指定し、インスタンス・ドキュメントに含める正しい値を算出できます。スケールリングにより、大きな数値をマップする際に、Microsoft WordまたはExcelにゼロを入力する必要がなくなります。 <p>たとえば、値\$30をマップし、実際にはこの値が30百万を表す場合、スケール係数を6に設定する必要があります。</p> |

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | <p>す。これにより、マップされた30にゼロが6個追加され、インスタンス・ドキュメントでは、値30000000がレポートされます。スケール係数-2を30に適用した場合、2つのゼロが減らされるため0.3となります。(これは、パーセンテージをレポートする際に頻繁に使用されます。実際には0.3の数値が、レポートでは30%と示されます。)</p> <p>スケールリングは必須ではありません。係数を使用しない場合、スケールリングは自動的に0にデフォルト設定され、これはスケールリングが適用されないことを意味します。スケールが0の数値30は、30のままです。</p> |
| 小数位 | <p>正確さを持たせる小数点以下の桁数を指定します。この設定は、SEC申告者には必須です。小数点以下の値の正確性を示すには、正の整数で設定を入力します。たとえば、数値ファクトが小数点以下3桁まで正確であることを指定するには、「3」と入力します。別の例として、\$42.38がレポートされている場合、小数位は2に設定されています。値が36.69%の場合、小数位は4に設定されています。また、負(-)の数値を入力し、小数点の左側の値の正確性を示すことができます。たとえば、小数位に-3を割り当てた場合、金額\$30,000は、千の単位まで正確であるということになります。小数位が-6の場合、数値は百万の単位まで正確ということになります。</p> <p>注:</p> <p>小数位の設定をスケールリング・プロパティで補完することが重要になる場合が多くあります。たとえば、値\$30をマップし、実際にはこの値が30百万を表す場合、スケール・プロパティを6に設定する必要があります。この属性により、マップされた30にゼロが6個追加され、インスタンス・ドキュメントでは、値300000000がレポートされます。</p> |
| 精度 | <p>精度の設定を使用する際に選択し、正確に表示する数値の桁数を選択します。</p> <p>たとえば「7」と入力した場合、左側の最初のゼロ以外の桁から数えて7桁目までが正確であるとみなされます。</p> <p>デフォルトでは、Disclosure Managementでは精度設定を使用します。このオプションはINFに設定されます。</p> |

表18 スケールリングのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|---------|------------------------|
| スケールリング | 初期のグローバル・スケール係数を選択します。 |

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | <p>スケーリングとは、各値にスケール係数をかけてインスタンス・ドキュメントに含める正しい値を求める方法です。スケーリングにより、大きな数値をマップする際に、Microsoft WordまたはExcelにゼロを入力する必要がなくなります。スケール係数は、10の指数として定義します。たとえば、ドキュメントのマップされた値が"2"で、スケール係数が"3"の場合、インスタンス・ドキュメントの値は2000です。デフォルトのスケール係数は0で、値のスケーリングは行われません。-1または-2などの負のスケール係数もサポートされています。</p> <p>たとえば、値\$30をマップし、実際にはこの値が30百万を表す場合、スケール係数を6に設定する必要があります。これにより、マップされた30にゼロが6個追加され、インスタンス・ドキュメントでは、値300000000がレポートされます。スケール係数-2を30に適用した場合、2つのゼロが減らされるため0.3となります。(これは、パーセンテージをレポートする際に頻繁に使用されます。実際には0.3の数値が、レポートでは30%と示されます。)</p> <p>スケーリングは必須ではありません。係数を使用しない場合、スケーリングは自動的に0にデフォルト設定され、これはスケーリングが適用されないことを意味します。スケールが0の数値30は、30のままです。</p> |

表19 日付フォーマットのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------------|---|
| 日付フォーマット | <p>「日付フォーマット」ドロップダウンから日付フォーマットを表示します。有効なオプションは、次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • DD.MM.YY(Y) • MM.DD.YY(Y) • DD Month, YY(Y) • Month DD, YY(Y) • DD Mon YY(Y) • Mon DD, YY(Y) • DD/MM/YY(Y) • MM/DD/YY(Y) • カスタム(日付フォーマットは、「カスタム・フォーマット」フィールドに指定する必要があります) |
| カスタム・フォーマット | カスタム日付フォーマットを表示します。 |

表20 文字列のフォーマット・フィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| 文字列 | <p>文字列値のフォーマットを表示します。文字列が xbrl.us:TextBlockItemTypeタイプとその派生タイプの概念に基づく、数値以外のXBRLマッピングで使用可能なフォーマット・オプションがあります。次のフォーマット・オプションを使用できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • リッチ・テキスト - Disclosure ManagementがOfficeドキュメントからHTMLフォーマットのコンテンツを抽出し、このフォーマットを数値以外のアイテムに適用します。 • プレーン・テキスト - Disclosure Managementは対応するファクトのフォーマット値を使用し、フォーマットを数値以外のアイテムに適用します。 • デフォルト - プレーン・テキスト・フォーマットが数値以外のアイテムにデフォルトで適用されます。ただし、特定の文字列タイプとその派生タイプにはリッチ・テキスト・フォーマットを使用するようにデフォルト構成を設定できます。 |

レポートのエクスポート

Disclosure Managementレポートをエクスポートすると、レポート・データに関連するすべての情報が1つのパッケージに収集され、.ZIPファイルに保存されます。.ZIPは、レポートのインポート・プロシージャに使用できます。

パッケージに保存されたレポート・データには、次のデータが含まれます:

- サーバー・データ
 - レポート記述子
 - ドックレット
 - コンテキスト
 - 単位
 - レポートに関連する、概念、ディメンション、タプルのドキュメント・レベルのマッピング
 - データ・ソース・マッピング
- クライアント・データ
 - Microsoft Office WordまたはExcelレポート・ファイル
 - Microsoft Office WordまたはExcelドックレット・ファイル
- 追加のメタデータ情報:
 - エクスポート・プロシージャが実行されたDisclosure Management製品のバージョン
 - パッケージの構造を記述するその他のメタデータ

▶ レポートをエクスポートするには:

1. レポートをMicrosoft WordまたはExcelで開き、Disclosure Managementサーバーに接続します。
2. Disclosure Managementリボンから、「エクスポート」を選択します。

「レポートのエクスポート」画面が表示されます。

3. 「ファイル名」フィールドに、.zipの名前を入力し、「保存」をクリックします。

レポートのインポート

Disclosure Managementのインポート機能を使用すると、次を行えます:

- パッケージ(.zip)からすべてのクライアント・ファイルを解凍します。
- 必要に応じてデータ・ソース(次のような、変更可能なデータ・ソース・パラメータ: server, database, application, data baseなど)を移行します。
- サーバーにサーバー・データを適用します。この処理の間、IDの競合を避けるため、オブジェクト(マッピング、レポート、コンテキストなど)のIDが再生成されます。データ・ソースが移行されると、対応するデータ・ソース・マッピングがこの手順で更新されます。
- クライアント・ファイルに再生成されたサーバー・データを適用します。
- クライアントのSmart Viewレポートに変更されたデータ・ソース・パラメータを適用します。
- クライアント・ドキュメントの再マップされた情報を適用します
- パッケージのバージョンが現在のDisclosure Managementのバージョンより古い場合は、旧バージョンのパッケージを移行します。

▶ レポートをインポートするには:

1. レポートをMicrosoft WordまたはExcelで開き、Disclosure Managementサーバーに接続します。
2. Disclosure Managementリボンから、「インポート」を選択します。

Disclosure Managementレポート・ウィザードが起動されます。

3. 「次」をクリックします。

「インポートするレポート」画面が表示されます。

4. 「ファイル名」フィールドに、ファイルのパスと名前を入力し、「次」をクリックします。

ファイルを参照するには、「参照」をクリックしてファイルに移動し、「開く」をクリックします。

「レポートの場所」画面が表示されます。

5. 「ディレクトリ名」フィールドに、ファイルをインポートするフォルダの名前を入力し、「次」をクリックします。

フォルダを参照するには、「参照」をクリックしてフォルダに移動し、「OK」をクリックします。

Disclosure Managementにより、インポートされたレポートに含まれるすべてのデータ・ソース情報が収集されます。

「データ・ソース」画面が表示されます。

6. 必要に応じてデータ・ソースを確認して変更し、「次」をクリックします。

Disclosure Managementにより、ページに関連付けられたデータ・ソースが取得されます。

「データ・ソース・マッピング」画面が表示されます。

7. データ・ソース・マッピングの競合を解決し、「次」をクリックします。

インポートに成功すると、ウィザードの最終画面が表示されます。

8. 「インポートされたレポートを開きます。」を選択し、「終了」をクリックします。

ドキュメントのフォーマット

すべてのドキュメントに適用するグローバルなドキュメント・プロパティを設定できます。さらに、様々なオプションを使用して、選択されている現在のドキュメントのグローバル設定をオーバーライドできます。

- 数値の接頭辞および接尾辞
- マッピング(ドキュメントのプロパティ)の実行時にMicrosoft Wordドキュメントの数値データを解析するための3桁ごとの区切り文字と小数点
- インスタンス・ドキュメントに登録されているすべての数値データの小数点以下の桁数または精度の設定
- スケーリング係数
- 日付フォーマット

▶ ドキュメントのプロパティを適用するには:

1. いずれかのオプションを選択します:

- グローバルなフォーマット・オプションを設定するには、- 「Disclosure Management」リボンで「プロパティ」アイコン - をクリックして「変換」を選択します。
- 選択したドキュメントにフォーマット・オプションを設定するには - 「Disclosure Management」リボンで「フォーマット」アイコン - をクリックします。

2. オプション: 「接頭辞」または「接尾辞」リストで、正数の接頭辞または接尾辞を指定します。

3. オプション: 「区切り文字」または「区切り文字」リストで、負数の接頭辞または接尾辞を指定します。

4. オプション: 「区切り文字」リストで、現在のレポートで3桁ごとの区切り文字および小数点を表す文字フォーマットを選択します。

カスタムの区切り文字フォーマットを指定するには、「区切り文字」リストから「カスタム」を選択してから、3桁ごとの区切り文字と小数点を選択します。

5. オプション: 「小数位」または「精度」を選択し、ドロップダウンから桁数を選択します。

6. オプション: 「スケーリング」を選択し、ドロップダウンから係数を選択します。

7. オプション: 「日付フォーマット」リストで、レポートの日付フォーマットを選択します。

または、カスタムの日付フォーマットを指定するには、「日付フォーマット」リストで「カスタム」を選択してから、「カスタム・フォーマット」フィールドに日付フォーマットを入力します。

8. 「文字列のフォーマット」ドロップダウンで、文字列値のフォーマットを選択します。



注:

現在のドキュメントのみをフォーマットしている場合は、「リセット」ボタンをクリックしてグローバル・フォーマットに戻すことができます。

9. 「OK」をクリックします。



注:

「サンプル」セクションに、フォーマット選択の結果が示されます。

表21 正数の記号のフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| 接頭辞 | <p>各正の値の左側に置く記号を設定します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • \$ • % • [•] <p>デフォルトの接頭辞記号は「なし」です。または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |
| 接尾辞 | <p>各正の値の右側に置く記号を設定します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • \$ • % • [•] <p>デフォルトの接頭辞記号は「なし」です。または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |

表22 負数の記号のフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|--|
| 接頭辞 | <p>各負の値の左側に置く記号を設定します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • - (負の符号) • なし • \$ • % • [•] <p>デフォルトの接頭辞記号は-です。または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |
| 接尾辞 | <p>各負の値の右側に置く記号を設定します。記号オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • \$ • % • [|

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | <p>・]</p> <p>デフォルトの接頭辞記号は「なし」です。または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |

表23 区切り文字のフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|------------|---|
| 区切り文字 | <p>「区切り文字」リストで、数値の3桁ごとの区切り文字および小数点のフォーマットを設定します。</p> <p>カスタム・フォーマットを指定するには、「区切り文字」リストで「カスタム」を選択します。次に、「3桁ごとの区切り文字」リストで3桁ごとの区切り文字を選択し、「小数点」リストで小数点のフォーマットを選択します。</p> |
| 3桁ごとの区切り文字 | <p>「3桁ごとの区切り文字」リストの値から、3桁ごとの区切り文字を設定します。たとえば、カンマ(,)を選択して値を「1,000」と表示するか、ピリオド(.)を選択して値を「1.000」と表示できます。オプション: カンマ(,),ピリオド(.),アンダースコア(_),(空白)スペース。</p> <p>または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |
| 小数点 | <p>「小数点」リストで、小数点を表す文字を設定します(たとえば、1,000.06)。オプション: カンマ(,),ピリオド(.),アンダースコア(_),(空白)スペース。</p> <p>または、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、リストで別の記号を指定することもできます。</p> |

表24 小数位、精度およびスケール属性の全般情報

| フィールド | 説明 |
|----------------------|---|
| 小数位、精度およびスケール属性の全般情報 | <p>インスタンス・ドキュメントを生成すると、XBRLライン・アイテムにマッピングされた数値はrawデータ値とともに保存されます。数値からは、フォーマットと丸め処理が除去されず。値を正しくレポートするには、精度とスケール属性のプロパティの両方を適用する必要があります。たとえば、アイテムを30にマップし、この値を百万の単位で表したい場合、2つの属性を指定する必要があります。まず、数値が百万の単位まで正確に表すように小数位属性を6に設定します。次に、スケール係数を6と指定すると、マップされた値30に6つのゼロが追加され、値30000000がインスタンス・ドキュメントにレポートされます。インスタンス・ドキュメント内のすべての数値には、小数位または精度の属性のいずれかが必要のため、Disclosure Managementでは、インスタンス・ドキュメントに存在するすべての数値データに精度</p> |

| フィールド | 説明 |
|-------|--|
| | <p>設定を指定できます。また、スケール属性を指定して、インスタンス・ドキュメントに含める正しいゼロ値を決定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 小数位 - 小数位設定は、小数位に基づいてX位置まで数値がどの程度正確であるかを示します。たとえば、小数位属性が0の場合、数値は整数の値まで正確であることを意味します。小数位属性が2の場合、数値は百分の1まで正確であることを意味します。小数位属性は、SEC申告者には必須です。 • 精度 - 精度属性は、数値のどの桁まで正確かを示します。つまり、このライン・アイテムにマッピングされる数値は、インスタンス・ドキュメントに示される値と同じになります(丸め処理なし)。デフォルトでは、Disclosure Managementでは精度設定を使用します。このオプションは常にINFに設定されます。データ・ソースに保管される値がすでに丸められている場合(保管された値250が、実際は250,000であるなど)、インスタンス・ドキュメントの作成後に、作成されたXMLファイルの精度属性を手動で調整することが必要な場合があります。精度属性の詳細は、XBRL 2.1仕様を参照してください。 • スケーリング - スケーリング属性を使用すると、値の単位にスケール係数を乗算する際に使用される係数を指定し、インスタンス・ドキュメントに含める正しい値を算出できます。スケーリングにより、大きな数値をマップする際に、Microsoft WordまたはExcelにゼロを入力する必要がなくなります。 <p>たとえば、値\$30をマップし、実際にはこの値が30百万を表す場合、スケール係数を6に設定する必要があります。これにより、マップされた30にゼロが6個追加され、インスタンス・ドキュメントでは、値300000000がレポートされます。スケール係数-2を30に適用した場合、2つのゼロが減らされるため0.3となります。(これは、パーセンテージをレポートする際に頻繁に使用されます。実際には0.3の数値が、レポートでは30%と示されます。)</p> <p>スケーリングは必須ではありません。係数を使用しない場合、スケーリングは自動的に0にデフォルト設定され、これはスケーリングが適用されないことを意味します。スケールが0の数値30は、30のままです。</p> |
| 小数位 | <p>正確さを持たせる小数点以下の桁数を指定します。この設定は、SEC申告者には必須です。小数点以下の値の正確性を示すには、正の整数で設定を入力します。たとえば、数値ファクトが小数点以下3桁まで正確であることを指</p> |

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | <p>定するには、「3」と入力します。別の例として、\$42.38がレポートされている場合、小数位は2に設定されています。値が36.69%の場合、小数位は4に設定されています。また、負(-)の数値を入力し、小数点の左側の値の正確性を示すことができます。たとえば、小数位に-3を割り当てた場合、金額\$30,000は、千の単位まで正確であるということになります。小数位が-6の場合、数値は百万の単位まで正確ということになります。</p> <p>注:</p> <p>小数位の設定をスケーリング・プロパティで補完することが重要になる場合が多くあります。たとえば、値\$30をマップし、実際にはこの値が30百万を表す場合、スケール・プロパティを6に設定する必要があります。この属性により、マップされた30にゼロが6個追加され、インスタンス・ドキュメントでは、値300000000がレポートされます。</p> |
| 精度 | <p>精度の設定を使用する際に選択し、正確に表示する数値の桁数を選択します。</p> <p>たとえば「7」と入力した場合、左側の最初のゼロ以外の桁から数えて7桁目までが正確であるとみなされます。</p> <p>デフォルトでは、Disclosure Managementでは精度設定を使用します。このオプションはINFに設定されます。</p> |

表25 スケーリングのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|--------|---|
| スケーリング | <p>初期のグローバル・スケール係数を選択します。</p> <p>スケーリングとは、各値にスケール係数をかけてインスタンス・ドキュメントに含める正しい値を求める方法です。スケーリングにより、大きな数値をマップする際に、Microsoft WordまたはExcelにゼロを入力する必要がなくなります。スケール係数は、10の指数として定義します。たとえば、ドキュメントのマップされた値が"2"で、スケール係数が"3"の場合、インスタンス・ドキュメントの値は2000です。デフォルトのスケール係数は0で、値のスケーリングは行われません。-1または-2などの負のスケール係数もサポートされています。</p> <p>たとえば、値\$30をマップし、実際にはこの値が30百万を表す場合、スケール係数を6に設定する必要があります。これにより、マップされた30にゼロが6個追加され、インスタンス・ドキュメントでは、値300000000がレポートされます。スケール係数-2を30に適用した場合、2つのゼロが減らされるため0.3となります。(これは、パーセンテージをレポート</p> |

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | <p>する際に頻繁に使用されます。実際には0.3の数値が、レポートでは30%と示されます。)</p> <p>スケーリングは必須ではありません。係数を使用しない場合、スケーリングは自動的に0にデフォルト設定され、これはスケーリングが適用されないことを意味します。スケールが0の数値30は、30のままです。</p> |

表26 日付フォーマットのフィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------------|---|
| 日付フォーマット | <p>「日付フォーマット」ドロップダウンから日付フォーマットを選択します。有効なオプションは、次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし • DD.MM.YY(Y) • MM.DD.YY(Y) • DD Month, YY(Y) • Month DD, YY(Y) • DD Mon YY(Y) • Mon DD, YY(Y) • DD/MM/YY(Y) • MM/DD/YY(Y) • カスタム(日付フォーマットは、「カスタム・フォーマット」フィールドに指定する必要があります) |
| カスタム・フォーマット | <p>カスタムの日付フォーマットを指定するには、カスタムの日付フォーマットを指定します。</p> |

表27 文字列のフォーマット・フィールドと説明

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| 文字列 | <p>文字列のフォーマットを指定します。文字列が <code>xbrl.us:TextBlockItemType</code> タイプとその派生タイプの概念に基づく、数値以外のXBRLマッピングで使用可能なフォーマット・オプションがあります。次のフォーマット・オプションを使用できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • リッチ・テキスト - Disclosure ManagementがOfficeドキュメントからHTMLフォーマットのコンテンツを抽出し、このフォーマットを数値以外のアイテムに適用します。 • プレーン・テキスト - Disclosure Managementは対応するファクトのフォーマット値を使用し、フォーマットを数値以外のアイテムに適用します。 • デフォルト - プレーン・テキスト・フォーマットが数値以外のアイテムにデフォルトで適用されます。ただし、特定 |

| フィールド | 説明 |
|-------|---|
| | の文字列タイプとその派生タイプにはリッチ・テキスト・フォーマットを使用するようにデフォルト構成を設定できます。 |

7

マスター・ドキュメントおよびドックレットの操作

この項の内容:

| | |
|---|-----|
| マスター・ドキュメントの使用 | 103 |
| ドックレットの追加 | 104 |
| ドックレットの再配置 | 105 |
| ドックレットのスタンドアロン・レポートの作成 | 105 |
| マスター・ドキュメント内でのドックレットの非表示 | 106 |
| ドックレットの除去 | 106 |
| Microsoft Wordを使用した変更およびドックレットの追跡 | 107 |

マスター・ドキュメントの使用

Disclosure Managementでは、マスター・ドキュメント機能を使用して、最後のレポートを次のレポートの開始時に使用できます。管理者はMicrosoft Wordでマスター・ドキュメントを使用して、最後のレポートを簡単にコピーし、Microsoft WordおよびExcelセクションをドキュメントに埋め込み、名前を変更してレポート・ビューを現在の期間または年に更新できます。

マスター・ドキュメントは、ドックレットと呼ばれるサブドキュメントのコンテナ・ファイルとして機能します。登録されたMicrosoft Wordドキュメントは、マスター・ドキュメントとして使用できます。Disclosure Managementドキュメントは、1つ以上のドックレットが挿入されると、マスター・ドキュメントになります。

ドックレットとは、マスター・ドキュメントに含める選択データを含む個別のMicrosoft WordまたはExcelファイルです。ドックレットにより、複雑なレポートでの操作をパーツに分割し、後でこれらのパーツからレポート全体を組み立てることができます。また、論理的に独立したレポートのピースを分割し、各ピースを別々に操作することで、正確さおよび効率の向上が可能になります。



注:

Disclosure Managementドキュメントを次の期間または四半期にロール・フォワードするには、[67ページのDisclosure Managementドキュメントのロールオーバー](#)を参照してください。

レポートをマスター・ドキュメントとして保存し、ドックレットを追加すると、Disclosure Managementはマスター・ドキュメントとドックレットが存在するサブフォルダに、対応するMicrosoft WordまたはExcelファイルを保存します。マスター・ドキュメントとドックレットは、同じフォルダに存在する必要はありませんが、ドックレットをマスター・ドキュメントに追加した後、移動または削除しないでください。また、Disclosure Managementで作成されたXMLファイルも直接変更することはできません。

▶ マスター・ドキュメントを作成するには:

1. Microsoft Wordでメイン・レポートを開き、**Disclosure Management**サーバーに接続します。
2. 「**Disclosure Management**」リボンで「レポート・マネージャ」を選択します。
3. 「**Disclosure Management**」リボンで「登録」を選択します。
4. 「レポート名」に、マスター・ドキュメントの名前を入力し、「OK」をクリックします。

マスター・ドキュメントのメイン・コンテンツを作成後にマップし、ドックレットを追加できます。

ドックレットの追加

ドックレットには、データ・ソースからの出力、手動入力データまたは関数グリッドなどの複数のソースからのコンテンツが含まれます。ドックレットのデータは、通常のレポートと同様にマップできます。マスター・ドキュメントにドックレットを追加すると、単位/コンテキストのリストがマージされます。その結果、すべてのコンテキストと単位をマスター・ドキュメントとドックレットの両方に使用できます。ドックレットは静的ファイルですが、レポート・マネージャで開いて変更し(マッピングの実行など)、保存し閉じてリフレッシュするたびに、マスター・ドキュメント内で再生成されます。ドックレット内のデータは、マスター・ドキュメントに追加される前または後のどちらのタイミングでもマップできます。

ドックレットは「新規の追加」ボタンを使用して、レポート・マネージャによってマスター・ドキュメントに追加されます。

「新規の追加」ボタンをクリックした場合、次のいずれかの場所からドックレットを選択できます。

- ファイル・システム - これが選択されている場合、これはリポジトリに保存されマスターに接続される正規の非DMドキュメント(Excel, Word)である必要があります。
- 他のマスター・ドキュメントまたはスタンドアロン・ドキュメントからのドックレットなど、DMリポジトリの他の場所
- マスター・ドキュメントにすることはできません
- ドックレット名は一意である必要があります

ドックレットの追加が終了したら、「完了」ボタンをクリックします。



注:

マスター・ドキュメントで関数グリッドを使用する際のベスト・プラクティスは、関数グリッドを直接挿入するかわりに、それぞれのドックレットに関数グリッドを含め、マスター・ドキュメントにドックレットを追加することです。

▶ ドックレットをマスター・ドキュメントに追加するには:

1. マスター・ドキュメントが開いている状態で、マスター・ドキュメントが登録されていることを確認します。「Disclosure Management」リボンで「登録」アイコンが有効になっている場合、ドキュメントは登録されていません。アイコンをクリックして、ドキュメントを登録します。
2. マスター・ドキュメントが開いている状態で、ドックレットのコンテンツを埋め込むドキュメントにカーソルを移動します。
3. 「**Disclosure Management**」リボンで「管理」アイコン - を選択します。「Disclosure Managementレポート・マネージャ」パネルが表示されます。
4. 「編集」アイコン - - をクリックしてから「追加」アイコン - をクリックすると、「開く」ダイアログが表示されます。
5. 挿入するドックレットに移動して強調表示し、「開く」をクリックします。

6. 「Disclosure Managementレポート・マネージャ」ペインで「完了」をクリックします。ドックレットのコンテンツが読取り専用コンテンツとしてマスター・ドキュメントに埋め込まれます。

▶ ドックレットのデータをマップするには:

1. **Disclosure Management**サーバーに接続します。
2. マスター・ドキュメントを開きます。
3. **Disclosure Management**リボンで「管理」を選択して、Disclosure Managementレポート・マネージャを開きます。
4. ドックレットを選択し、ショートカット・メニューで「開く」をクリックして、メイン・ウィンドウにドックレットを表示します。
5. データ・ポイントまたはデータ・ソースを選択し、マッピングを実行します。



注:

ドックレットに変更を加えた際に、ドックレット内のすべての値を再マップしなくても済むようにするには、次の手順を実行してブックマークをオンにします。

- a. 「オプション」>「詳細」を選択します。
 - b. ブックマークを表示を選択します。
6. ドックレットを保存して、閉じます。
 7. 切替えドロップダウン()で、「**Disclosure Management**レポート・マネージャ」を選択します。マスター・ドキュメントに移動し、マスター・ドキュメントに関連付けられているドックレット・リストを展開します。
 8. ドックレットを選択し、「リフレッシュ」アイコン - をクリックします。

ドックレットの再配置

マスター・ドキュメントが最初にチェックアウトされているかぎり、マスター・ドキュメント内で1つまたは複数のドックレットの位置を移動することができます。

▶ ドックレットを再配置するには:

1. **Disclosure Management**で、ドックレットを含むマスター・ドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management**」リボンで「管理」を選択して、「Disclosure Managementレポート・マネージャ」ダイアログを表示します。
3. 再配置するドックレットを強調表示し、**編集モードの表示ボタン** - を選択します。
4. ドックレットを再配置するには、「上へ移動」または「下へ移動」ボタン - をクリックします。
5. 「完了」をクリックします。場所の変更を受け入れるには、「完了」を選択する必要があります。
6. マスター・ドキュメントにドックレットの新しい場所が表示されます。

ドックレットのスタンドアロン・レポートの作成

ドックレットをレポートとして保存することで、新しいスタンドアロン・レポートとしてドックレットのコピーを作成できます。スタンドアロン・レポートとして保存した後、別のマスター・ドキュメントに挿入できます。スタンドアロン・レポートとして保存されたドックレットでは、ソース情報の取得元がそのドックレットまたは静的値である同じXBRLマッピング、コンテキスト、単位、脚注、タプル・グループおよび変数がすべて保持されます。ドックレットでは、マスター・ドキュメントのレポート・プロパティが保持されます。



注:

最初にスタンドアロン・レポートを作成しなくても、ドックレットを別のマスター・ドキュメントに挿入できます。

▶ ドックレットのスタンドアロン・レポートを作成するには:

1. **Disclosure Management**でマスター・ドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management**」リボンで「**管理**」を選択して、「Disclosure Managementレポート・マネージャ」ダイアログを表示します。
3. スタンドアロン・レポートとして使用するドックレットを強調表示し、「**アクション**」ドロップダウンを選択してレポートとして**保存**を選択します。

マスター・ドキュメント内でのドックレットの非表示

ドックレットのコンテンツを非表示にして、出力に表示されないようにできます。



注:

ドックレットのコンテンツを非表示にしても、そのドックレットのXBRLマッピングは保持され、生成されたXBRLインスタンスに含められます。コンテンツはマスター・ドキュメントに表示されたままになります。

▶ マスター・ドキュメント内でドックレットを非表示にするには:

1. **Disclosure Management**でマスター・ドキュメントを開きます。
2. 「**Disclosure Management**」リボンで「**管理**」を選択して、「Disclosure Managementレポート・マネージャ」ダイアログを表示します。
3. 非表示にするドックレットを強調表示し、「**アクション**」ドロップダウンを選択して「**非表示**」を選択します。



注:

選択すると、「非表示」オプションは「再表示」に変わります。ドックレットを再表示するには、「再表示」オプションを使用します。

ドックレットの除去

マスター・ドキュメントが最初にチェックアウトされているかぎり、マスター・ドキュメントからドックレットを削除できます。



注:

ドックレットを除去すると、ファイルおよび関連付けられているすべてのマッピングも削除されるため、ドックレットは使用できなくなり、ドックレットの再マップが必要になります。ファイルを保持しつつドックレットを除去する場合は、レポートとして保存機能を使用します。

▶ ドックレットを除去するには:

1. マスター・ドキュメントを開いた状態で、「**Disclosure Management**」リボンから「**管理**」アイコン - を選択して、「Disclosure Managementレポート・マネージャ」ペインを開きます。
2. ペインでドックレットを選択し、「**編集**」アイコン()をクリックして「**除去**」アイコン()をクリックします。

Microsoft Wordを使用した変更およびドックレットの追跡

Microsoft Wordの変更履歴機能を使用すると、インスタンス・ドキュメントの生成および検証中に問題が発生する場合があります。また、Microsoft Wordドックレットで変更履歴機能を有効にすると、ドックレットに埋め込まれたすべての変更マークアップが、マスター・ドキュメントによってインポートされます。

これは、検証およびインスタンスの生成のルーチンで問題となる場合があります。たとえば、マップされた値123の2が4で置き換えられた場合(したがって、結果の値は143)、変更マークアップを含む数値は、インスタンス・ドキュメント内で1423と表示され、それが検証されます。

この動作を回避するには、次の解決策のいずれかを選択します:

1. 「校閲」タブで「すべての変更を許可」オプションを選択し、変更履歴オプションを無効にして、変更履歴機能を無効にします。この解決策では、すべての変更がコミットされ、変更マークアップはMicrosoft Wordのドックレットから完全に削除されます。
2. インスタンス・ドキュメントの生成および検証を実行する前に、変更履歴機能が、最終版(マークアップの表示)(ドキュメントを開いたときのデフォルト)から最終版に変更されていることを確認してください。最終バージョンのみが、マスター・ドキュメントにインポートされるようにする必要があります。

2番目の解決策は、変更マークアップがマスター・ドキュメントに追加されないようにするものではないことに注意してください。インスタンス・ドキュメントの生成、および検証に関連する問題の解決のみが行われます。



XBRLおよびDisclosure Managementの用語集

一般的なXBRL用語の定義は、次のとおりです:

表28 XBRLの用語および定義

| 用語 | 説明 |
|-----------|--|
| 抽象 | 階層内で関連する要素をまとめるためにのみ概念が使用されることを表す、概念の属性を示します。抽象概念を使用してインスタンス・ドキュメント内のデータをマップすることはできません。 |
| Arc | Arcは、合計アイテムArcのことです。合計アイテムArcは、アイテム代替グループ内にありタイプが数値である概念間のみの関係を表す必要があります。これらは、概念間の集約関係を表します。これらの各関係は、合計概念と呼ばれる1つの概念とコントリビューション概念と呼ばれる別の概念の関係です。 |
| 属性 | 概念/要素のプロパティ |
| 軸 | インスタンス・ドキュメントでは、軸は、ファクトおよびファクトのレポート方法を分類します。たとえば、一定期間において、総利益を販売地域軸または事業部門軸で分類できます。 |
| 計算リンクベース | 計算リンクベースは、タクソノミ・スキーマ・ドキュメント内のアイテム・セットに対する基本操作の定義を許可するように設計されています。これらの計算を使用して、XBRLインスタンス・ドキュメント内でこれらの操作が正しく計算されたかどうかを確認できます。計算リンクベースでは、基本的な加算といくつかの乗算が提供されます。 |
| 計算トレース | XBRLドキュメントの計算結果をすべて同じツリー・ビューに編成します。拡張リンク、および拡張リンクにハイパーリンクされた単位、および単位(下部)別にデータをソートし、加算が合計を表すインスタンス値とは異なる場合の差異を記載します。 |
| データ型(タイプ) | 概念の特定のデータ型または値の範囲を保持可能なデータ・ストレージ・フォーマットを示します。データ型の例には、10進数や文字列があります。 |

| 用語 | 説明 |
|------------|--|
| ドキュメント・データ | Microsoft Officeドキュメント内に存在するデータを意味します。最初のリリースの場合、サポートされるOfficeドキュメントにはMicrosoft ExcelまたはWordがあります。一般的なドキュメント・データという用語は、Microsoft Excel内の単一セル、Word内の単一の単語、またはWord内の段落全体を意味する場合があります。ドキュメント・データは全般的に、Disclosure Managementマッピング・ツールによってマップされるデータまたはマップ可能なデータを表すために使用されます。 |
| ドキュメント識別子 | Disclosure Managementの非データ・ソース・マッピングがあるすべてのOfficeドキュメントには、ドキュメント識別子(documentNameとも呼ばれます)が割り当てられます。このプロパティは、マッピング・リポジトリ内のOfficeドキュメントを識別するために使用されます。このプロパティの値は、カスタムXMLとしてOfficeドキュメント内に格納されます。documentNameプロパティは、データ・ソース・マッピングで必要になったり使用されることはありません。 |
| ドメイン | ドメインは、XBRLディメンションのメンバーです。ドメインは、1つ以上の子要素があるという点を除けば、ドメイン・メンバーに似ています。ドメイン・メンバーは、別のドメインの子(埋込みドメイン)である場合があります。ただし、ドメイン・メンバーに1つ以上の子があるかぎり、ドメイン・メンバーはドメインであるとみなされます。ドメインとドメイン・メンバーのもう1つの相違点は、ドメインは常にそのメンバーの集約であるとみなされる点です。ドメイン・メンバー(子)を集約することにより、ドメインの値を計算できます。タクソノミ内では、ドメインはxbrlアイテム代替グループ属性を使用して識別されます。ドメインは抽象要素でないため、マッピング可能です。たとえば、「地域」ディメンション内で、「北米」、「米国」、「欧州」をすべてドメイン・メンバーにできます。 |
| ファクト値 | XBRLの概念が関連付けられたデータを示します。ファクト値をドキュメント・データという用語と区別することが重要です。ドキュメント・データはOfficeドキュメントの一部であるのに対し、ファクト値は通常XBRLインスタンス・ドキュメントの一部です。マッピング・フェーズでは、ドキュメント・データとファクト値を区別なく使用できます。ただし、主な違いは、ファクト値には必要なXBRLマッピング(概念、コンテキストおよび単位)がすべて含まれるのに対し、ドキュメント・データではマッピングが完備されていなくてもかまわない点です。ドキュメント・データの元はOfficeファイルです; これは、後で(フォーマットなしで)XBRLインスタンス・ドキュメントにコピーされます。 |
| 財務諸表 | 企業の期別財務情報(四半期次、年次など)が記載された財務レポート |

| 用語 | 説明 |
|----------------|---|
| 式トレース | 式トレースは、XBRLドキュメントのすべての式の結果を同じツリー・ビューに編成します。拡張リンク、および拡張リンクにハイパーリンクされた単位、および単位(下部)別にデータをソートし、式の失敗を下部に記録します。 |
| ハイパーキューブ | XBRLディメンションの最上位コンテンツ。xbrldt:hypercubeItem代替グループ属性。ディメンションは常に抽象要素であるため、マップすることはできません。Disclosure Managementでは、ハイパーキューブは「タクソノミ」ペインの「定義ビュー」に表示されます。 |
| マッピング | 財務諸表データの列と行のタクソノミ・アイテムと、拡張によって作成する必要があるアイテム間の相関。 |
| ネームスペース | XML用語です。ネームスペースは、XMLの概念を一意に識別するためのメカニズムを提供します。このメカニズムはUniversal Resource Identifier (URI)と呼ばれます。XBRLは、ネームスペースを使用して、タクソノミおよびその要素定義を定義する組織を識別します。たとえば、US GAAPタクソノミのネームスペースには次の接頭辞が付きます: http://xbrl.us/us-gaap/ 。ただし、ネームスペースの接頭辞はネームスペースには含まれません。 |
| nillable | すべてのタクソノミ概念に適用されるプロパティ。nillableは、概念に空の値を設定できるかどうかを示します。 |
| 期間タイプ | 概念が一時点と期間のどちらとしてレポートされるかを示す、概念の属性。 |
| 表示関係ビュー | 親子階層において概念がタクソノミ別に配置されます。 |
| 関係 | xlink標準を使用して作成される、2つの概念間の関係。これは常に1つの概念から別の概念に向かう関係です。これは、起点と終点をエンドポイントとしてxlinkによって作成される、方向付きの関係です。関係の名前はその役割です。1つの概念で複数の関係にかかわることができます。たとえば、1つの概念が複数の言語別ラベルを持つことができます。 |
| スキーム | エンティティIDの命名機関への参照。たとえば、コンテキストがUS GAAPフレームワークを参照するよう指定できます。 |
| タクソノミ拡張(XLink) | 拡張は、基本タクソノミに対する追加です。タクソノミを追加または拡張する場合、基本タクソノミの構造を重ね合わせます。たとえば、拡張は、概念の関係、計算、リンクベースまたはビジネス・ルールの追加で構成できます。これにより、独自のレポート要件に基づき、必要に応じてアイテムを追加できます。基本タクソノミを拡張する機能は、Disclosure Management XBRLタクソノミ・デザイナーに搭載されています。 |

| 用語 | 説明 |
|-------------------|--|
| 検証 | インスタンス・ドキュメントおよびタクソノミがXBRL仕様の要件に関連していることを確認する方法。 |
| XBRL概念/要素 | タクソノミ内で定義されているコンポーネント(アイテム、タプル、ディメンション、ドメイン)。 |
| XBRLコンテキスト | <p>ビジネス・エンティティ、レポート期間およびオプションのシナリオに関する情報を定義します。このメタデータ・セットは、財務レポート内のファクトを解釈します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • エンティティ - 会社または個人(「Oracle Corporation」など) • 期間 - 日付、四半期または年次累計(「2008年5月31日」など) • シナリオ・実績など、ファクトのカテゴリ。通貨や共有などの単位は、数値および小数ファクトにのみ適用されます |
| XBRLディメンション | <p>ディメンションは、ハイパーキューブのスライスまたは軸です。1つのXBRLディメンションには、1つ以上のドメインが含まれます。XBRLは、明示的ディメンションと型付きディメンションの2つのタイプのディメンションを定義します。タクソノミ内では、ディメンションはxbrldt:dimensionItem代替グループ属性を使用して識別されます。ディメンションは常に抽象要素であるため、マップすることはできません。たとえば、「地域」、「会計」、「シナリオ」および「製品」はすべてハイパーキューブ内でディメンションとして定義できます。Disclosure Managementでは、ハイパーキューブは「タクソノミ」ペインの「定義ビュー」に表示されます。</p> |
| XBRLインスタンス・ドキュメント | 1つ以上のXBRLタクソノミからのマッピングを使用した財務ビジネス・レポート情報が含まれるXMLファイル |
| XBRLスキーマ | <p>XMLスキーマは、XMLインスタンス・ドキュメントおよびポキャブラリの仕様に関するWorld Wide Web Consortiumの標準です。XMLスキーマを使用してXMLインスタンス・ドキュメントを定義することにより、開発者は、標準XMLパーサーの検証プロパティを使用してドキュメント定義に対してデータを機械的に検証できます。XMLスキーマ標準に合わせて記述されるすべてのスキーマをWorld Wide Web Consortiumの「Schema for schemas」に対して検証する必要があります。XMLスキーマ標準は、次のサイトに定義されています: http://www.w3.org/XML/Schema</p> |
| XBRL仕様 | XBRL構築に使用されるXMLセマンティック、構文およびフレームワークの説明およびガイドライン。 |
| XBRLタクソノミ | XBRLインスタンス・ドキュメントの作成に使用される概念、ラベル、計算および指示からなる、XMLベースのディクショナリ。 |

| 用語 | 説明 |
|---------|---|
| | タクソノミ全体はDisclosure Management XBRLタクソノミ・デザイナーで表示できますが、概念構造はMicrosoft Word、ExcelまたはOracle Hyperion Financial Reportingで使用可能なDisclosure Managementマッピング・ツールで表示できます。 |
| XBRLタプル | タプルは、複数の値が含まれるファクトで、ネストしたアイテムを保持した単一のXML概念によって識別されます。1つのタプル・メンバーのみでは十分な関連情報が提供されない場合があります;ただし、タプル・メンバーのグループによって必要な情報が提供されます。たとえば、「会社の住所」というタプル概念は、次のタプル・メンバーで構成されます:「名前」、「番地」、「市区町村」、「都道府県」、「郵便番号」および「国」。単一のタプル・メンバー(「市区町村」など)のみでは「会社の住所」という概念を記述するには十分ではありません。すべてのタプル・メンバーが揃ったときのみ概念が有効になります。Disclosure Managementマッピング・ツールの「概念」タブの下には、タクソノミ内に定義されている既存のすべてのタプルが表示されるタプル・ビューがあります。 |
| XBRL単位 | 数値を測定する単位。単位の例としてドルや株式などがあります。 |

B

EDGAR検証メッセージ

EDGAR検証プロセスでは、Disclosure Managementによって提出物がチェックされ、エラーまたは問題が発生した場合は、EDGAR Filer Manuals (第I - III巻)に詳述されているガイドラインに基づいて申告者に警告されます。EDGARでは、エラーが重大なエラーまたは警告に分類されます。重大なエラーの場合、提出物のXBRL以外の部分はEDGARに合格しますが、XBRLは申告から除去されます。申告をEDGARに提出する前に、エラーを修正する必要があります。次のリストで、Oracle Hyperion Disclosure Managementによって戻されるエラーまたは警告メッセージ、およびこれらのエラーの解決策について説明します。

表29 EDGAR検証メッセージ

| メッセージ | 説明 | 解決策 |
|--|---|--|
| イメージ{0}に無効な属性{1}がありません | HTMLドキュメントに無効な属性{1}が埋め込まれています。DYN SRC、LOOP、LOOPDELAY、およびCONTROLS属性はこのタグではサポートされていません。 | 申告をEDGARに提出する前に、無効なイメージ属性をHTMLドキュメントから削除するか修正してください。 |
| 不適切な外部参照{0}が見つかりました: {1} | EDGAR申告に添付されたHTMLドキュメントに、無効な外部参照が埋め込まれています。参照できるのは提出物に含まれるドキュメントのみです。以前に提出した申告も参照できます。(SECのパブリックWebサイトでは、目的の申告を探すためにEDGAR申告の履歴を検索できます)。モジュールおよびセグメント・ドキュメントにHTML外部(グラフィック)参照を含めることはできません。添付ドキュメントに重複する名前を付けることもできません。 | 申告をEDGARに提出する前に、外部参照をHTMLドキュメントから削除するか修正してください。 |
| 無効なイメージ・タイプ(GIFまたはJPEGにする必要があります): {0} | HTMLドキュメントでは、JPGおよびGIFグラフィック・ファイルのみ参照できます。 | 申告をEDGARに提出する前に、無効なグラフィック参照をHTMLドキュメントから削除するか修正してください。 |
| HTMLドキュメント内で無効なHTMLタグ{1}の{0}インスタンスが見つかりました | HTMLドキュメント内のすべてのタグは、EDGARで許容されるHTML 3.2タグのサブセットに準拠している必要があります。HTMLドキュメント内のいずれかのタグがこの規格に準拠して | HTMLドキュメント内では、SECで承認されたHTML 3.2タグ・セットのみを使用してください。 |

| メッセージ | 説明 | 解決策 |
|-------|-------------------------|-----|
| | いない場合、EDGARでエラーが表示されます。 | |